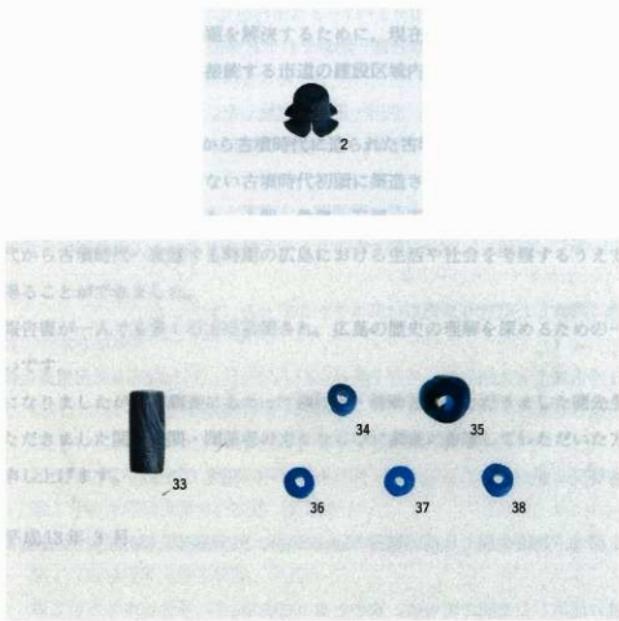


成岡A地点遺跡

—広島市安芸区中野東二丁目所在—

2001

財団法人広島市文化財団



はしがき

広島市安芸区の瀬野川流域は、両岸に山々がそびえる、豊富な自然に恵まれた町です。

また、現在の広島市域と東広島市域を結ぶ交通の要衝として、古代の山陽道から現代のJR山陽本線・国道2号に至るまで幹線が通り、深い歴史を刻んできました。そのことを示すように、丘陵上には貝塚や古墳、中世の山城など、数多くの遺跡が確認されていますが、現在まで、そのほとんどは調査されず保存されてきました。

ところで、瀬野川地域の国道2号は、以前から渋滞が慢性化しており、また交通事故が多発していました。これらの問題を解決するために、現在、東広島バイパスの建設が進められています。このバイパスに接続する市道の建設区域内から発見されたのが、成岡A地点遺跡です。

調査の結果、弥生時代終末期から古墳時代に造られた古墳3基と集落跡を確認しました。

特に古墳は、市域全体でも数少ない古墳時代初頭に築造されたもので、瀬野川流域では初めての調査例となりました。また、土器・鉄器・石器・玉類などの遺物も出土しており、弥生時代から古墳時代へ変遷する時期の広島における生活や社会を考察するうえで貴重な資料を得ることができました。

この報告書が一人でも多くの方に活用され、広島の歴史の理解を深めるための一助になれば幸いです。

最後になりましたが、本調査にあたって御指導・御助言をいただきました諸先生方、御協力いただきました関係機関・関係者の方々ならびに調査に従事していただいた方々に厚く御礼申し上げます。

平成13年3月

財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課

例　　言

1. 本書は広島市安芸区中野東二丁目における市道安芸1区押手線建設工事に伴い、平成11年度に実施した成岡A地点遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、広島市安芸区役所農林建設部土木課から委託を受け、財団法人広島市文化財団が実施した。
3. 本書の執筆・編集は、I・III-2・IV-3は田村規充が、II・III-1・IV-1, 2, 4は荒川正己が、III-2-(3)-①は若島一則がそれぞれ分担して実施した。
4. 遺構の実測及び写真撮影は、荒川・田村が実施した。遺物の実測及び図面の製図は、荒川・田村・福原茂樹・岡野孝子が、写真撮影は荒川が実施した。
5. 人骨の取り上げ及び分析は土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム館長松下孝幸氏に依頼した。また、付録は、同じく松下孝幸氏に委託したもので、一部改変して掲載した。
6. 本書に掲載した航空写真撮影は、スタジオ・ユニに委託した。
7. 第3号古墳出土の剣の布と木質・鑑の矢柄・ガラス小玉、またSH1出土炭化材に関する分析及び調査は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
8. 本書挿図に使用した方位は、第1図以外はすべて磁北である。
9. 第1図は、建設省国土地理院発行の50,000分の1の地形図（海田市）を複製した。
10. 本書に使用した遺構の略号は、次のとおりである。
S H : 墓穴住居跡 S B : 掘立柱建物跡 S X : テラス状遺構 S K : 土坑 P : ピット
11. 本遺跡発掘調査で得られた資料は、広島市教育委員会から委託を受けて・財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課において保管している。

目 次

I	はじめに.....	1
II	位置と環境.....	2
III	遺構と遺物	
1	古墳.....	6
2	その他の遺構.....	37
IV	ま と め.....	66
	付編	
	広島市成岡第2号古墳出土の人骨.....	71
	成岡A地点遺跡出土遺物の自然科学分析.....	84

付表目次

第1表	古墳出土土器観察表.....	18
第2表	骨鎌形鉄鎌観察表.....	36
第3表	その他の遺構出土土器観察表.....	62

図版目次

卷頭図版	古墳出土遺物	
図版表紙	成岡A地点遺跡遠景（航空写真・北東から）	
図版1 a	成岡A地点遺跡調査前（航空写真・東から）	
b	成岡A地点遺跡調査後（航空写真・東から）	
図版2 a	第1号古墳墳丘全景（北東から）	
b	第1号古墳埋葬主体木棺痕跡（北西から）	
図版3 a	第1号古墳埋葬主体遺物出土状況（北西から）	
b	第1号古墳埋葬主体完掘後（北西から）	
図版4 a	第2号古墳墳丘全景（北東から）	
b	第2号古墳墳丘全景（西から）	
図版5 a	第2号古墳埋葬主体石棺開棺前（北西から）	
b	第2号古墳埋葬主体石棺開棺後（北西から）	
図版6 a	第2号古墳埋葬主体人骨出土状況（北西から）	
b	第2号古墳埋葬主体遺物出土状況（北西から）	
図版7 a	第3号古墳墳丘全景（東から）	
b	第3号古墳墳丘全景（南から）	
図版8 a	第3号古墳第1主体木棺痕跡検出状況（北東から）	
b	第3号古墳第1主体棺台土及び遺物出土状況（北東から）	

- 図版 9 a 第3号古墳第1主体棺台土及び遺物出土状況（北西から）
b 第3号古墳第1主体鉄剣等出土状況（南東から）
- 図版 10 a 第3号古墳第1主体完掘後（北東から）
b 第3号古墳第2主体（南から）
- 図版 11 a 第3号古墳第3主体（南東から）
b 第3号古墳第4主体（南東から）
c 第3号古墳第5主体（東から）
- 図版 12 a 第3号古墳第6主体（南東から）
b 第3号古墳第7主体（東から）
c 第3号古墳第8主体（北東から）
- 図版 13 a 第3号古墳第9主体（東から）
b 第3号古墳第10主体木棺痕跡（北西から）
- 図版 14 a 第3号古墳第10主体完掘後（北西から）
b 古墳遺構出土遺物（1）
- 図版 15 古墳遺構出土遺物（2）
- 図版 16 鉄剣付着布片顕微鏡写真
- 図版 17 鉄剣付着木材顕微鏡写真
- 図版 18 a S H 1 炭化材出土状況（北から）
b S H 1（北から）
- 図版 19 a S B 1（南から）
b S X 1（北東から）
- 図版 20 a S X 1 土器出土状況（南東から）
b S H 2（南東から）
- 図版 21 a S K 1（北東から）
b S K 2（東から）
c S K 3（東から）
- 図版 22 a S H 3（北から）
b S X 2（東から）
- 図版 23 a S X 2 土器だまり（東から）
b S X 3（北から）
- 図版 24 a S K 4（北東から）
b S K 4 貝層出土状況（東から）
c S K 5（北東から）
- 図版 25 その他の遺構出土遺物(1)
- 図版 26 その他の遺構出土遺物(2)
- 図版 27 その他の遺構出土遺物(3)

- 図版 28 その他の遺構出土遺物(4)
 図版 29 その他の遺構出土遺物(5)
 図版 30 その他の遺構出土遺物(6)
 図版 31 成岡第2号古墳出土人骨（男性・老年）
 図版 32 成岡第2号古墳出土人骨（男性・老年）

挿図目次

第1図	成岡A地点遺跡の位置と周辺遺跡分布図	3
第2図	成岡A地点遺跡遺構配置図	7
第3図	第1号古墳実測図	9
第4図	第1号古墳埋葬主体実測図	9
第5図	第1号古墳埋葬主体遺物出土状況実測図	11
第6図	第1号古墳出土遺物実測図	11
第7図	第2号古墳実測図・土層断面図	13
第8図	第2号古墳埋葬主体実測図	15
第9図	第2号古墳埋葬主体人骨・遺物出土状況実測図	17
第10図	第2号古墳出土遺物実測図	17
第11図	第3号古墳実測図	19
第12図	第3号古墳第1主体実測図	21
第13図	第3号古墳第1主体遺物出土状況実測図	26
第14図	第3号古墳第2主体実測図	28
第15図	第3号古墳第3主体実測図	28
第16図	第3号古墳第4主体実測図	28
第17図	第3号古墳第5主体実測図	29
第18図	第3号古墳第6主体実測図	29
第19図	第3号古墳第7主体実測図	29
第20図	第3号古墳第8主体実測図	31
第21図	第3号古墳第9主体実測図	31
第22図	第3号古墳第10主体実測図	33
第23図	第3号古墳出土遺物実測図〔1〕	33
第24図	第3号古墳出土遺物実測図〔2〕	34
第25図	S H 1 実測図	38
第26図	S H 1 炭化材出土状況実測図	38
第27図	S B 1 実測図	40
第28図	S K 1 実測図	40
第29図	S X 1・S H 2 実測図	41

第 31 図	S H 3 実測図	45
第 32 図	S K 2 実測図	45
第 32 図	S K 3 実測図	45
第 33 図	S X 2 実測図	47
第 34 図	S K 4 実測図	50
第 35 図	S K 5 実測図	50
第 36 図	S X 3 実測図	51
第 37 図	その他の遺構出土遺物実測図 [1]	55
第 38 図	その他の遺構出土遺物実測図 [2]	56
第 39 図	その他の遺構出土遺物実測図 [3]	57
第 40 図	その他の遺構出土遺物実測図 [4]	58
第 41 図	その他の遺構出土遺物実測図 [5]	59
第 42 図	その他の遺構出土遺物実測図 [6]	60
第 43 図	その他の遺構出土遺物実測図 [7]	61

I はじめに

広島市教育委員会（以下市教委とする）は、平成10年1月26日に、広島市安芸区役所農林建設部土木課（以下安芸区役所とする）から「市道安芸1区押手線」工事区域内における文化財等の有無及び取り扱いについて照会を受けた。市教委は、当該区域内に周知遺跡として成岡遺跡が存在し、計画範囲には少なくとも2基の古墳がかかるることを確認し、同年9月21日に、安芸区役所に対して、この旨を回答した。遺跡の取り扱いについて、市教委と安芸区役所は協議をしたが、計画の変更是困難との結論に達し、記録保存の措置を講ずることとなった。安芸区役所は、平成10年10月30日付で、財団法人広島市文化財団（以下文化財団とする）に発掘調査及び報告書作成の実施を依頼した。これを受け、文化財団文化科学部文化財課では現地調査を平成11年7月から平成12年2月にかけて実施した。報告書作成は、平成12年3月から平成13年3月にかけて実施した。

調査委託者 広島市安芸区役所 農林建設部土木課

調査主体 財団法人広島市文化財団

調査担当課 財団法人広島市文化財団 文化科学部 文化財課

調査関係者 竹本 輝男 常務理事

堂官 正昭 文化科学部長

佐川 清 文化財課長（平成11年度）

石田 彰紀 文化財課長（平成12年度）

若島 一則 文化財課主任指導主事（平成12年度）

今田日出登 文化財課主任

福原 茂樹 文化財課指導主事

調査者 荒川 正己 文化財課学芸員

田村 規充 文化財課学芸員

調査補助員（50音順）

乾操子 今田章範 岩村京子 大塚勝宏 梶谷ミエ子 加藤恒子 酒本由理郁 佐藤信子

柴田昌記 菅原彰子 住川香代子 住川義治 住本亥司雄 高木素子 中野信義 西村清志

野田希和子 橋本礼子 秦次雄 浜田由倭子 濱本文夫 藤岡真弓 藤本信之 古本弘

森田美恵子 森田美智子 矢島とみえ 横光美里 和田実千代

また、広島市安芸区役所農林建設部土木課、広島市教育委員会、中野公民館の職員の方々、成岡自治会及び中野地区の住民の方々には、調査を円滑に進めるにあたり多大なご配慮とご協力をいただいた。さらに、調査期間中及び報告書作成にあたり、埋蔵文化財発掘調査指導委員会の広島大学名誉教授潮見浩氏、同文学部教授川越哲志氏、同教授河瀬正利氏、同助教授古瀬清秀氏から貴重な御指導、御助言をいただいた。また土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム館長松下孝幸氏、島根県埋蔵文化財調査センター大庭俊次氏、同原田敏照氏、同松山智弘氏、京都府埋蔵文化財調査センター黒坪一樹氏、同福島孝行氏から広範な御教示をいただいた。ここに記して謝意を表したい。

II 位置と歴史的環境

成岡A地点遺跡は広島市安芸区中野東二丁目19番地に所在する。

安芸区は、広島県南西部を占める広島市の南東部に位置し、北東で東広島市、南西で安芸郡海田町と接している。その北半を構成するのが中野東二丁目を含む旧瀬野川町域である。

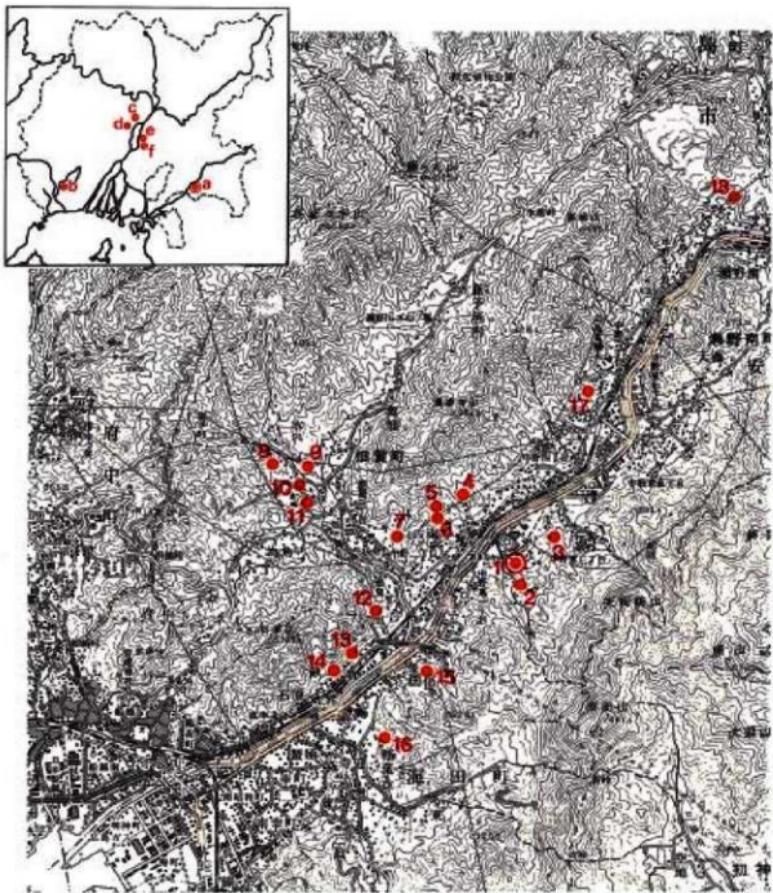
旧瀬野川町域は、賀茂台地の南西部から北東—南西方向に延びる3つの山列が存在する。町域の北側の呉婆々字山（標高682.2m）に代表される山列、町域の南側の鉢取山（標高711.5m）に代表される山列、その2つの山列に挟まれた形の蓮華寺山（標高374m）に代表される山列である。この中央の山列と南側の山列の間を流れるのが、東広島市八本松町および志和町に源を発する瀬野川である。瀬野川は、熊野川、櫻ノ山川、畠賀川など、大小の支流と合流しつつ、安芸郡海田町を経て、広島湾東部に位置する海田湾に至る。支流が合流する地点を中心に平地が分布するが、両岸とも山塊が迫っているため、一般にその面積は狭い。その中で最大の平地が広がっているのが中野地区と畠賀地区である。中野地区の平地は瀬野川中流域の両岸に広がり、畠賀地区はその北岸域南端に接し、畠賀川沿いに広がる1)。

本遺跡は、この中野地区の瀬野川南岸域南端、天狗防山（標高591m）から瀬野川東岸に向かって延びる丘陵の標高50~60mに位置し、中野地区の平地が一望できる。この尾根は天狗防山から一旦北西に派生し、本遺跡のある先端部分で北東に向きを変えている。尾根の東西には、やや傾斜が急であるものの、平地が広がる谷が位置し、それぞれ成岡川・押手川が瀬野川に向かって北に流れしており、近年まで棚田が営まれていた。

さて、瀬野川本流が流れる谷筋は、現在国道2号やJR山陽本線が通り、西条盆地と広島湾岸を結ぶ交通の要衝であるが、その歴史は古く古代の山陽道までさかのほる。古代山陽道の経路は、西条盆地の八本松から中野地区までは瀬野川本流の谷筋を通り、畠賀地区で進路を北に変え、畠賀川の谷筋を経由して安芸府中に至ったと考えられている。安芸国に設置された13か所の駅家のうち、荒山駅が比定されているのも中野地区である2)。また、畠賀方面に曲がらず、瀬野川を下れば広島湾東岸域へいたる。加えて、瀬野川源流域の一つ、志和町からは、広島市域北部の白木町を経由し、三次盆地へと抜けることができる。いうなれば中野・畠賀地区は、広島市域東部における交差点とも言うべき位置をしめているのである。

以上のような地理的条件のためか、中野・畠賀周辺は、開発の歴史も古く、古代には既に世能荒山荘として荘園も設置されていたと記録されている3)。さらに時間を遡れば、畠賀地区周辺の丘陵上で古墳時代中期以降の古墳が複数確認されている。箱式石棺ないし竪穴式石室を主体とする大師堂裏山古墳群4)、中須賀古墳群5)や、横穴式石室を主体とする大師堂裏古墳6)、こもり塚古墳群7)、畠観音免古墳群8)などである。中でも、中須賀古墳群中からは銅鏡なども出土しており、周辺を治める豪族の墓であったものと考えられている。

しかしながら、瀬野川流域では本格的な発掘調査がほとんど行われていないため、古墳時代前期以前に遡る遺跡はほとんど確認されていない。わずかに井原遺跡・山王貝塚・中須賀神社境内遺跡など数か所で、弥生時代後期の遺物が確認されており9)、少なくとも弥生時代後期以降何らかの定住



第1図 成岡A地点遺跡の位置と周辺遺跡分布図（S = 1:50,000）

生活は存在していたとは考えられるが、古墳時代前期までの状況は推定することさえ困難な状況である。そこで、広島市他の地域における弥生時代後期～古墳時代前期の遺跡について概観しておきたい。

現在、広島市域において確認されている弥生時代の集落遺跡は、後期のものが大半で、市域中心部の太田川下流域や市域西部の八幡川・石内川流域に多数分布している。いずれも丘陵上に立地することを特徴としており、これは市域の主な河川沿いの平地の大半は氾濫原で農業用地に適さないため、その支流などが形成する小扇状地や谷間の狭い平地を農業用地とし、集落は低丘陵上に営まれたためと考えられている¹⁰⁾。さらに、これらの集落は、規模と存続時期から、住居跡約70軒等が確認された毘沙門台遺跡¹¹⁾をはじめ、10軒以上の住居跡から成り、弥生時代後期前葉から終末・古墳時代初頭まで存続する大規模なものと、数軒程度の住居跡からなる比較的小規模なものに大別できる。この2種類の集落跡は、主要な河川の支流ごとに、拠点となる大規模集落と、そこから派生・分村した小規模集落という関係にあると捉える考え方もある¹²⁾。

このような弥生集落の発展を基礎に、太田川下流域では東岸域の弘住第3号古墳¹³⁾、史跡中小田第1号古墳¹⁴⁾が、また同西岸域では宇那木山第2号古墳¹⁵⁾・神宮山第1号古墳¹⁶⁾などが、古墳時代前期に築造されたと考えられている。このうち中小田第1号古墳は全長約30mの前方後円墳と考えられており、堅穴式石室から三角縁神獸鏡や車輪石が出土している。また、宇那木山第2号古墳は全長40mの前方後円墳で、堅穴式石室から画文帶神獸鏡が出土している。そのやや南に位置する神宮山第1号古墳も全長約30mの前方後円墳で、後円部の箱式石棺の1基から内行花文鏡片が出土している。これらの古墳は、規模・墳形・埋葬主体・副葬品など、畿内政権との強い結びつきをうかがわせる定型的な前期古墳であり、その被葬者は、太田川下流域のというよりは、安芸西部に影響力を持った入物が想定される。一方、弘住第3号古墳は、墳丘は直径25mの円墳に3m以上の突出部を持つ双方中円形で、埋葬主体は太田川下流域の弥生墳丘墓に相形を持つ、主に河原石を用いた堅穴式石室である。この石室内からは古式土師器の他、副葬品と考えられる大型の鉄鎌形鉄製品や定角式鉄鎌1点を含む31点の鉄鎌、さらに槍先や鉈など、多数の鉄製品などが出土している。墳形や埋葬主体は弥生時代の系譜を引くもので、非常に強い在地性を示すものの、鉄器、特に鎌は、畿内との関係の強さをうかがわせるに十分である。前述の3基の前方後円墳に対し、弥生時代から続いて太田川下流域を根据とする集団の首長墓と見ることが出来る。

また、近年の調査によって、八幡川流域の城ノ下第6号古墳¹⁷⁾も古墳時代初頭に遡る古式古墳であることが判明した。この古墳は一辺10mの方墳で、埋葬主体は木棺木棺墓の可能性が高いなど、弘住第3号古墳同様、弥生墳丘墓の伝統を残す在地性の強い古墳と考えられている。なお副葬品は確認されていないが、広島市域では類例の無い発生期の古墳に見られる土師器の複合口縁壺形土器が出土しており、その入手経路が注目される。ところで、城ノ下古墳群には第6号古墳に先行する古墳=プレ3号古墳も存在していたことが推定されている¹⁸⁾。プレ3号古墳は後世の削平が著しく、概要さえ明らかではない。しかし、その位置から、プレ3号古墳を中心に第6号古墳をはじめ4基の古墳が、古墳時代前期に築造されたと推定されている。城ノ下古墳群は、当該期に古墳を築造できる勢力が、太田川下流域に限られた存在ではなかったことを示すだけでなく、在地性の強い古墳群

の構成と、その母集団の社会的構造を考える上でも、貴重な調査例となっている。

以上のように、広島市域、特に広島湾沿岸地域における古墳時代初頭から前期前半の状況は、太田川下流域を中心に徐々に明らかになりはじめている。しかしながら、その東部域を形成する瀬野川流域の状況は、前述のとおり、古墳時代中期以降の繁栄の様子に比べ、それ以前の弥生時代後期から古墳時代前期の様子はほとんど明らかではない。瀬野川流域における前期古墳の有無は、この地域の歴史的推移を考えるだけでなく、弥生時代後期から古墳出現期における広島市域全体の社会的状況の復元を行うに当たって非常に重要な要素であり、その確認と調査が長く待たれていたのである。

注

1. 広島市役所編『瀬野川町史』1980年
2. 財團法人広島市歴史科学教育事業団編『古路・古道調査報告』広島市教育委員会 1992年
3. 1に同じ。
4. 1に同じ。
5. 1に同じ。
6. 1に同じ。
7. 1に同じ。
8. 河瀬正利『畠観音免古墳群』畠観音免古墳群調査団 1979年
9. 1に同じ。
10. 財團法人広島市歴史科学教育事業団『上深川北遺跡発掘調査報告』1991年
11. 未報告のため、詳細は不明である。
12. 10に同じ。
13. 広島市教育委員会『弘住遺跡発掘調査報告』1983年
14. 広島市教育委員会・広島大学文学部考古学研究室『中小田古墳群』1980年
15. 河瀬正利『広島のあゆみ 原始・古代3古墳時代』『図説広島市史』1989年
16. 15に同じ。
17. 財團法人広島市歴史科学教育事業団『城ノ下A地点遺跡発掘調査報告』1991年
18. 17に同じ。

III 遺構と遺物

調査の概要（第2図）

本遺跡は、天狗防山の山頂部から北西の瀬野川に向かって派生する尾根筋の一つに位置する。この尾根は天狗防山の山裾の緩傾斜部に属するが、周囲が住宅地や水田によって囲まれているため一見独立丘陵状で、最高所を中心に南側と北東側に尾根筋が延びている。南側尾根筋は標高約74mの最高所から緩やかに約10m下りながら標高約64mで天狗防山の山裾に連なる。一方、北東側は標高50mまで約24m緩やかに下った後、急激に周辺の水田面へと下がる。調査範囲は、北東側尾根筋に位置し、最高所から約10～24m、標高約64m～50mの間である。

調査範囲を含む北東側緩斜面は、調査前の地形観察によって、最高所から約10～12mの間は標高約64m～62mのはば平坦な面（以下64m平坦面）がひろがり、その北東側に続く緩斜面（以下緩斜面）中には標高約57mと標高約53mの2か所で小規模な平坦面が観察できた。広島市教育委員会の試掘調査では、トレンチを平坦面上に1本、また緩斜面上の標高57m地点の小平坦面上とその東に隣接して合計2本設定し、この内小平坦面上のトレンチで古墳の主体部を確認した。また調査範囲外ではあるものの、尾根筋最高所でも小規模な円墳と思われる高まりを確認した。以上から、本遺跡は古墳群として調査を開始することになった。

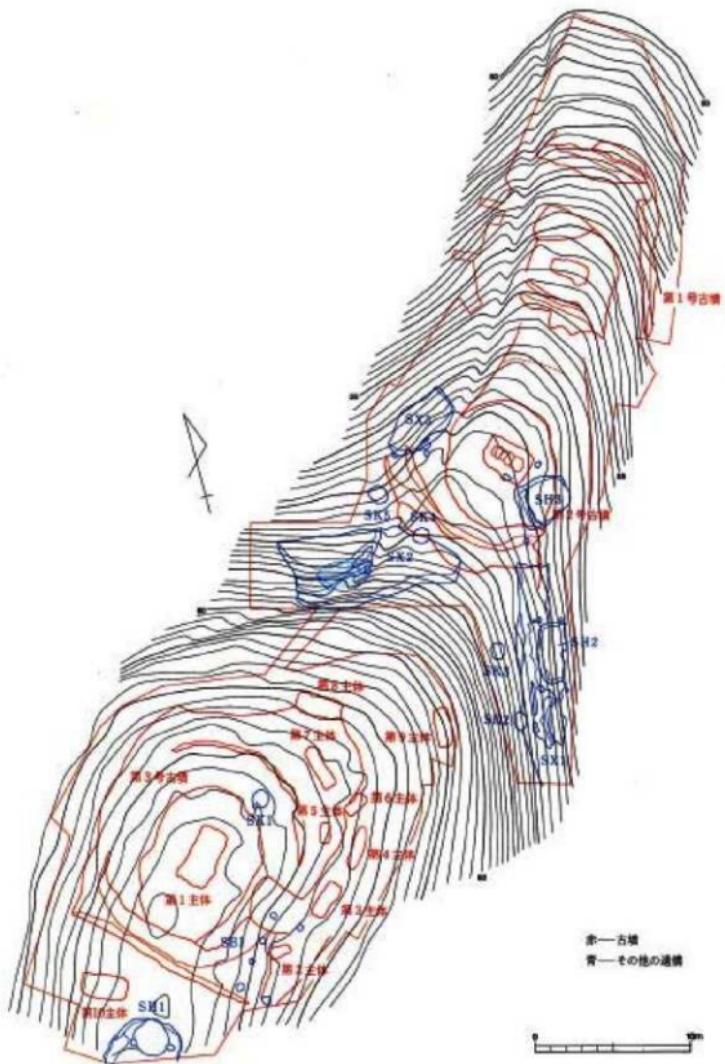
調査の結果、古墳時代の遺構として古墳3基、弥生時代終末～古墳時代初頭の遺構として堅穴住居跡3軒・掘立柱建物跡1棟・テラス状遺構3か所・土坑5基を確認した。また遺物は、古墳から土師器・鉄器（劍・刀子・鉈・鎌）・ガラス製品（小玉）・石製品（管玉）・金属製品などを、他の遺構から、弥生土器・土師器・石器（砥石・磨石・石錐）・貝殻が出土した。

1. 古墳

(1) 概要

前述のように本遺跡では3基の古墳を確認した。古墳はいずれも尾根筋の中央に築かれており、尾根筋の先端側から第1号古墳・第2号古墳・第3号古墳と呼ぶ。調査前の地形観察で確認していた緩斜面上の標高53m地点と57m地点の2か所の小平坦面は、それぞれ第1号古墳・第2号古墳の墳頂部平坦面に対応し、緩斜面上の上に広がる64m平坦面は第3号古墳によってほぼ全域を占められていた。なお、調査範囲外であるものの尾根筋最高所で確認した円墳も、その位置から本古墳群を構成する古墳のひとつととらえ、第4号古墳と呼称することとした。

第1号古墳は、尾根筋の前後を溝状遺構で区画した方墳で、埋葬主体は箱形木棺である。第2号古墳は西側を溝状遺構で区画した円墳で、埋葬主体は箱形石棺である。第3号古墳は西側を溝状遺構で、その他は平坦面で区画した円墳で、中心的な埋葬主体は木棺を持つ可能性がある木棺である。また墳丘周囲の平坦面上に合計9基の埋葬主体が確認された。この副次的な埋葬主体は、1基のみが箱形石棺で、それ以外は木棺と考えられる。おそらく第3号古墳は周囲を巡る平坦面と副次的な埋葬主体までが墓域を形成していたものと考えられる。



第2図 成岡A地点遺跡遺構配置図 (S = 1:300)

(2) 第1号古墳

① 概要

第1号古墳は、本遺跡の調査範囲のもっとも東、尾根筋の先端部に位置する。調査前の地表観察では、墳頂部平坦面にあたる場所が53m地点の小平坦面としてやや平らになっている程度で、古墳の存在は不明確であった。

調査の結果、東西は尾根筋に直交する直線状の2本の溝によって、また南側は幅の狭い平坦面によって区画されている方墳であることが明らかになった。ただし、北側の墳丘端部若しくは墳丘を区画する施設は確認することはできなかった。

埋葬主体は1基で、墳頂部平坦面の中央西寄りに位置していた。

② 墳丘（第3図・図版2a）

墳丘は明確な盛土は認められず、基本的に地山を整形し造られたものと考えられる。墳丘の平面形状は西側（山頂側）にやや幅広になる方形で、規模は墳裾部で東西9m、南北は東辺7.5m西辺推定約11m、墳頂部平坦面は現状で東西5m南北5.5mで、墳頂部平坦面の最高所は標高54.7mである。

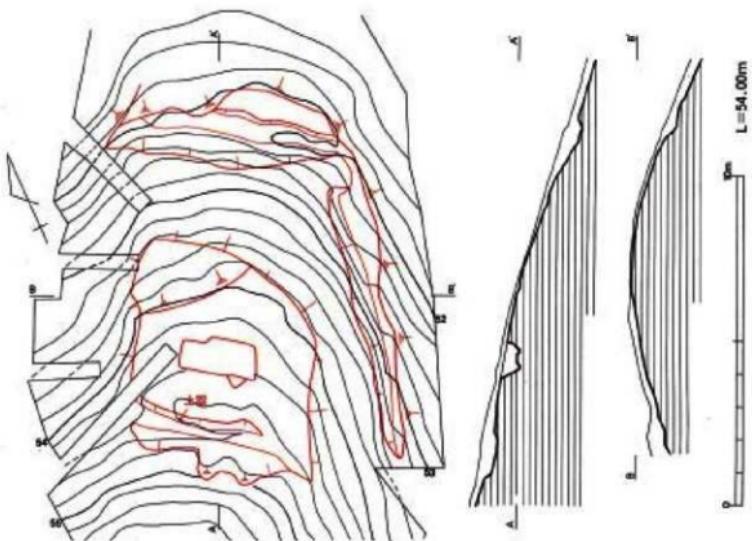
区画用の2本の溝はいずれも断面形状は逆台形で、東側は長さ750cm、最大幅は上端で175cm底面で60cm、深さは西側（墳丘側）上端まで70cm東側（墳丘外側）上端まで10cmで、底面の最高所の標高は52.0mである。一方西側は、長さ500cm、最大幅は上端で100cm底面で50cm、深さは底面から西側（墳丘外側）上端まで40cm東側上端（墳丘側）まで10cmで、底面の最高所の標高は54.6mである。墳頂部平坦面最高所とそれぞれの溝の底面との比高は、東側で270cm西側で10cmである。また、墳丘の南側を区画する細長い平坦面は、東端は東側溝の南端とはば接し、西端は西側溝の南端の延長線上まで達している。規模は長さ850cm最大幅80cm、標高は52.2m～53.3mで墳頂部平坦面最高所との比高は270cm～140cmである。なお、墳丘北側を区画する施設は確認できなかった。

遺物は、西側溝の東側（墳丘側）斜面中央やや北寄りから土師器の小型丸底壺形土器(1)が出土した。その位置から供獻土器と考えられる。

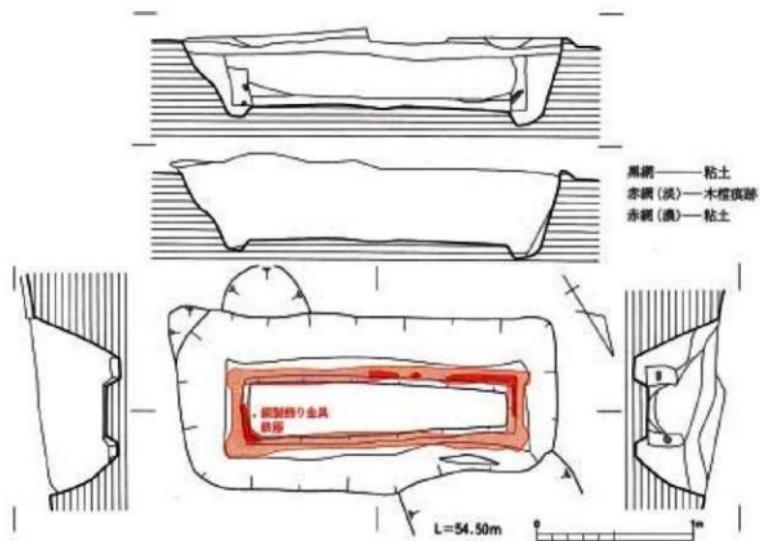
③ 埋葬主体（第4、5図・図版2b、3）

埋葬主体は、墳頂部平坦面の中央西寄りに位置する。主軸方位はN57°Wで、尾根筋方向とほぼ直交する。墓墳掘方の平面形状は長方形で、規模は検出面で長さ240cm幅109cmである。墓塘底面は、四周に溝が掘り込まれ中央部が台状（以下底面台状部）に削りだされている。底面台状部の規模は長さ165cm、幅は南辺で32cm北辺で20cm、最高所の標高は53.93mである。また、溝の断面形状は逆台形で、幅は上端で約20cm底面で約10cmで、深さが約10cmである。

この墓壙埋土を観察したところ、明黄褐色～鈍い黄橙色の砂質土を基調とするなか、墓墳底面台状部から約20～30cm上方までの範囲の中に、褐色の堅緻な層が偏在することを確認した。この層は平面形状が形で、その形状から、小口板を側板で挟み込む構造の組み合わせ式木棺の材が置き変わった木棺痕跡であると考えられる。規模は、外側で長さ195cm幅は南小口53cm北小口48cm、内側で長さ170cm幅は南小口33cm北小口30cmで、各辺の厚みは、小口辺・側辺共に7～10cmとほぼ一定であった。また、この木棺痕跡に囲まれた範囲の墓壙底面上には、木棺痕跡とほぼ同質の土が厚さ6～7



第3図 第1号古墳実測図 ($S = 1:50$)



第4図 第1号古墳埋葬主体実測図 ($S = 1:30$)

cm堆積しており、その状況から木棺の床板の痕跡と考えられる。

ところで、木棺痕跡の全ての小口板・側板痕跡は、墓壙底面の四周を巡る溝部の直上に位置している。しかし、土層断面の観察から、その下端はいずれも底面台状部の上面と同じ高さで終わり、溝部にまでは下りないことを確認した。また、溝部の平面形状も「形」ではなく「□形」であり、木棺の形状と整合しない。以上から、この木棺は小口板及び側板を墓壙底面に設けられた溝に差し込む構造では無く、底面がほぼ平滑な構造であったと考えられる。このため、墓壙底面の溝も木棺の設置に伴うものではなく、むしろ墓壙中央を棺台状に形成するために掘り込まれたものと考えられる。

また、小口板・側板痕跡の範囲内に暗褐色の粘土層の分布を確認した。この粘土層は、平面的には小口板・側板痕跡とほぼ一致するため、木棺のめどめに用いられたものと考えられる。垂直分布を見ると部分的にばらつきがあるため、蓋を棺身に据える際、両者の隙間を埋め、棺を密封するために用いられていたものが不等沈下した可能性が高い。

遺物は、木棺痕跡の内側南西隅から銅製飾り金具(2)と刀子状鉄器(3)が出土している。

なお頭位の方向は、墓壙及び木棺痕跡の構造・規模、遺物の出土位置から南側を向いていたものと考えられる。

④ 遺物（第6図・巻頭図版、図版14b）

・土師器(1)

小型丸底壺形土器である。破片であるため、各部の寸法は明らかではないが、口縁部は「く」の字に屈曲し、内湾気味に外反し、端部は尖って納められている。胴部は最大径を中央よりやや上半に持つ偏平な球状である。

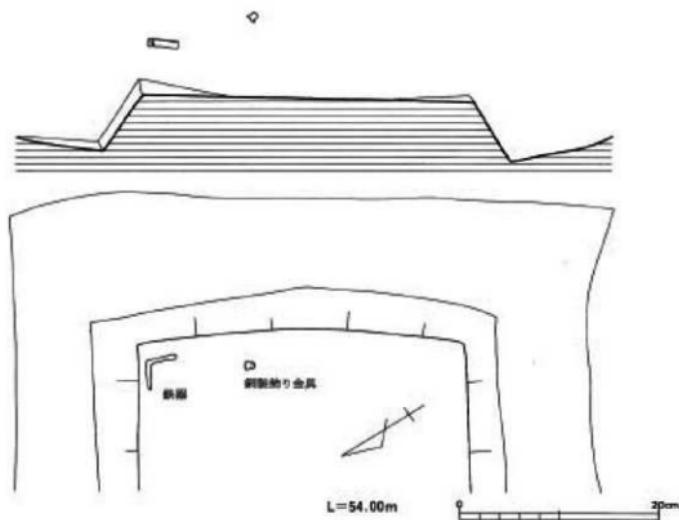
・金属器

銅製飾り金具(2)は口縁部が4葉に分かれたビーカー状で、高さ7mm胴部径7mm口縁部径11mm、厚さはほぼ一様で約0.5mm、重量0.6gである。肉眼観察では接合部は観察できず、一枚の金属板から打ち出したものと考えられる。口縁部は円周の1/4ごとに約5mmの切れ目を入れ、花びら状に外湾させている。その形状から、断面円形の棒の先端部に装着されていたものと思われるが、どのような性格のものの部品であったのかは明らかにできなかった。

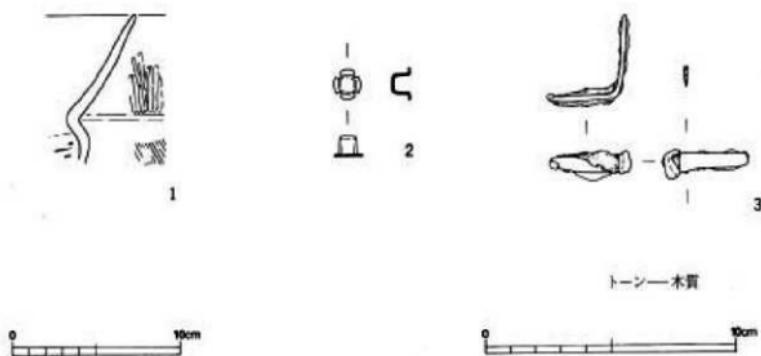
刀子状鉄器(3)は復元全長55mm最大幅6mm厚さ1.5mm茎部端幅3.5mm重量2.8gで、その大きさからミニチュア品と思われる。明確な闊はなく、刃部と茎部の境界は不明確である。刃部の表面に一部木質が遺存しているが、鞘のものであるか木棺のものであるかは明らかにできなかった。ほぼ中央で「く」の字に折れ曲がっているが、至近から出土した銅製飾り金具(2)は完全な形状を保っており、本品だけが土圧等の自然現象で折れ曲がった可能性は低い。おそらく葬送儀礼に伴い人為的に折り曲げられたものと考えられる。

⑤ 時期

本古墳の時期は、西側溝から出土した土師器丸底壺形土器の形状から、古墳時代前期前半期と考えられる。



第5図 第1号古墳埋葬主体遺物出土状況実測図 (S = 1:5)



第6図 第1号古墳出土遺物実測図 (S = 1:2, 1はS = 1:3)

(3) 第2号古墳

① 概要

第2号古墳は、東側緩斜面の西端に位置し、第1号古墳の西に隣接する。調査前の地表観察では墳頂部平坦面にあたる場所が57m地点小平坦面としてやや平らになっている程度で、古墳の存在は不明確であった。しかし、広島市教育委員会による試掘調査によって埋葬主体が確認され、本古墳群の発掘調査の契機となった古墳である。

調査の結果、墳丘は、西側が尾根筋を円弧状に断ち切る溝によって区画されていることが明らかになった。ただし、東側の墳丘端部若しくは墳丘を区画する施設は確認することはできなかった。

埋葬主体は1基で、墳頂部平坦面の中央に位置していた。

なお本古墳は、墳丘がS H 3・4を、また西側溝がS X 2・S K 5を一部切って築造されていた。

② 墳丘（第7図・図版4）

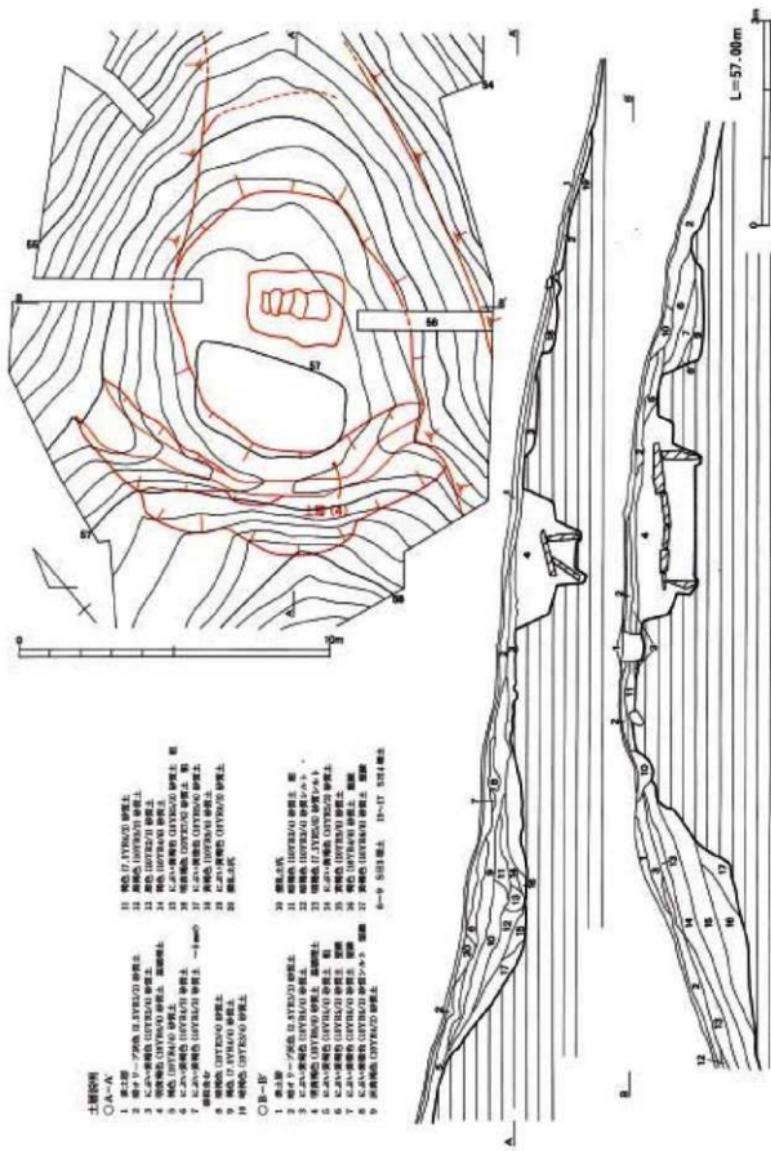
墳丘は明確な盛土は認められず、基本的に地山を整形し造られたものと考えられる。墳丘の平面形状はほぼ円形で、規模は墳据部で推定約11m、墳頂部平坦面は現状で直径約7.5mで、墳頂部平坦面の最高所は標高57.1mである。墳丘西側を区画する周溝は長さ約11mの円弧状で、墳丘のほぼ半分をとりかこんでいる。幅は中央部で最も狭く約20cmで、両端に向かうにしたがって広がり、北端で105cm南端で57cmである。また、断面形状は中央部ではV字形であるが、両端に向かうにしたがい逆台形に変じる。なお、深さは中央部で東側（墳丘側）上端まで53cm西側（墳丘外側）上端まで261cmで、底面の最高所は中央部で標高56.7mで、両端に行くにしたがい標高を下げ、北端で56m、南端で56.4mである。周溝底面と墳頂部平坦面最高所との比高は、中央で40cm北端110cm南端70cmである。

遺物は、周溝の北側（墳丘側）斜面中央や東寄りから鼓形器台(4)の破片が出土した。その位置から供獻土器と考えられる。また、墳丘上や周溝内の埋土中からではあるが、二重口縁壺形土器(5・6)の破片が出土している。

③ 埋葬主体（第8、9図・図版5、6）

埋葬主体は、墳頂部平坦面の中央に構築された箱形石棺である。石棺内には、良好な状態で頭を南側に向けた人骨が遺存していた。墓壙は平面形状が南に向けて幅広になる長方形の二重土壙である。主軸方位はN46°Wで、尾根筋方向とは直交する。一次壙の規模は、検出面で長さ310cm、幅は、南小口210cm北小口170cm、底面で長さ288cm幅は南小口186cm北小口158cmである。一次壙底面は壁面際から二次壙掘方に向けて低くなっている、壁際での標高は56.52～56.36m、二次壙上端で56.4～56.3mで、一次壙検出面からの深さは最大で60cmである。二次壙は一次壙のほぼ中央に掘り込まれており、上端で220cm幅南小口90cm北小口74cmである。二次壙底面は、四隅に石棺材を据えるため幅約20cm、深さ20cmまでの溝が掘り込まれており、この溝にかこまれた底面の規模は長さ166cm幅は南小口で46cm北小口で38cmで、最高所の標高は56.05mである。墓壙底面に盛られた棺床土は明確にできなかつたが、人骨の出土状況からおおむね10cm程度と考えられる。

この墓壙に築かれた石棺は小口壁を側壁で挟むL形の構造で、内側の規模は長さ180cm幅は南小口で59cm北小口で43cm、深さは最大で50cmである。小口壁に用いられた石材は、南側が高さ63cm幅



第7図 第2号古墳実測図 (S = 1:150)・土層断面図 (S = 1:75)

45 cm 厚さ 13 cm, 北側が高さ 50 cm 幅 36 cm 厚さ 9 cm で、南側に大型の石材が用いられている。側壁は西側が 5 石、東側が 7 石によって構成されている。用いられている石材は、概ね高さ 50 ~ 60 cm 厚さ 10 cm 前後で、幅は東西両壁とも最も南側の 1 石が 45 ~ 50 cm と大きく、他は 20 ~ 30 cm のものを用いている。石材の裏には基本的に土を充填し、石材を固定している。部分的に小石が認められるところもあるが、全面的に行われているわけではないので、強度を増すための機能はあまり期待されてはいなかったものと思われる。ただし、西側壁北端の 1 石は、幅こそ約 60 cm とひろいが、厚さが約 5 cm と他の半分程度しかないため、その裏側に幅約 25 cm 厚さ 5 cm ほどの板石 2 枚と小石を入れて補強を行っている。なお、前述のように、石材の下に溝が掘り込まれており、その深さを石ごとに変えることによって石材上端の高さをそろえている。石棺構築の順序は、①底面に掘られた溝のうち、南小口石と西側壁南端石の溝が L 字形に一体に掘られていること②側壁に用いられた石材が、南端が最も大きく北に行くにしたがい小型になること③両側壁を比較すると、西側に比べ東側の方が小型の石材を用いていること、などから、まず南小口石と西側壁南端石を据えてから西側壁を築き、北小口石を設置し、最後に東側壁を築いたものと考えられる。

この石棺を覆う蓋石は 5 枚で、石材は南端のものが最も大きく長さ 80 cm 幅 90 cm 厚さ 16 cm で、その他の石は長さ 30 ~ 50 cm 幅 70 ~ 90 cm 厚さ 4 ~ 13 cm と小型で薄い。蓋石間、及び蓋石と墓壙一次堀底面間の隙間は褐色粘土で丁寧に目張りがされていた。ただし、壁石上端と蓋石の間に粘土がほとんど見られなかったことから、目張りは蓋石構架後に行われたと考えられる。

出土した人骨は、頭を南に向け、足が北小口にほぼ接するように安置されており、肋骨や下腕の一部を欠くものの、概ね良好な遺存状態であった。石棺に施された粘土の目張りが、棺を密閉し土砂や水の流入を防ぐという、期待された機能を十分に果たした結果であろう。人骨は老年（60 歳以上）男性のもので、身長は 161.5 cm と推定されている。骨は生前の位置関係を保っており、軟骨や腱が腐りきらず、四肢がばらばらにならない段階で埋葬されたものと考えられる。また、頭蓋骨の前頭部には赤色顔料が認められた。赤色顔料の分布は眉間の濃度が最も高く、周辺に行くにしたがって減少してゆく。遺骸の頭部のある範囲に塗布されたのではなく、眉間に一点に顔料の粉末を盛るなどの行為が行われたと考えられる。

遺物は、石棺内南西隅、頭骨の南側から鉄製刀子(8)が、切先を南に向けた状態で出土した。

④ 遺物（第 10 図・図版 14b）

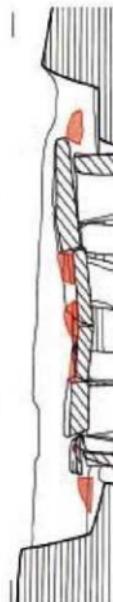
・土師器

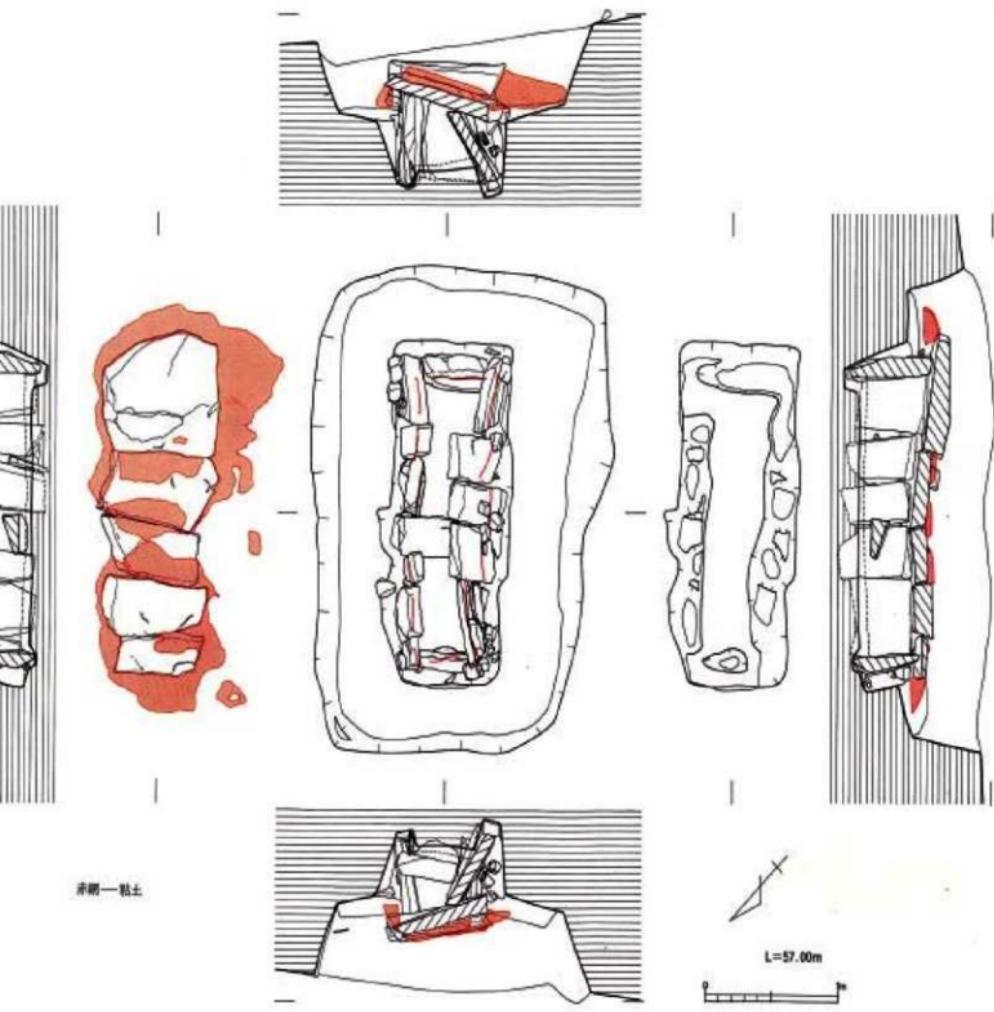
(4)は鼓形器台である。器受部径 14.4 cm 筒部径 5.4 cm で、表面は内外面とも精微に磨かれ、さらに外面には赤色顔料の塗布が認められる。胎土・焼成とともに非常に良好である。

(5・6)は、二重口縁の壺形土器である。いずれも、2 次口縁部は外面下半に粘土帯を張りつけ下垂させ、くし齒状工具による波状文と円形浮紋が認められる。ただし、(5)が 1 次口縁に比べ 2 次口縁が立ち上がり気味に外反するのに比べ、(6)は 1 次口縁・2 次口縁ともにほぼ直線状に外反する。

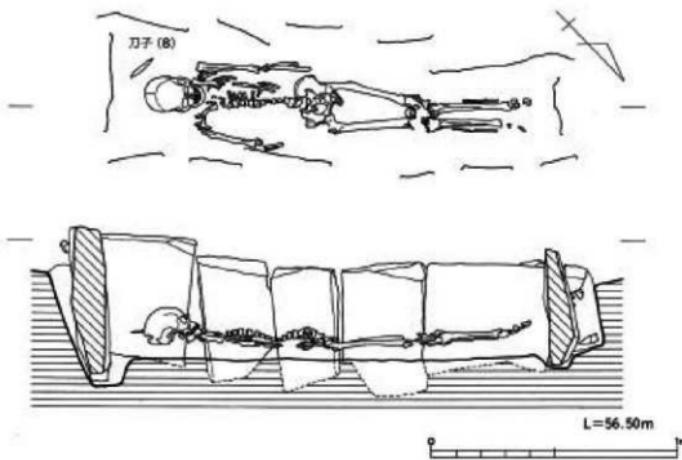
・金属器

鉄製刀子(8)は全長 98 mm 幅 11 mm 厚さ 2 mm 茎部端幅 7 mm 重量 16.8 g である。明確な関はなく、刃部と茎部の境界は不明確である。刃部の表面は薄い樹脂状皮膜で覆われていた。

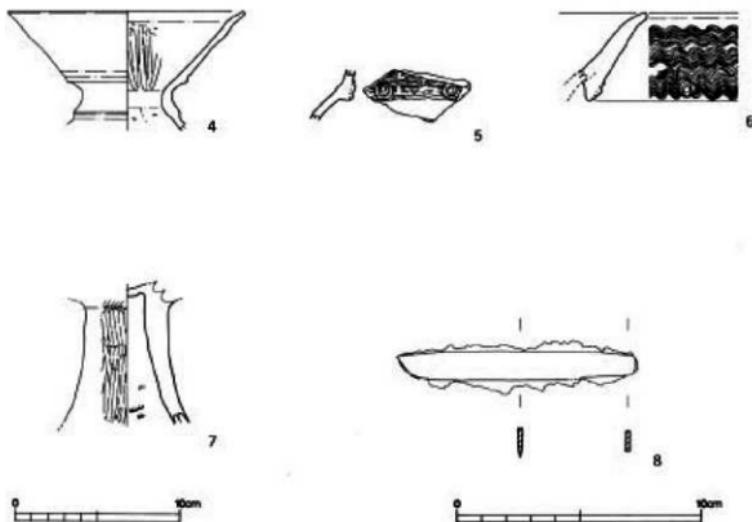




第8図 第2号古墳埋葬主体実測図 ($S = 1:30$)



第9図 第2号古墳埋葬主体人骨・遺物出土状況実測図 (S = 1:20)



第10図 第2号古墳出土遺物実測図 (S = 1:3, 8はS = 1:2)

⑤ 時期

本古墳の築造時期は、墳丘西側溝から出土した鼓形器台や、墳丘埋土中から出土した壺形土器から古墳時代前期前半と考えられる。

第1表 古墳出土土器観察表

([]は復元値)

番号	器種	出土位置	寸法(cm)	器 形	調整・成形	備考
1	丸底壺形土器	第1号古墳		口縁部は「く」の字状に外反し、やや内溝気味に端部に至る。端部は尖り気味におさめる。頸部以下は、内溝する。	外面： 口縁端部から上部ヨコナダ。口縁下部へラ磨きのち、赤色顔料部分に塗布。頸部ヨコナダ。体部ハケ目のちヨコナダ。 内面： 口縁端部ヨコナダ。頸部ヨコナダ。以下へラ削り。	色調： 黄褐色 胎土： 1mm大の砂粒若干含む 焼成： 良好
4	鼓形器台	第2号古墳	口径 [14.4]	口縁部は外方に開き、端部は尖り気味におさめる。上下に棱を形成している頸部は外溝する。	外面： ヨコナダ。 内面： 口縁端部ヨコナダ。口縁部へラ削りのちへラ磨き。頸部ヨコナダ。以下へラ削り。 内面口縁部から外面にかけて赤色顔料塗布。	色調： 橙色 胎土： 密 焼成： 良好
5	壺形土器	第2号古墳埋土		外反する口縁に、やや外傾する立ち上がり部を接合する複合口縁。	外面： 口縁部ヨコナダ。円形浮紋をめぐらせる。 内面： ヨコナダ。	色調： 橙色 胎土： 密 焼成： 良好
6	壺形土器	第2号古墳埋土		外反する口縁に、外傾する立ち上がり部を接合する複合口縁。端部はやや平らにおさめる。	外面： 口縁端部ヨコナダ。口縁部波状紋をめぐらせ、円形浮紋を貼り付ける。 内面： ヨコナダ。	色調： 淡黄褐色 胎土： 密 焼成： 良好
7	高杯	第2号古墳埋土		脚部下方に開く。	外面： ヘラ磨き。 内面： 杯部底面ナダ。脚部上部ナダ。下部へラ状工具による強いナデツケのちナダ。	色調： 外面 黄褐色 内面 灰褐色 胎土： 1mm大の砂粒多く含む 焼成： 良好

(4) 第3号古墳

① 概要

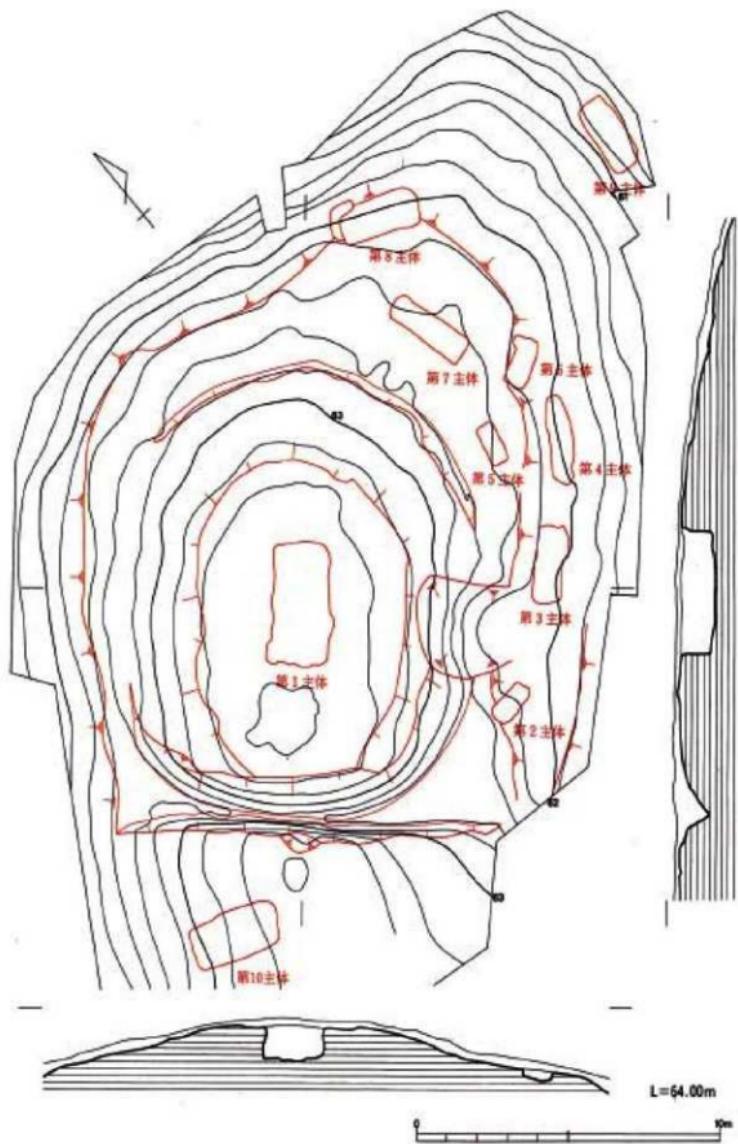
第3号古墳は、本遺跡の調査範囲の西端に位置し、64m平坦面のはば全域を占める。64m平坦面は長さ約15m幅約5mと本遺跡の位置する尾根筋の中で最も広い平坦面で、調査区の西半を占める。64m平坦面は、中央がごくわずかに高まるが、周辺に向かう傾斜は非常に緩やかで、調査前の地表観察では古墳の存在は不明確であった。

調査の結果、西側は尾根筋に直交する溝によって、東南北側は平坦面（以下墳裾部平坦面）によって区画された東西に長い円墳であることが明らかになった。埋葬主体は10基で、中心となる主体が墳頂部平坦面の中央に、またその他の主体は周囲の平坦面上など、墳丘の周間に位置していた。

② 墳丘（第11図・図版7）

墳丘及び墳裾部平坦面には明確な盛土は認められず、基本的に地山を掘削・整形することで造られたものと考えられる。墳丘の平面形状は尾根筋に沿って南北に長い長円形で、規模は墳裾部で南北13.5m東西11.5m、墳頂部平坦面は現状で南北9.3m東西6.8mで、墳頂部平坦面の最高所は標高63.7mである。

墳丘西側を区画する溝は、東側（墳丘側）は南北両端が東に回り込む円弧状であるが、西側（墳丘



第11図 第3号古墳実測図 ($S = 1:150$)

外側）は尾根筋に直交しこれを直線状に断ち切る特異な形状である。長さは西側で 12.5 m、幅は中央部で最も狭く上端 165 cm 深さ 80 cm で、断面形状は西側斜面の傾斜が垂直に近い片葉研掘状である。両端に向かうにしたがって断面形状を逆台形に変じつつ幅を広げながら深さを減らし、最終的には底面が墳裾部平坦面へと接続する。底面の最高所は中央部の標高 62.7 m であるが、両端までは水平で、溝底面と墳頂部平坦面最高所との比高は 100 cm である。

一方墳裾部平坦面は、現状で幅は南側 1 ~ 3 m 東側 2 ~ 5 m 北側 1 ~ 2 m で、高さは墳裾際が全周ほぼ水平で標高 62.6 m、周縁部は 62.2 ~ 62.4 m である。この平坦面の築造時の規模は、周辺地形の観察から、東～北側は現状と大差の無い規模であったと考えられる。ただし南側は、西側溝との接続部の様子や副次的な埋葬主体群の位置から考えれば、3 ~ 4 m 程度の幅があった可能性が高い。

墳丘及びその周囲から遺物は出土しなかった。

③ 埋葬主体

本古墳の墳丘上及びその周辺から 10 基の埋葬主体を確認した。このうち墳丘中央に位置するものが第 1 主体、墳裾部平坦面南側から北側にかけてとその周囲に位置するものが第 2 主体～第 9 主体、墳丘の南側を区画する溝の南に隣接するものが第 10 主体である。第 2 主体～第 10 主体は墳丘上には位置しないものの、主軸が直近の墳丘縁辺と並行し、あたかも墳丘を取り囲むように位置する。さらに第 2 主体～第 8 主体は、いずれも墓壙底面の標高がほぼ等しいことから、同一水平面から掘り込まれたと考えられ、その水平面とは各墓壙の深さから考えれば墳裾部平坦面であった可能性が極めて高い。以上から、第 2 主体～第 10 主体も本古墳に付随する副次的な埋葬主体であると判断した。

○第 1 主体（第 12・13 図・図版 8・9・10a）

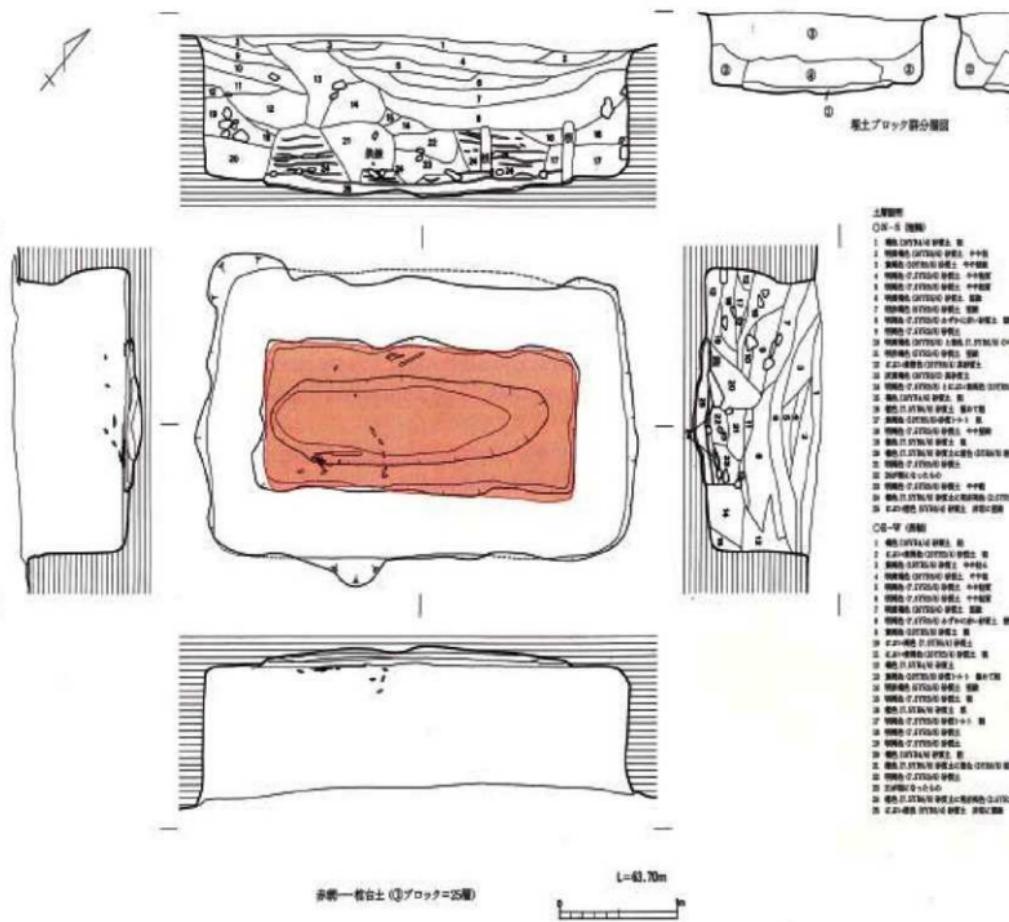
〈墓壙〉

第 1 主体は、唯一墳丘上に営まれた埋葬主体で、墳頂部平坦面の中央に位置する。墓壙埋土の土層観察によれば、単に木棺を直葬しただけではなく木棺を伴う可能性のあることが明らかになった。主軸方位は N43° E で、尾根筋及び墳丘長軸方向とはほぼ並行する。平面形状は隅丸長方形で、3 段に掘り込まれている。一次壙の規模は検出面で長さ 385 cm 幅 190 cm、底面は長さ 356 cm 幅西小口 196 cm 東辺 180 cm、底面はほぼ水平で標高は 62.6 m で、検出面からの深さは約 94 cm である。二次壙は一次壙底面のほぼ中央に掘り込まれており、平面形状隅丸長方形で、規模は上端で長さ 268 cm 幅西小口 100 cm 東小口 94 cm、底面で長さ 260 cm 幅西小口 92 cm 東小口 86 cm、底面最高所の標高は 62.54 m で、一次壙底面からの深さは 6 cm である。三次壙は二次壙底面の中央からやや南よりに掘り込まれており、平面形状は梢円形で、規模は上端で長さ 236 cm 最大幅 60 cm、底面で長さ 200 cm 最大幅 45 cm、底面最低所の標高は 62.46 m で、二次壙底面からの深さは 8 cm である。

〈埋土〉

この墓壙を埋めた埋土は、堆積状況から①棺床部を形成していたと考えられるブロック②棺櫛の周囲を埋め戻したと考えられるブロック③埋土の上半分を占め、墓壙全体を埋め戻したと考えられるブロック④上記 3 層に囲まれたブロック、の 4 群に大別できた。

①ブロックは、二次壙及び三次壙を埋める厚さ 6 ~ 10 cm の真砂土を主体とすると思われる鈍い橙色の非常に堅緻な砂質土層である。平面形状及び範囲は二次壙上端とほぼ同一で、長さ 260 cm 幅 100



第12図 第3号古墳第1主体実測図 (S=1:30)

cmの隅丸長方形である。断面形状は縦横ともに概ね偏平な台形状だが、上面形状は中央部が縁辺部に比べ約10cm窪む浅いU字形である。なお、最高所は縁辺部で一次壙底面よりも4cm程度高い。本層の上面全域には厚さ1~2cmの明赤褐色の粘土が広がっていた。その直上から鉄剣(9)・鉄鎌(11)・鉈(12)が出土している。これらの遺物は、出土時の位置から木棺内に納められた副葬品であったと考えられるが、いずれも粘土層にはほぼ密着し、本層内部には入り込んでない。以上から、本層は木棺の下に敷かれた層であり、棺台的な役割を担っていたものと考えられる。

②ブロックは、一次壙底面上に堆積し、平面形状は二次壙を取り囲む□形で墓壙壁際から二次壙上端まで分布し、厚みは一次壙底面から壁際で約60~70cm・二次壙側で約30cmである。概ね橙色ないし明褐色の柔らかな砂質土からなり、その形状から棺槨の周囲を埋めた埋土であったと考えられる。このブロックは、一次壙底面から20~30cmの高さでさらに上下2層に大別できるが、東西断面と南北断面でやや土質が異なる。東西断面では、上下両層ともに密度の低い柔らかな土質である。一方南北断面では、上層は東西断面同様密度が低く柔らかい土質であるのに対し、下層は明確に堅緻な土質となっている。下層の土質の違いは平面上にも現れており、一次壙底面から約15cmの高さにおいて、墓壙南北両側壁側の埋土が墓壙東西両小口側の埋土を一形に挟み込む様子を観察することができた。以上から、棺槨の埋め戻しによる本ブロックの形成にあたって(7)墓壙の小口側と側壁側の間を仕切るような一形の構造があった(4)埋め戻しが少なくとも2回に分けて行われた(9)下層の形成にあたって、墓壙側壁側では土が固く縮まるような行為が行われたのに対し、墓壙小口側では同様の行為は行われていなかった、と考えられる。

③ブロックは、②ブロックより上層に位置し、墓壙上半を占める。属する層はおおむね6層で、多少の断絶はあるものの、ほぼ墓壙の端から端まで達する浅いU字形に堆積している。この状況から、本ブロックは墓壙を最終的に埋め戻した層群で、木棺が腐朽し、その空間に墓壙中央側の埋土が落ち込んだものと考えられる。このうち上から4層は褐色で、比較的密度が低く粗い土である。対して第5層は明褐色の堅緻な土層、さらに第6層は色調を明赤褐色に変えた堅緻な土層で、こぶし大程度の河原石がまんべんなく認められるようになる。ところで、東西断面の土層観察によれば西壁から約50~100cmの範囲で、最上層を除く第2層から第6層まで垂直方向に延びる土層が認められる。この層は、土質が周囲の埋土に比べ極めて粗であることと、その形状から、墓壙中央の棺槨が腐朽し本ブロックが落ち込んだ際に、中央部と周辺部における沈下量の違いから生じた亀裂に周囲から土が流れ込んだものと推定される。このことから、少なくともこの亀裂が及んだ第2~6層は、棺槨が腐朽した時点で墓壙を埋めていた埋土である可能性が高い。よって、本主体の棺槨より上層の埋め戻しは、こぶし大程度の河原石が散布された明赤褐色の堅緻な層→明褐色の堅緻な層→褐色系で密度の低い粗い3つの層、の順で形成されたものと考えられる。

以上の3ブロックに囲まれた長さ約240cm幅約100cm高さ約40cmの空間を占めるのが④ブロックである。本主体内から出土した遺物は、全て本ブロックと①ブロックとの境界面、及び本ブロックの埋土下半部から出土している。このことから、本ブロックが占める空間は本来木棺が据えられていた場所であり、本ブロックは木棺の上に位置していた土が、木棺の腐朽とともに崩落してきたものと考えられる。その主体となるのは真砂土状の堅緻な砂質土で、その層中に、ほぼ水平に広がる厚

さ約1cmの赤褐色の粘質土層が約5cm間隔で5~6層堆積する特徴的な構造を有している。東西断面では、中央部の約1mの範囲で粘土層が途切れていますが、形成する土を詳細に観察した結果、真砂土と粘土層が混ざったものであることを確認しました。また、この中央部でも、下から約10cmまでは粘土層を1~2層挟む真砂土層が断続的に分布しています。よって、本ブロック全体が、本来版築状に真砂土と粘質土を交互に積み重ねた一体の層であった可能性が高い。おそらく当初の位置から沈下する際、中央部と周辺部でその速度が不均等となつたため土層の攪拌が生じたのであろう。ところで、本ブロックに類似する土層は②・③ブロック中において一切確認できなかった。つまり本ブロックは、木棺を埋め戻す際、墓壙全体にわたって形成されたもの的一部ではなく、木棺の上の限定された空間にのみ形成された土層と考えられる。

〈木棺及び木櫛〉

墓壙に安置された木棺等については、直接、これを構成する部材が置き変わったと見られる土層の明確な確認はできなかった。ところで、本主体の墓壙の規模・形状は、安芸北部千代田町の中出勝負峠第8号古墳¹⁾の中心主体SK8-1（前期初頭）に極似している。中出勝負峠例は、土層断面から組み合わせ式の箱形木棺が納められていたと考えられているが、本主体と比較すると棺台土（①ブロック）や木棺上の限定土層（④ブロック）の有無などの違いがある。これらは木棺の構造やその設置方法など、埋葬施設の基本にかかわる部分である。このため、墓壙埋土の各ブロックの状況を検討することで、その形状や構造を推定してみたい。

・木棺

木棺の平面規模は①ブロック=棺台土と②ブロック=棺櫛埋め土の状況から、①ブロックの範囲に納まる長さ260cm幅100cm以下と考えられる。また高さは、③ブロック=墓壙埋め土の沈降距離、及び②ブロックの壁際での厚みから④ブロックの厚みを引いた値が共に30~40cmであることから、最大で40cm程度であったと推定できる。

形状については、棺台土上面が、縁辺部から中央部に向けて浅いU字形に窪むことから、底面はゆるやかな舟底状であったと考えられる。仮に単純な形状の板材を組み合わせた箱形木棺を想定した場合、墓壙底面は平面、もしくは前述の中出勝負峠例同様、単純な長方形の二次壙を掘り込むだけ十分であろう。しかし、舟底状の底面の場合本質的に不安定であり、安定させるため何らかの施設が必要になる。中出勝負峠例と異なり、本主体で、舟底状の三次壙が掘り込まれていたこと、さらに棺台土が設置されていたことは、いずれも木棺の底部が不安定な舟底状であり、これを安定して設置するために行われたものと考えることができよう。

ところで、棺内に副葬されたと考えられる品のうち、鉄劍は向きが墓壙長軸と並行し棺台土に全体が密着しているなど、副葬時の状況をほぼ保っていると見られる。一方、鉄劍よりも棺台土の縁辺近くから出土した鉄鎌や鉈は、向き・傾き共に鉄劍よりも乱れた印象がある。仮に板材を組み合わせた箱形の木棺を想定した場合、棺台土との相対的位置関係は、両者ともほとんど違いは無いと考えられる。よって木棺の腐朽によって元位置から沈降していくても、出土状況に大きな差が生じることは考えにくい。つまり、出土状況に違いがあるということは、中心軸から端部へと離れるほど状況（位置）が変化するような内部形状の木棺であったことを示しているといえる。このような

形状の木棺としては、くり抜き式のものが想定できよう。

以上から、本主体に納められた木棺は、少なくとも底面はゆるやかな舟底状で、棺身はくり抜き式であった可能性が高い。

・木櫛

②ブロックで述べたように、この層の下層には、墓壙側壁側と小口側を区画する平面形状 形の構造物が存在していたと考えられる。このような形状の構造物としては組み合わせ式の箱形木棺が考えられるが、既に検討したとおり、本主体に納められた木棺の下半部はくり抜き式であった可能性が高い。以上から、木棺と 形構造物は別の施設であり、本主体には少なくとも棺身を取り囲むような 形構造物が設置されていたものと考えることができる。

また、木棺の上には、木棺とほぼ同規模の限定された空間に、版築状の構造を有する④ブロックが位置していた。このような土層を形成するには、その空間を限定する必要があるが、その方法としては以下の 2 つの方法が考えられる。

- (1) いったん埋め戻した後、必要な部分を掘り返して確保した空間に、充填して形成する方法。
- (2) 当該空間を区画する構造物を築き、この中に充填して形成する方法。

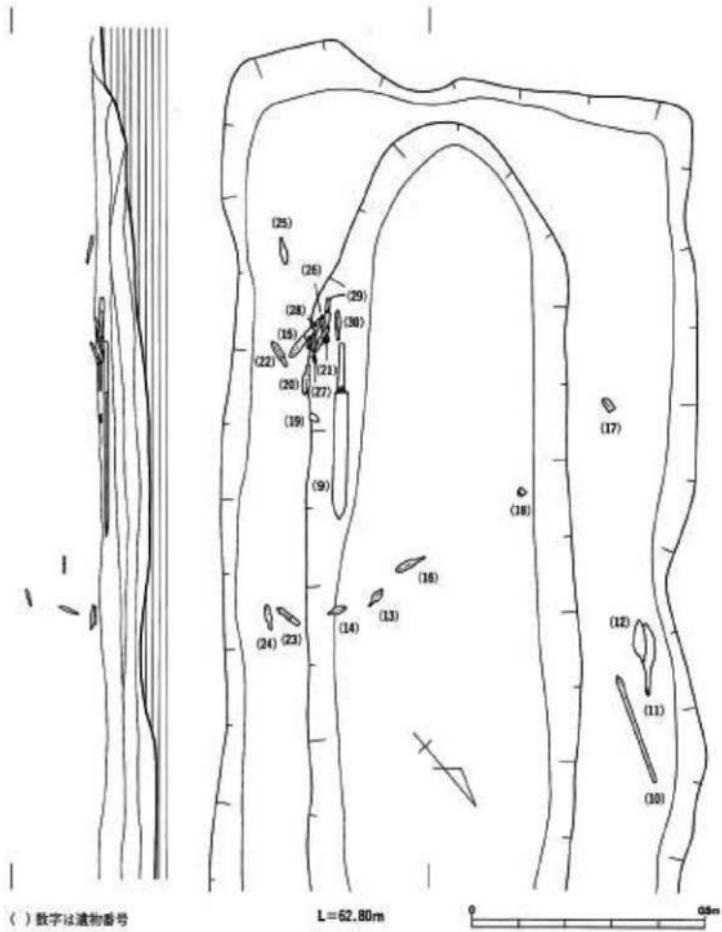
(1)案の場合、空間確保のために掘り返した時、壁面を保つためにには埋め戻し土をある程度固めなければならない。特に④ブロックの様に土を版築状に固めながら積み重ねてゆく場合、その枠となる壁面には十分な強度が必要になることが想像される。また、④ブロックの形成作業は埋め戻し土の上を足場にして行わねばならず、この際にも土が縮まるものと考えられる。しかしながら、この「枠」部分に相当する②ブロック上層は、かなり密度の低い粗い土質で、仮定と整合しない。また葬送儀礼を想定した場合、いったん埋めた木棺を掘り出すような作業は考えにくい。

対して(2)案は、木棺の上に位置する長方形の木枠のような構造物が想定できる。この構造の場合、(1)案に比べ④ブロックを形成するに十分な強度を確保できる。また、②ブロック下層が堅緻であることは、この層を作業足場としたと推定できること、また②ブロック上層が粗い土層であることは、作業終了後に枠の外を埋めると推定できること、とそれぞれ整合する。さらに葬送儀礼を復元する上でも、(1)案に比べ直線的な手順となり、理解しやすい。以上から、④ブロックの形成にあたっては、木枠状の構造物が用いられたものと考えられる。

このように、本主体には、木棺以外に棺身を取り囲む 形構造物と、木棺上の④ブロックを形成するための木枠状構造物が存在していたことが推定できた。そして、この 2 つの構造物は、上下に重なるように位置し、かつその平面規模がほぼ同一であることから考えれば、本来单一の構造物であった可能性が高い。以上から、本主体には木棺全体を囲い込むような木製構造=「木櫛」が存在していたと考えられるのである。

〈遺物〉

遺物は、鉄剣(9)・鈍(10)・大型鉄鎌 2 点(11・12)・小型鉄鎌 19 点(13~31)が出土した。このうち、すでに述べているように棺台土の上面に広がる粘土層の直上から鉄剣(9)・鉄鎌(11・12)・鈍(10)が出土している。鉄剣(9)は棺台土の南側縁から約 20 cm 北、西小口から約 50 cm 東に位置し、峰を東に向けて墓壙長軸と並行し、棺台土に全体が密着していた。一方鉄鎌(11・12)と鈍(10)は、北側縁か



第13図 第3号古墳第1主体遺物出土状況実測図 (S = 1:10)

ら約10cm南、棺台土の西小口から約100cm北に位置し、いずれも峰を東に向け、棺台土にほぼ密着していた。ただし鉈(10)は峰がやや南に向き、鉄鎌2点は折り重なるように出土している。以上の4点は、その出土状況から棺内に副葬されていた可能性が高い。一方、小型鉄鎌19点(13~31)は、大きく2群に分かれて出土している。第1群は11点からなり、棺台土の西小口から約50cm東、南側縁から約15cm北、棺台土の1~2cmほど上方に集中して出土した。一方第2群は7点からなり、西小口から約80~90cm東、南側縁から7~40cm北、棺台土の上方3~15cmまでの範囲を中心に分布し、第1群とは最短でも35cm離れている。両群ともに峰の向きや身部の傾きに規則性は認められない。第1群の集中の様子と両群の距離から、これらの鉄鎌群は当初から2群にわかれていたと考えられる。また向き・傾きの乱れや棺台土から離れて出土したものが見られることは、前述の鉄剣・鉈・大型鉄鎌に比べ元位置が高く、④ブロックが沈降した際に巻き込まれたことを示していると考えられる。以上と、大半が矢柄の痕跡を有していることも含めて考えれば、本来小型鉄鎌群は、供獻品として2つの矢の束を互い違いにして、木棺の蓋の上に置いたものであった可能性が高い。

○第2主体(第14図・図版10b)

第2主体は墳丘南側、墳裾から約1mの墳裾部平坦面上に位置する。平面形状は側辺がやや外側に張った隅丸長方形で、主軸方位はN87°Eである。規模は検出面で長さ139cm最大幅65cm、墓壙底面で長さ70cm、幅は西小口で39cm東小口で43cmで、底面の標高は61.87m、深さは最大52cmである。また、底面の両小口際には溝が掘り込まれており、その断面形状は逆台形で、幅は上端で約15cm底面で約10cm、墓壙底面からの深さは5~7cmである。位置と形状から、組み合わせ式木棺の材を差し込むための溝と考えられる。

本主体から遺物は出土していない。

○第3主体(第15図・図版11a)

第3主体は墳丘南東側、墳裾から約2m、第2主体からは東2.5mに位置する。平面形状は隅丸長方形で、主軸方位はN49°E、規模は検出面で長さ231cm最大幅95cmである。一方、墓壙底面は平面形状が両小口に比べ中央部が狭まる細長い菱形で、長さ208cm、幅は西小口80cm東小口62cm中央部46cm、底面の標高は61.92m、深さは最大37cmである。北側壁面は3つ的小平坦面が認められるが、位置・形状とともに性格は不明である。底面の形状から考えれば、壁面が崩落した痕跡の可能性も考えられよう。

本主体から遺物は出土していない。

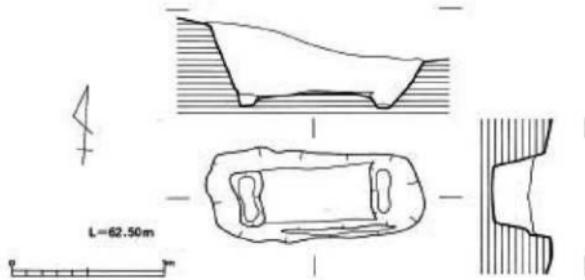
○第4主体(第16図・図版11b)

第4主体は墳丘東南東側、墳裾から約3m、第3主体から北東1.3mに位置し、主軸方位はN40°Eである。上部の大半を削平されており、底面の一部も欠損している。残存部から推定した平面形状は隅丸長方形で、墓壙底面の規模は長さ約250cm幅約55cm、最高所の標高は62.00mで、深さは最大20cmである。

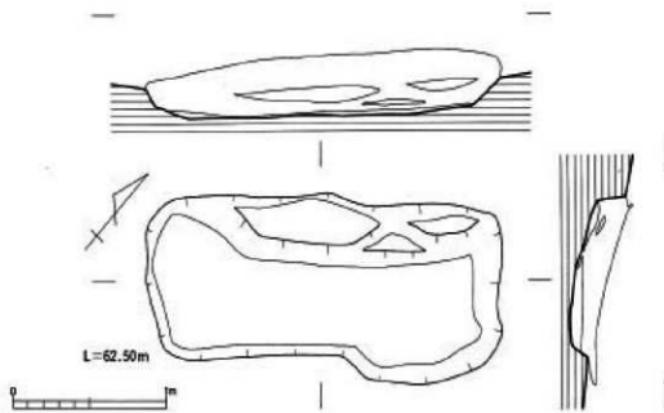
本主体から遺物は出土していない。

○第5主体(第17図・図版11c)

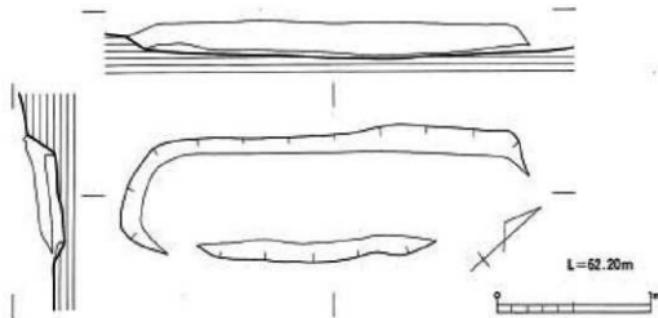
第5主体は墳丘東南東側、墳裾から1m、第3主体の北北東約2m、第4主体の北1.7mに位置す



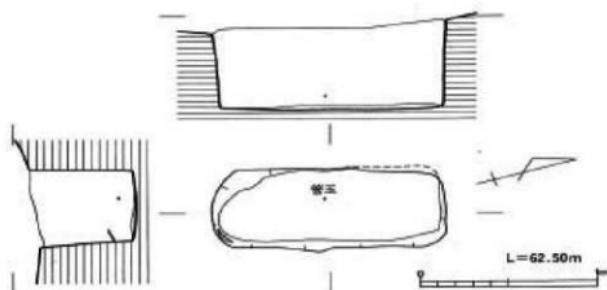
第14図 第3号古墳第2主体実測図 ($S = 1:30$)



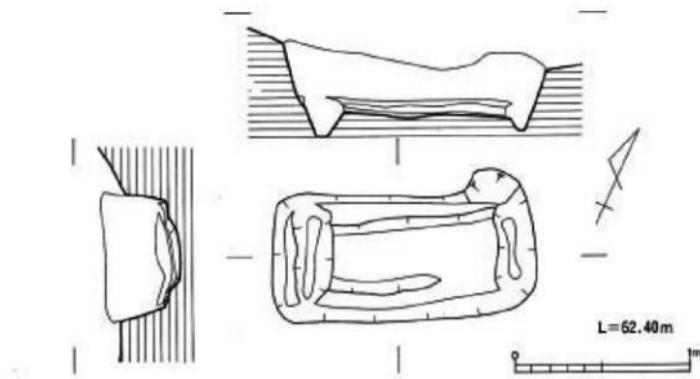
第15図 第3号古墳第3主体実測図 ($S = 1:30$)



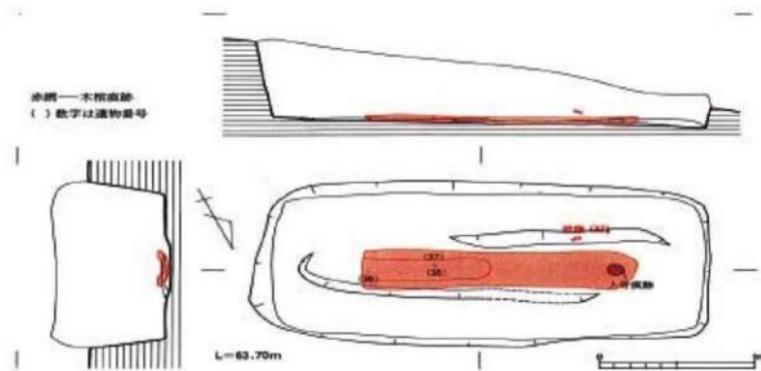
第16図 第3号古墳第4主体実測図 ($S = 1:30$)



第17図 第3号古墳第5主体実測図 (S = 1:30)



第18図 第3号古墳第6主体実測図 (S = 1:30)



第19図 第3号古墳第7主体実測図 (S = 1:30)

る。平面形状は隅丸長方形で、主軸方位はN19° E、規模は検出面で長さ132cm幅60cmである。墓壙底面は、北半分は隅丸方形、南半分はいびつな半円形で、長さ125cm最大幅55cm、最高所の標高は61.83mで、深さは最大65cmである。

遺物は、墓壙底面中央のやや西側壁よりから管玉(33)が出土した。標高は61.9mで、穴は短軸方向を向いていた。

○第6主体（第18図・図版12a）

第6主体は墳丘東南東側、墳裾から約2.7m、第4主体の東約1mに位置する。平面形状は隅丸長方形で、主軸方位はN65° E、規模は検出面で長さ150cm幅75cmである。墓壙底面は長さ95cmで2段に掘り込まれており、一次壙の幅は西小口で60cm東小口で50cm、その中央に掘り込まれた二次壙は上端で幅37cm、底面で30cmである。底面の標高は一次壙が61.90m、二次壙で61.80mで、深さ最大で46cmである。また、底面の両小口際には溝が掘り込まれており、その断面形状は逆台形で、幅は上端で15~20cm底面で約5cmで、墓壙底面からの深さは西側が15cm、東側が7cmである。位置と形状から、組み合わせ式木棺の材を差し込むための溝と考えられる。

本主体から遺物は出土していない。

○第7主体（第19図・図版12b）

第7主体は墳丘東側、墳裾から2m、第6主体の北1.5mに位置する。平面形状は隅丸長方形で、主軸方位はN13° W、規模は検出面で長さ275cm幅は南小口で90cm北小口で85cmである。墓壙底面は、平面形状が側辺が内湾する細長い鼓形で、長さ255cm幅南小口77cm北小口57cm中央部46cmである。墓壙底面の標高は61.87mで、深さは最大62cmである。また西側壁には、墓壙底面から約10cmの高さに、長さ135cm最大幅6cmの細長い平坦面がつくられていた。

本主体の埋土は真砂土を主体とするが、墓壙底面直上において、中央部での厚さ約10cmの黄褐色の土層を確認した。この層は墓壙底面から約10cm上方で面的な広がりを確認することができ、この面での平面形状は長円形で、長さ200cm最大幅45cmである。その位置と形状から、本主体に納められた木棺の痕跡と考えられる。なお、木棺の全体の形状は確認できなかったが、本層の形状から、底面の形状はゆるやかな舟底状であった可能性が高い。

本主体からガラス小玉(34)が出土した。

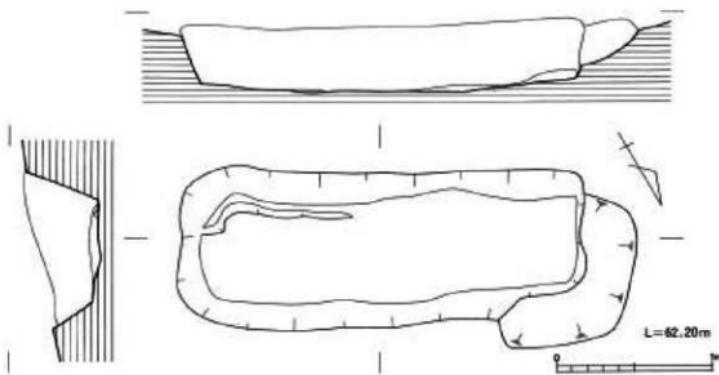
○第8主体（第20図・図版12c）

第8主体は墳丘東北東側、墳裾から3.8m、第7主体の北2mに位置する。平面形状は隅丸長方形で、主軸方位はN62° W、規模は検出面で長さ242cm幅115cmである。墓壙底面は、長さ255cm幅65cmで、墓壙底面の標高は61.63mで、深さは最大52cmである。墓壙底面の西側辺際南半には溝が掘り込まれており、断面形状逆台形で、長さ約100cm深さ4cm、幅は上端で10cm底面で5cmである。位置と形状から、組み合わせ式木棺の側板を差し込む溝の可能性を考えられる。

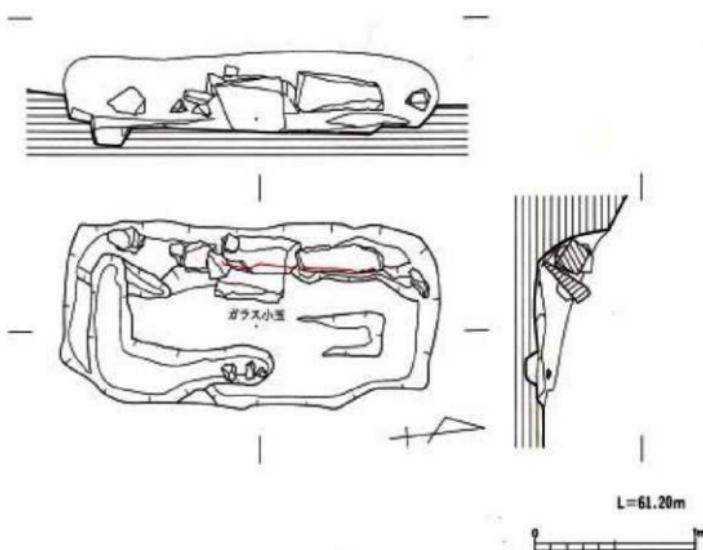
本主体から遺物は出土していない。

○第9主体（第21図・図版13a）

第9主体は墳丘東側、墳裾から10m、第7主体の東7.5mに位置する。第3号古墳に伴う埋葬主体群中唯一の箱式石棺であるが、斜面中に位置していたため東半分の墓壙・石棺材は流失している。



第20図 第3号古墳第8主体実測図 (S = 1:30)



第21図 第3号古墳第9主体実測図 (S = 1:30)

墓壙は平面形状が南にややひらく隅丸長方形で、主軸方位はN9° E、規模は検出面で長さ234cm幅は南小口100cm北小口87cmである。墓壙底面の標高は60.52mで、その南小口及び東西両側壁際には、石棺材を据えるため幅約15~25cm、深さ10cmまでの溝が掘り込まれている。据えられていた石棺材の大半は失われており、元位置をほぼ保っていると思われるは西側壁の2石のみである。石材の規模は長さ約50cm厚さ約15cm高さ10~20cmで、横長に据えられている。石棺の構造は、欠損部分が多く明らかにはできなかった。このため、石棺の内寸も不明確であるが、遺存していた石材や底面の溝などの位置関係から推定すれば、概ね長さ160cm幅30cm高さ20cm程度であろう。

遺物は、墓壙底面のほぼ中央、底面から約10cmの高さからガラス小玉(35)が出土した。

○第10主体(第22図・図版13b, 14a)

第10主体は墳丘南側溝の外側、溝南岸から約2mに位置する。平面形状は側辺がやや外湾する隅丸長方形で、主軸方位はN68° Wである。規模は、一次壙が検出面で長さ295cm幅は両小口130cm中央部150cm、底面が長さ280cm幅両小口115cm中央部130cmである。二次壙は一次壙底面中央部が浅く掘りくぼめられたもので、平面形状は長円形で、上端で長さ約240cm最大幅58cm、底面で長さ約235cm最大幅39cmで、深さ3cmである。二次壙底面の標高は62.58mで、深さは最大80cmである。

本主体の埋土は真砂土を主体とするが、二次壙底面直上において、厚さ2~8cmの黄褐色の土層を確認した。この層は二次壙底面から約8cm上方で面的な広がりを確認することができ、その平面形状は北小口が半円形になる長方形で、長さ178cm最大幅34cmある。また、南半部は断面形状が浅いU字形であった。その位置と形状から、本主体に納められた木棺の痕跡と考えられる。なお、木棺の全体の形状は確認できなかったが、断面の形状から、底面の形状はゆるやかな舟底状であった可能性が高い。

また、木棺痕跡の北小口端から約20cm中央側、墓壙底面から約5cmの高さで、直径約10cm厚さ5cmの黒紫色の土層を確認した。位置と形状から、葬られた遺体の後頭部の痕跡の可能性が考えられる。

遺物は、鉄劍1点(32)・ガラス小玉3点(36~38)が出土した。鉄劍は木棺痕跡北半部西縁の西約15cmに位置し、一次壙底面からの高さは約10cmである。切っ先は北側を向いていた。一方ガラス小玉は全て木棺痕跡の南半部埋土中からの出土である。その出土状況から、鉄劍は木棺外の供献品、ガラス小玉は相内に納められた副葬品と考えられる。

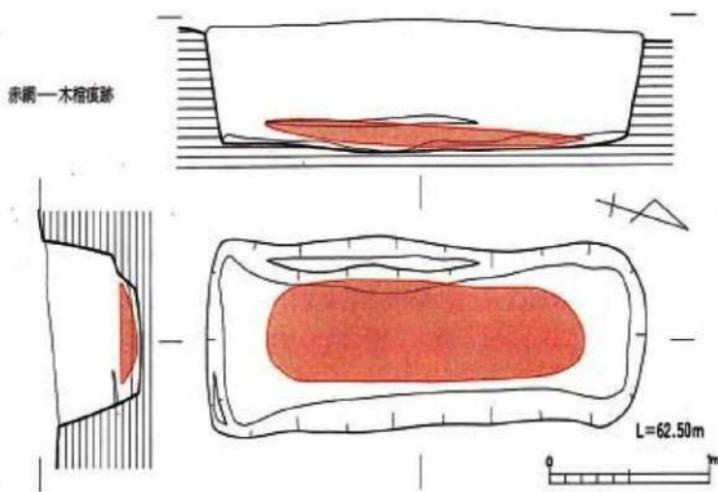
④出土遺物(第23, 24図・巻頭図版、図版14b, 15, 16, 17)

・鉄劍(9)

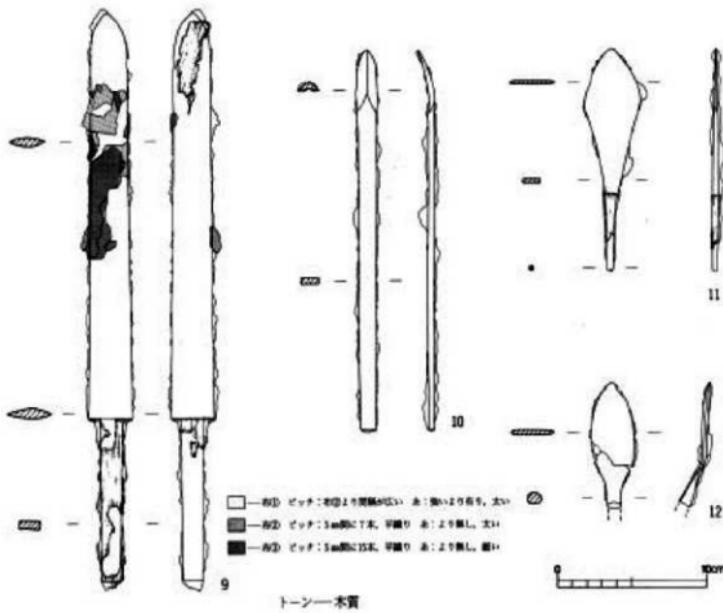
完形品で、全長345mm刃部最大幅20mm刃部厚7mm茎部長99mm茎部端幅13mm茎部厚5mm重量191.4gである。明確な闊を持ち、基部は平らである。目釘穴は無い。茎部と峰に木質が遺存している。茎部のものは柄と考えられ、材はとねりこ属である。一方峰のものは、鞘と棺材の可能性があるが、材質は不明である。また刃部の上半分に布の痕跡が残っていた。副葬時に劍を巻いていたものと考えられるが、ピッチと糸のよりから以下の3種類に分けることができた。

① 糸のピッチが幅1cm中に30本で、糸が細くよりのかかっていないもの。

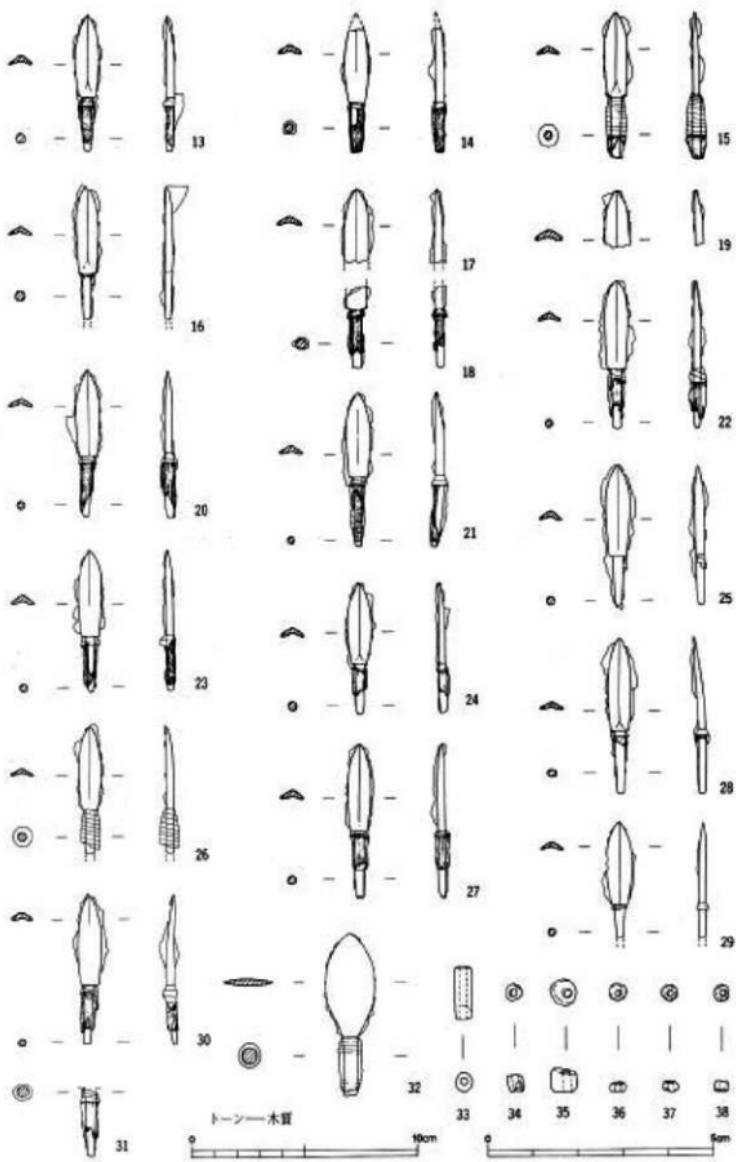
② 糸のピッチが幅1cm中に14本で、糸が太くよりのかかっていないもの。



第22図 第3号古墳第10主体実測図 (S = 1:30)



第23図 第3号古墳出土遺物実測図 [1] (S = 1:3)



第24図 第3号古墳出土遺物実測図〔2〕(S=1:2, 33~38はS=1:1)

③ 糸のピッチは正確に計測できなかったが、より間隔があき、糸が太くよりがかかっているもの。

実体顕微鏡で観察できた範囲では内側から③→②→①の順に重なっており、さらに①は二重になっていた。副葬時に剣を巻いた布と考えられる。

・鉈(10)

全長 220 mm、刃部は長さ 37 mm 最大幅 15 mm、明確な鎬と裏鉈を持ち断面形状は「へ」字形で、身部は横断面が長方形で最大幅 12 mm 厚さ 4 mm 重量 66.6 g である。

・鉄鎌(11～32)

(11)は全長 134 mm で、茎部側に大きく引き延ばされた菱形、いわゆる主頭式の鎌身を持つ凸基有茎式である。刃部は屈曲点から峰側だけに形成されており、緩やかに外湾しながら開き、断面形状はレンズ状で厚さは 2 mm である。最大幅は屈曲点で 38 mm である。屈曲点から茎部側はわずかに内湾しながら閉じてゆく。茎部との明確な関は無い。峰から 87.5～118 mm の部分に矢柄と考えられる木質が遺存している。木質に覆われているためこの部分の断面形状は不明確だが、屈曲点から木質との間の断面形状は長方形で厚さは 3 mm、木質から茎部端の間の断面形状は円形で端部の直径は 3 mm である。重量は 36.9 g である。

(12)は柳葉形の鎌身を持つ凸基有茎式で、鎌身部と茎部の間には明確な関がある。茎部は約 10 mm を残し欠損しており、現在長 76 mm 鎌身長 66 mm 最大幅 30 mm である。刃部が形成されているのは峰から約 50 mm の範囲で、この部分の断面形状はレンズ状で、厚さは 3 mm である。残存茎部の端は断面形状 楕円形で、幅 8.5 mm 厚さ 6.5 mm である。重量は 23.3 g である。

(13～31)は平基有茎式で鎌身部と茎部の間には明確な関がある。鎌身部の平面形状は細身の柳葉形の範疇に入るものの、明確な鎬と裏鉈を持つ断面 V 字形で、一見小型の鉈のようにも見える独特の形状をしている。茎部の断面形状は円形である。この形状の鉄鎌は、韓国釜山市老圃洞遺跡第31号墳などから出土している「骨鎌形鉄鎌」と呼ばれているもので、日本では現在のところ福岡県郷野遺跡出土例が知られるのみである²⁾。詳細な寸法は第3表に記すが、概ね鎌身長 55 mm 前後、幅 10～11 mm 茎部端径 3～4 mm、全長は完形のもので 60 mm 前後と、形状・寸法ともに非常に規格性が高い。なお、茎部が遺存していたもの全てにおいて多少の差はあるものの、矢柄（タケアキ）と、矢柄と鎌を固定するための樹皮が遺存していた。

(32)は木の葉形の鎌身を持つ凸基有茎式で、鎌身部と茎部の間には明確な関がある。現存長 66 mm 鎌身長 42 mm 最大幅 21.5 mm で茎部は約 25 mm を残し欠損している。鎌身部の断面形状は厚さ 3 mm のレンズ状で、鎌身全体に刃部が形成されている。残存茎部の端の断面形状は円形で、直径 6 mm である。

重量 12.6 g である。なお、茎部には矢柄の部が遺存しており、矢柄の直径は 10 mm である。

・管玉(33)

碧玉製で長さ 10.5 mm 直径 3.8 mm 重量 0.4 g で片側穿孔である。

・ガラス小玉(34～38)

いずれもアルカリ珪酸塩ガラスのカリガラス (K₂O-SiO₂ 系) で、色調は淡青色である。また、内部に残る気泡が全て球形であることから、鋳造品と考えられる。寸法は以下の通りである。

- (34) 直径 3.5 mm 長さ 3.1 mm 孔径 1.5 mm 重量 測定不能
 (35) 直径 6.0 mm 長さ 5.0 mm 孔径 2.0 mm 重量 0.2 g
 (36) 直径 3.8 mm 長さ 2.0 mm 孔径 1.1 mm 重量 測定不能
 (37) 直径 3.7 mm 長さ 2.0 mm 孔径 1.2 mm 重量 測定不能
 (38) 直径 3.1 mm 長さ 2.0 mm 孔径 1.4 mm 重量 測定不能

⑤ 築造時期

第3号古墳の築造時期については、時期決定の参考になる遺物が一切出土しなかつたため明確にはできなかった。ただし、類例が非常に限られているが、骨鎌形鉄鎌の国内に於ける出土例は、弥生時代末から古墳時代初頭にかけてのものである。

第2表 骨鎌形鉄鎌観察表

番号	全長(mm)	刃部長(mm)	刃部幅(mm)	基部幅(mm)	茎部幅(mm)	茎部径(mm)	重量(g)	備考
13	55	33	10.5	7.5	22	3	3.9	矢柄遺存
14			10	7.5	20	3.5	3.6	矢柄遺存
15	60	34	10	7.5	26	4	4.6	矢柄径8.5mm
16	55	35	10	7.5	20	3.5	4.1	
17			11				2.5	18と同一?
18				8.5	24	4	2.4	17と同一? 矢柄遺存
19			11				1.5	刃部のみ
20	60	35	11	8	25	3.5	4.2	矢柄遺存
21	63	35	11	8	28	3	4.5	矢柄遺存
22	60	36	10	8	24	3.5	5.9	矢柄径8mm
23	58	35	10	8	23	3.5	4.4	矢柄遺存
24	53	33	10.5	6.5	20	4	3.6	
25	57	37	11	8	20	3.5	5.6	矢柄遺存
26	53	34	10	7	19	4	3.9	矢柄径8.5mm
27	63	35	10	7.5	28	4	4.3	矢柄遺存
28	63	38	10.5	8	25	3.5	5.0	矢柄遺存
29		34	11	7			2.5	
30	61	36	10.5	8	25	3.5	4.7	矢柄遺存
31					28	3.5	2.1	茎部のみ 矢柄遺存

2. その他の遺構

(1) 概要

前述した古墳以外にも遺構を確認した。調査区の南西半を占める標高64m平坦面の南西端でSH1を、その東側にSB1を、さらにその北側にSK1を、また、調査区の北東半を占める緩斜面中、57m平坦面の南側、標高約58～55mの位置でSH2・3、SX1、SK2・3を、北西側、標高約57～55mの位置でSX2、SK4・5、SX3を確認した。

(2) 遺構

① SH1（第25、26図・図版18）

64m平坦面の南西端に位置する住居跡で、南西側半分は調査区域外であるため確認できていない。また床面に掘り込まれた楕円形の窪みは、埋土の状況から、尾根上に点在する後世の土坑のひとつである。

本住居跡の平面形状は確認範囲から推定すると歪な隅丸方形である。確認した床面の規模は北東辺で約370cm、調査範囲外に延びる北西辺で約300cm、南東辺で約100cmである。最高所の標高は63.27mである。壁高は最大26cm、壁溝は北側から東側にかけて断続的に遺存しており、幅10～15cm、深さは2～7cmである。

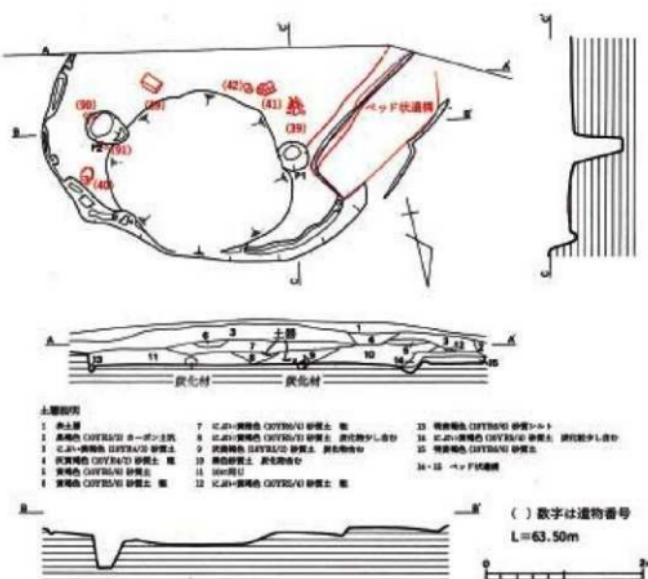
床面にはP1・P2を確認したが、規模・形状から主柱穴と考えられる。P1は底面直径が約15cm、深さが約60cm、底面標高62.6m、P2は底面直径が約25cm、深さが約40cm、底面標高62.77mで、柱穴間の距離は約250cmである。また北西壁に沿った床面上には、幅約70cm、長さ約200cm、高さ約15cmの長方形の盛土を確認した。位置・形状からベッド状遺構と考えられる。検出部の床面や柱穴の状況から、床面の平面形状が径5～6mの楕円形で5基の主柱穴を持つ住居と推定される。

ところで、本住居跡からは多量の炭化材が出土した。これらの炭化材は出土位置と形状から以下の5つに大別できる。

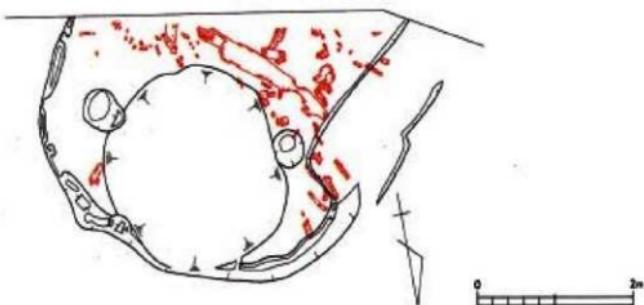
- ① 床面中央付近の幅15～20cm、長さ約190cmの板状の材
- ② 床面中央付近の径15～20cmの丸太状の材
- ③ 床面中央付近の径10cm程度の丸太状の材
- ④ 床面縁辺で中心から壁面へ向けて放射状に延びる径3～5cmの丸太状の材
- ⑤ 2～3cmの規則性のない材

①は位置・規模から棟木・梁材とい？た上屋構造を構成する材で、P1・P2とこれに対応する主柱穴との間に位置しており、棟木であった可能性が高い。棟木であるとするなら北西一南東を棟方向とする住居を想定できる。②は規模から柱材、③は規模から垂木材であると考えられる。④は位置や規模から垂木材であり、⑤は建築材が炭化して碎けたものであると考えられる。これらの炭化材は科学分析を行った結果、すべて、ブナ科クリ属のクリであることが判明した。

これらの炭化材が出土していること、また、後述するように遺構に伴いほぼ完全に復元できる弥生土器等の遺物が9点出土していることから、本住居跡は失火による焼失住居であると考えられる。遺物は床面上から、弥生土器(39～42)と砥石(89～92)が、また、埋土中からは弥生土器(43・44)



第25図 SH 1 実測図 (S = 1:60)



第26図 SH 1 炭化材出土状況実測図 (S = 1:60)

と鉄鎌(98)が出土した。本遺構の時期は、土器型式から上深川Ⅲ式古段階であると考えられる。

② S B 1 (第27図・図版19a)

S H 1 の東側約5mに位置する掘立柱建物跡である。南東部は傾斜が急になっており、流失していると考えられる。柱穴はコの字形に位置する6基を確認した。柱穴の底面直径は20~30cm、底面の標高は62.12~62.24mとほぼ水平である。柱間距離はP 1-P 2間で約180cm、P 2-P 3間で約140cm、P 3-P 4間で約170cm、P 1-P 5間で約195cm、P 4-P 6間で約185cmである。P 1-P 4間の柱間距離の間隔はP 1-P 5とP 4-P 6の間隔よりも短いため、P 1からP 4のラインを長軸すなわち桁行とする柱穴の配置が想定できる。その場合、棟方向はN43.5° Eとなる。

なお、桁行であるP 5-P 6間に柱穴が確認できなかったことから、さらに斜面側にP 1~P 4に対応する柱穴列が存在し、2間×3間の柱穴配置になる可能性が考えられる。P 1~P 4に対応する4基の柱穴は、各柱穴の底面標高とほぼ同じ高さの底面標高と想定した場合、地山に達していないため、流失したものと考えられる。ただ本遺構を2間×3間の建物とすると、地山に達していない南東部の柱穴の存在から、長期間の使用や重量物の貯蔵には不向きである。なお、本遺構に伴う遺物は出土しておらず、その性格については明確にし得なかった。

③ S K 1 (第28図・図版21a)

S K 1 はS B 1 の北側約7mに位置する平面形状は円形、断面形状は、ほぼ長方形の土坑である。底面の規模は南北に約80cm、東西に約90cm、深さは、現状約70cmで、底面標高は62.35mである。土坑の形状・規模からS K 1 は貯蔵用と考えられる。また底面には、幅約6cm、深さ3~5cmの溝が、壁面に沿ってほぼ全周している。この溝は、貯蔵物の湿気防止を目的とした溝であると考えられる。

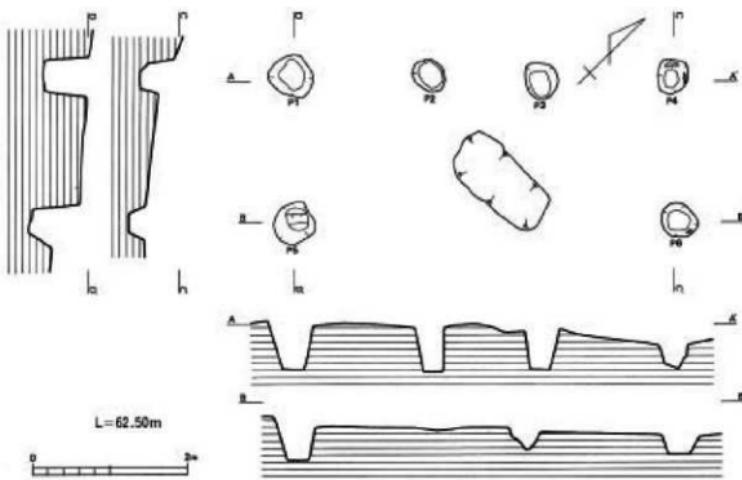
なお本遺構に伴う遺物は出土していない。

④ S X 1 (第29図・図版19b、20a)

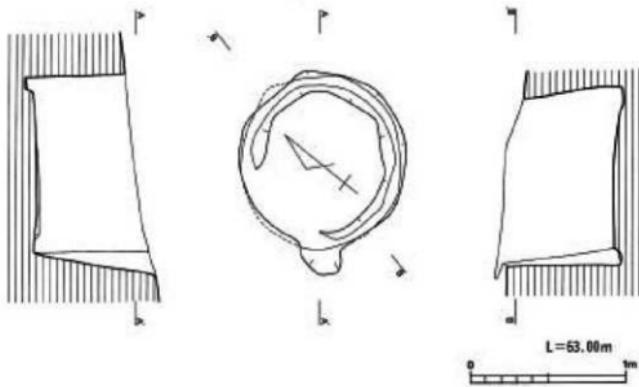
S X 1 は調査区北東半の緩斜面中、57m平坦面の南側に位置し、尾根筋に平行して30~100cm程度掘り込んで造られており、残存部で幅約11mである。位置や形状からS H 2等の築造に先行し、整地の目的で築造されたものと考えられる。S H 2の東側が確認できず、流失していることから、本遺構も東側が流失していると考えられる。平坦面はS H 2の南辺で南北に二分し、北部は長さ約7.5m、奥行0.2~1.8m、最高所の標高57.1m、一段下がる南部は長さ約3.9m、奥行0.25~1.08m、最高所の標高56.4mである。これらの平坦面の際には、ほぼ全域に溝状遺構が造られており、このうち北側平坦面の溝は幅3~12cm、深さ約2~18cm、底面の標高は約57.0m、南側平坦面の溝は幅5~58cm、深さ7~20cm、底面標高は約55.5mである。なお、掘方壁面中、S H 2の南西からS K 2の東側にも溝状遺構が位置する。この溝は平坦面に伴うものではないものの、底面標高が約57.0m前後であり、北端から伸びる溝状遺構と一連のものとして造られたものと考えられる。

遺物は平坦面上から、弥生土器(47・48)が出土した。本遺構の時期は、土器型式から上深川Ⅲ式古段階であると考えられる。

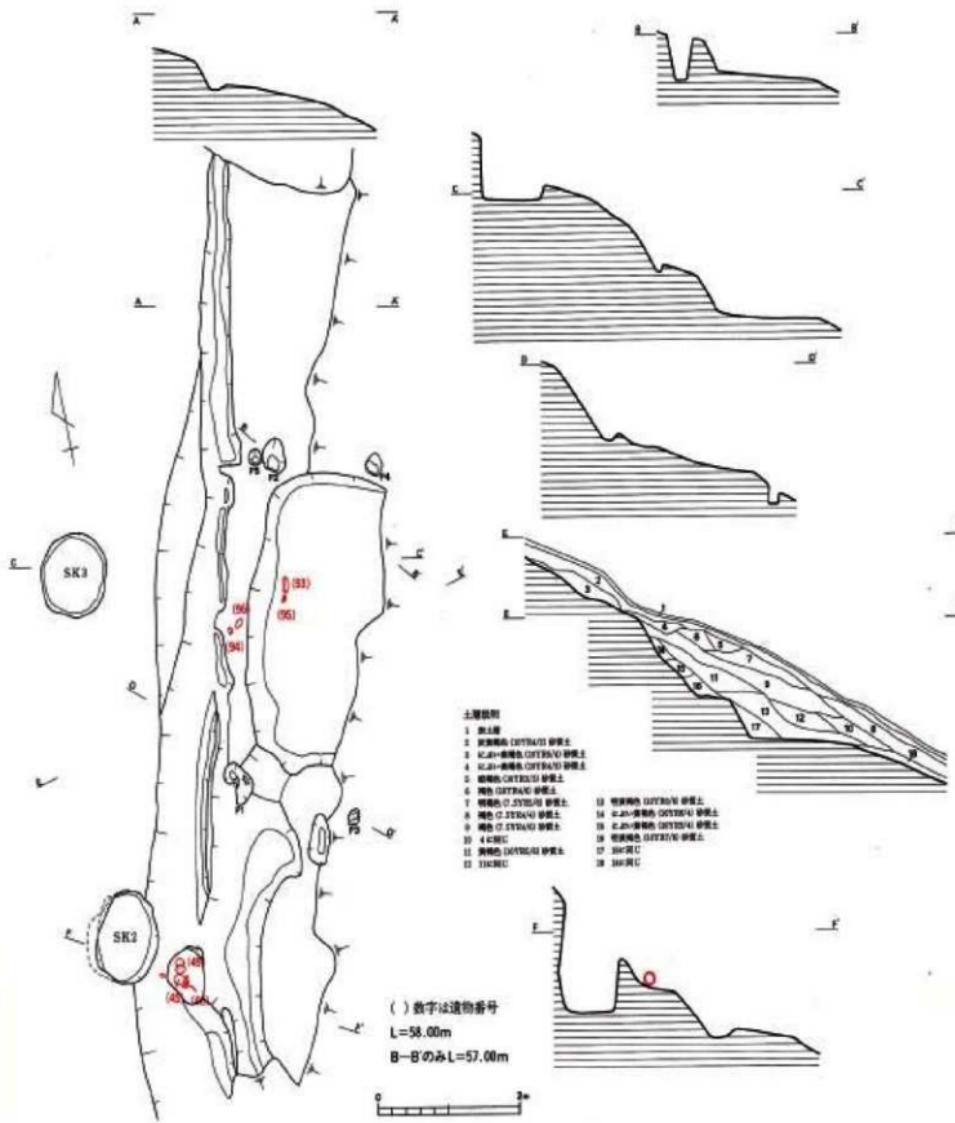
また、S X 1 の掘方壁面中、S K 2 の東に隣接して、南北約70cm、東西約50cmの歪な楕円状の平坦面を確認した。平坦面上からは弥生土器のはば完形の壺形土器(49)、壺形土器(45・46)が出土した。壺形土器(49)は若干傾いているものの口縁を上に向けて立った状態で出土しており、人為的にこの



第27図 SB 1 実測図 ($S = 1:60$)



第28図 SK 1 実測図 ($S = 1:30$)



第29図 SX1・SH2 実測図 (S = 1:60)

平坦面上に土器が置かれた可能性がある。本遺構の時期は、土器型式から上深川Ⅲ式古段階であると考えられる。

⑤ S H 2 (第29図・図版20b)

S H 2は、S X 1のほぼ中央に位置している。本住居跡は、壁面がコの字状に遺存しており、東壁側は流失したと考えられる。残存部から推定できる平面形状は長方形で、残存部での床面の規模は、南北に約340cm、東西に現状で約140cm、最高所の標高は56.51mである。壁高は最大42cmである。

柱穴は床面では確認できず、すべて掘方の外側に位置している。位置とその規模から、主柱穴と考えられるのはP 1～P 4で、底面はP 2が直径約18cmの円形で大きめだが、他は約10cm前後の歪な長円形である。P 1は深さ約30cm、底面標高56.64m、P 2は深さ約50cm、底面標高56.43mで、P 3は残存部で深さ約30cm、底面標高56.20m、P 4は残存部で深さ約30cm、底面標高56.22mである。柱間距離はP 1～P 2間で約400cm、P 1～P 3間で約170cm、P 2～P 4間で約140cmである。また、P 2の西側に隣接して、底面直径約10cm、深さ約21cm、底面標高56.86mのP 5を確認した。本住居跡東側は傾斜が急であるため、P 3から約170cm、P 4から約140cm東側に柱穴が存在したとは考えにくい。したがって掘方は約400cm×170cm程度の長方形で、上屋構造は、掘方に近接し、南北方向に対称的に位置するP 1・P 2・P 3・P 4の計4基を基本とすると考えられる。P 5は、P 2と距離が近いことから、上屋構造を支えるものか、もしくはP 2を補強する柱のものであると推定される。なお、柱穴の底面標高を比べるとP 1～P 3間で44cm・P 2～P 4間で21cm西側の方が高くなっている。これは、S X 1が築造時においても、平坦面の奥行がそれほど無く傾斜しており、支柱を支えうる柱穴の底面標高が東側では低くなっていたことを示していると考えられる。

ところで、S X 1の南側は北側に比べ、本住居跡の南側で約30cm下がっている。また住居の南壁に沿って床面から約6cm高い段状の遺構を確認した。このことから住居の入口施設が南側に位置していた可能性がある。

ここで、本住居跡の上屋構造について考えてみたい。本住居跡において、宮本長二郎氏の分類3)による伏屋式の住居構造の柱をそのまま、掘方の外側に移動させたと想定した場合、柱の上部は床面から、かなり高い地点に位置することとなる。その場合、垂木の先端が、掘方からかなり離れることとなり、掘方の意味が失われることになる。さらに本住居跡西側には傾斜面が近接しており、地形的に難がある。柱穴の位置・地形面からは、壁立式の構造の可能性が考えられるが、そのことを示す痕跡は確認できなかった。これらのことから、P 1～P 2、P 3～P 4方向を棟とする切妻屋根を上屋構造とした可能性が考えられる。

遺物は、弥生土器(52～60)と砥石(93・95)が床面から、西壁上平坦面で、砥石(94)・磨石(96)が出土した。本遺構の時期は、土器型式から上深川Ⅲ式古段階であると考えられる。

⑥ S H 3 (第30図・図版22a)

S H 3は、調査区北東半の緩斜面中、57m平坦面の南側、S H 2の北東約10mに位置している。南西側が第2号古墳により削平されているが、残存部から推定できる平面形状はやや歪な方形である。本住居跡は床面及び土層の状況から少なくとも1回の拡張が行われていた。以下、床面の低い方からS H 3 a・S H 3 bと呼称し、述べていくこととする。

S H 3 a は、床面の規模が一辺約 245 cm で、標高は約 55.8 ~ 55.9 m である。西壁は大半が S H 3 b によって削られているが、約 10 cm 程度の高さが遺存している。壁高は最大 95 cm である。また、床面の南西 1 側には、四壁から東に約 6 cm 離れて、床面との比高差が現状で約 2 ~ 3 cm の盛り上がりがある。この盛り上がりと西壁との間は、S H 3 a の壁溝である可能性が考えられる。

S H 3 b は、S H 3 a 面を東西に約 25 cm 拡張したもので、床面の規模は南北約 245 cm、東西約 270 cm、標高は約 55.9 ~ 56.0 m である。壁高は最大 89 cm である。西壁沿いには約 120 cm にわたり、幅約 4 ~ 7 cm、深さ約 4 ~ 9 cm の壁溝を確認した。また、床面中央に約 55 × 90 cm の範囲で炭化物を含む層の広がりを確認した。

柱穴は S H 2 と同じく床面上には無く、掘方の外側から、P 1 ~ P 4 の 4 基を確認した。底面は P 1 が直径約 27 cm、P 2 が直径約 23 cm の円形で、P 4 が南北約 20 cm、東西約 33 cm の長円形である。P 3 は北東面が第 2 号古墳埋葬主体の築造により削られており、北西 - 南東方向 17 cm、北東 - 南西方向の残存部は約 22 cm である。第 2 号古墳の築造により、いずれも上部が削平されており、底面標高は、P 1 が 56.35 m、P 2 が 56.7 m、P 3 が 56.54 m、P 4 が 56.28 m である。柱間距離は P 1 - P 2 間で約 300 cm、P 1 - P 3 間で約 410 cm、P 2 - P 3 間で約 135 cm、P 3 - P 4 間で約 220 cm である。掘方からの距離は P 1 - P 2 が約 70 cm、P 3 が約 80 cm、P 4 が約 75 cm である。掘方との位置関係から、上屋構造の基本となる主柱穴は長方形の床面の対角線上に位置する P 1・P 3 と北壁ラインのはば中央に対応する位置にある P 4 の 3 基であると考えられる。P 2 は西壁上縁に沿った P 1 - P 3 を結んだ線より若干外側にずれていること、P 3 寄りに位置すること、底面標高も他のものより若干高いことなどから、副次的な柱穴であった可能性が考えられる。なお、掘方と上部構造を支える 3 基の柱穴の位置関係から復元すると、P 4 の約 220 cm 東に 1 基、P 4 とその 1 基と掘方を挟んで対応する位置に 2 基の計 6 基の柱穴が必要となる。なお、床面には大幅な変更が無く、これらの柱穴は、S H 3 a・S H 3 b に共用されていたと考えられる。

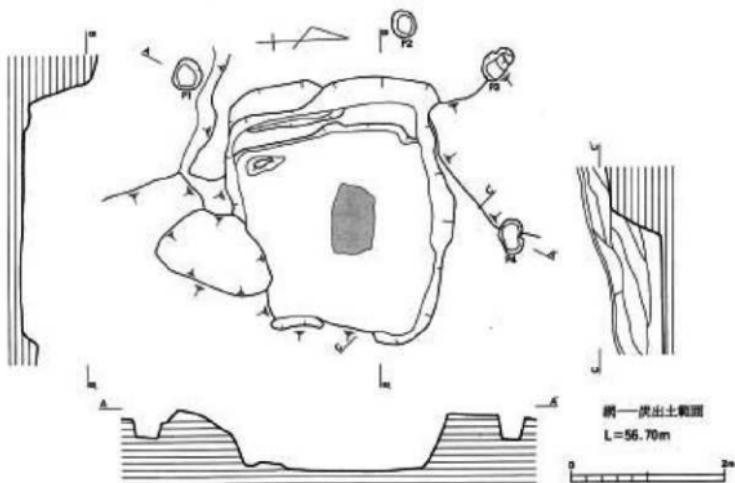
本住居跡の上屋構造も、S H 2 で想定した切妻屋根の可能性が考えられる。その場合 P 1 の東隣の柱穴と P 4 のラインを棟木とする構造が想定できる。なお、本住居跡の床面積は約 6.8 m² と広島市域で見られる住居跡の中でも最小級の面積であり、居住を行う場合の利便性は著しく低いものと考えられることから、住居としての使用に疑問が残る。小屋的な役割を果たしていた可能性も考えられよう。

なお、本住居跡の東側は平坦面になっている。この平坦面の最高所の標高が 56.93 m であることと S X 1 の最北東部が 57.05 m であることから、この平坦面が S X 1 の延長である可能性も考えられる。ただ、P 2 の周辺と S X 1 の間は、第 2 号古墳南側周溝の築造により削平されており、確認することはできなかった。

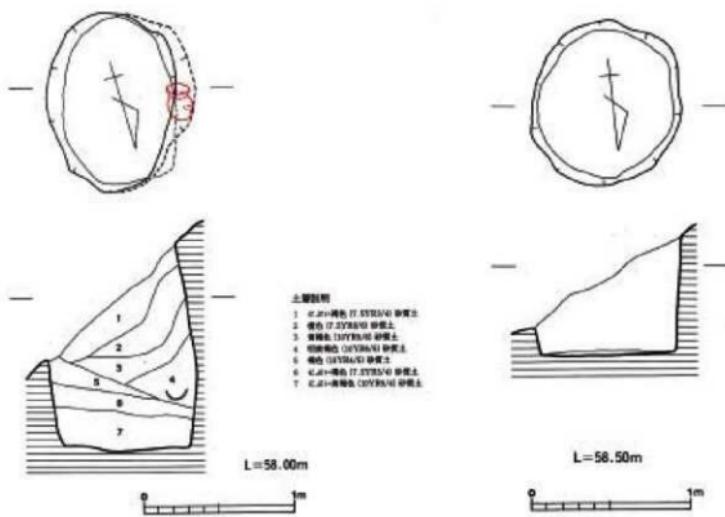
本遺構に伴う遺物は出土していないが、埋土中から弥生土器(61 ~ 63)が出土しており、本遺構の時期は、土器型式から上深川Ⅲ式古段階以降であると考えられる。

⑦ S K 2 (第 31 図・図版 21b)

S X 1 の南端から約 1.3 m、掘方の西側に隣接して位置する平面形状が長円形、断面形状が西側で袋状になる土坑である。底直の規模は南北に約 110 cm、東西に約 70 cm、深さは最大約 130 cm で、底面



第30図 SH 3 実測図 (S = 1:60)



第31図 SK 2 実測図 (S = 1:30)

第32図 SK 3 実測図 (S = 1:30)

標高は56.99mである。土坑の形状・規模からSK2は貯蔵用と考えられ岳土坑内の土層は7層に分かれるが、上側の1～4層は山側から下側5～7層は谷側から土が流入して埋没していた口このことから、本土坑には当初、山側からの土の流入を防ぐ施設として、谷側に口の開いた上屋構造が設置されており、廃絶後、いずれかの時点で上屋構造が無くなつたことで、土の流入方向が変化したと考えられる。

また、本土坑内からは使用可能な髪形土器(64)が5層の上面から出土している口土器はその形状から上深川Ⅲ式古段階に属すると考えられる。

なお、先述のとおり、本土坑の東側に接して、弥生土器が出土した小規模な平坦面を確認している。土器の出土状況など本土坑との関係が想定できるが、土層の観察ではこれを明らかにすることできなかつた。ただし、土器型式では、時期差がほとんど無いものと考えられる。

⑧ SK3（第32図・図版21c）

SX1の南端から約5.9m、掘方の西側約0.7mに位置する平面形状が長円形、断面形状が逆台形の土坑である。底面の規模は南北に約95cm、東西に約85cm、深さは最大約75cmで、底面標高は57.91mである。土坑の形状・規模からSK3は貯蔵用と考えられる。一

本遺構に伴う遺物は出土していない。

⑨ SX2（第33図・図版22b、23a）

SX2は64m平坦面の北側、57m平坦面へ向けて急峻に下る斜面中に位置する。北東側は第2号古墳周溝の築造に伴い削平されている。また北西側は急峻な斜面際の直前に位置しているため、流失した可能性がある。

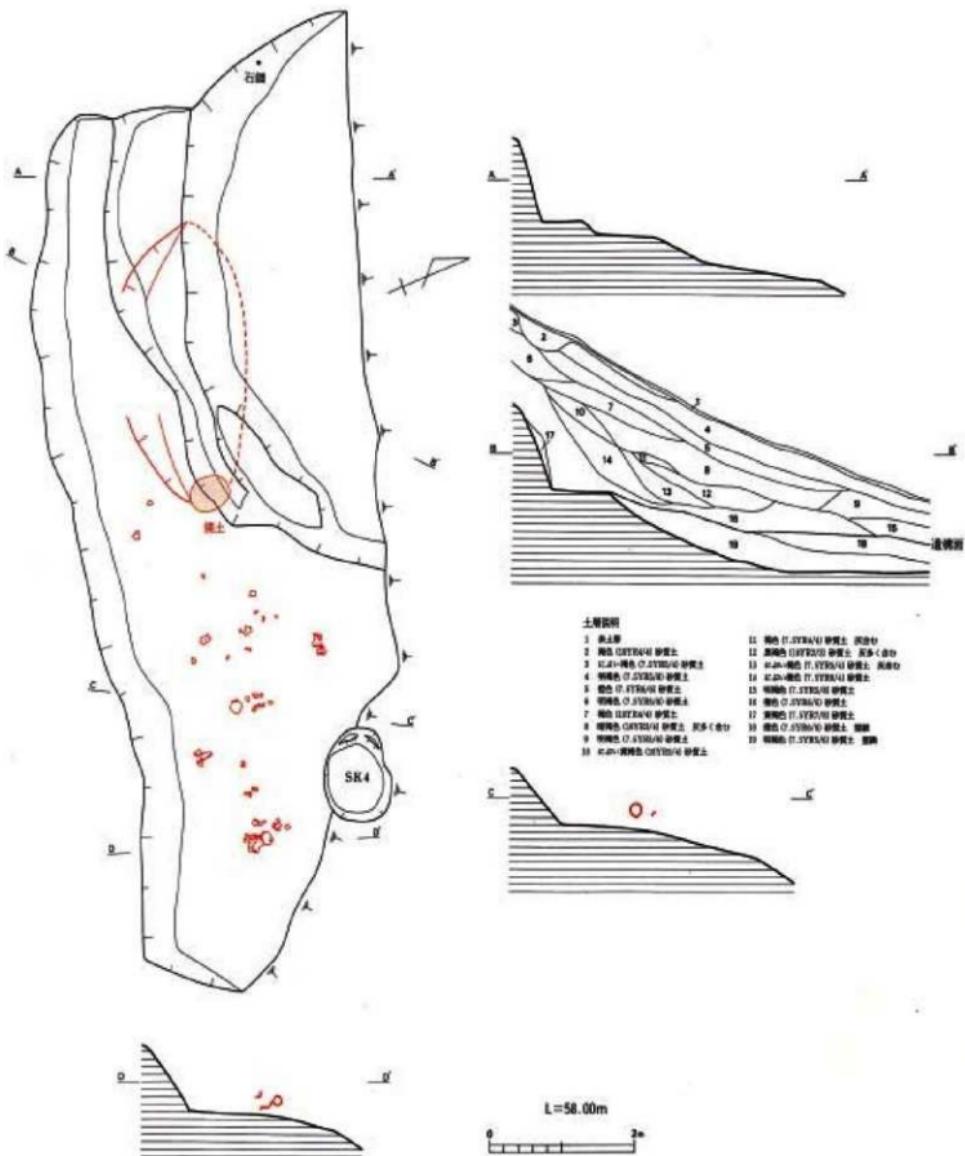
本遺構は等高線に平行して、60～100cm程度掘り込んで造られており、幅約12m、奥行は残存部で1.5～4.1mである。本遺構は大きく2つの平坦面から構成されており、標高の高い順にA・Bと呼称する。

平坦面Aは最大規模の平坦面で、現状で幅約10.5m、奥行は東端では約1.2mであるが、中央付近で最大3.7mに拡がり、西面向けて再び狭まり、西端では約0.5mになる。標高は最高所で57.71m、最低所で57.22mである。

平坦面Bは、平坦面A西半部北側に位置する。半円形をしており幅約6.4m、奥行約0.6～1.9mで、標高は最高所で57.07m、最低所で56.81mである。また、平坦面A・B間の斜面中に細長い帯状の幅約4.8m、奥行約0.2～0.85mの平坦面と、その北側約10～15cm低い場所に位置する幅約2m・奥行約0.1～0.5mの平坦面を確認した。ただ、位置や形状からは、これらの平坦面の機能は想定できなかつた。時期については埋土中から後述する土器(65～78)が出土しており、その土器の時期よりは先行するが、埋土もそれほど厚くないため、それほど時期差は無いものと考えられる。

遺物は本遺構西端、平坦面Bへの傾斜面上で石錐(97)が出土した。

SX2の埋土中には、炭化物を大量に含んだ黒褐色の土層の広がりを確認した。位置はSX2南西部のほぼ中央で、平面形状は第2号古墳に向けて広がる半円形で幅約340cm奥行約100cm、SX2平坦面からの高さ約10～30cmである。また、この黒褐色土層の東側から多数の土器(65～78)の破片が出土した。いずれも床面から約12～45cmの高さに位置しており、SX2固有のものとは考えられない。



第33図 S X 2 実測図 ($S = 1:60$)

しかし、遺存状況が比較的良好なものが多いこと、第3号古墳付近から接合する土器片は一切出土していないことから、第3号古墳周辺から転落してきたものとも考えにくい。

以上を併せて考えるならば、この黒褐色土層は、廃絶後や埋まつたSX2をそのまま、もしくは僅かに掘りなおし、火を用いた行為を行った痕跡であり、土器はこの行為に伴う可能性が高い。

土器の型式は、上深川Ⅲ式古段階であり、いずれも古墳時代初頭のものである。またこの黒褐色土は、第2号古墳の区画溝の北半部に流れ込んでおり、その堆積は溝が僅かに埋まつた直上から始まっている。のことから、この黒褐色土層は第2号古墳と同時期のものと考えられ、第2号古墳に伴う祭祀が行われた可能性が考えられる。

⑩ SK4（第34図・図版24a, b）

SK4はSX2の平坦面Aのほぼ中央、第2号古墳の築造に伴う削平部にかかる位置に存在する平面形状は楕円形、断面形状は逆台形の土坑である。位置・状況から当初はSX2の平坦面内に築造されたものと推定される。底面の規模は南北に約78cm、東西に約87cm、深さは最大約72cmで、底面標高は56.62mである。土坑の形状・規模からSK4は貯蔵用であると考えられる。

また、底面より22～30cm上で、南北約60cm、東西約70cm、厚さ約30cmにわたる貝層を、土坑の壁面から内側に約10～15cm間隔を開けた状態で確認した。その位置と、貝層を構成する貝のうち二枚貝は大半が開いたり、対になる貝殻が無くなったりしており、食用に供された後のものと考えられることから、本遺構が貯蔵穴としての用途を終えた後、投棄されたと考えられ観貝種はカキ・アサリ・カガミガイ・ハマグリが主で、その他にコウロギガイ・タマビキガイ・サルボウガイが若干出土した。コウロギガイ・タマビキガイは食用ではないため、採集時に混入したものであろう。これらの貝は内湾や磯に棲息する貝である。

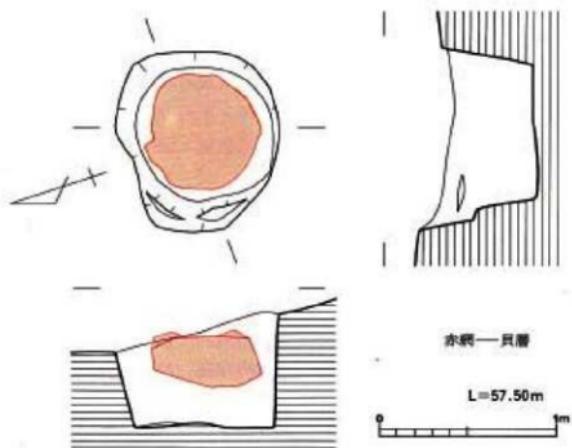
なお本遺構に伴う遺物は出土していないが、埋土中から弥生土器(79)が出土している。本遺構の時期は土器型式から、上深川Ⅲ式古段階以降であると考えられる。

⑪ SK5（第35図・図版24c）

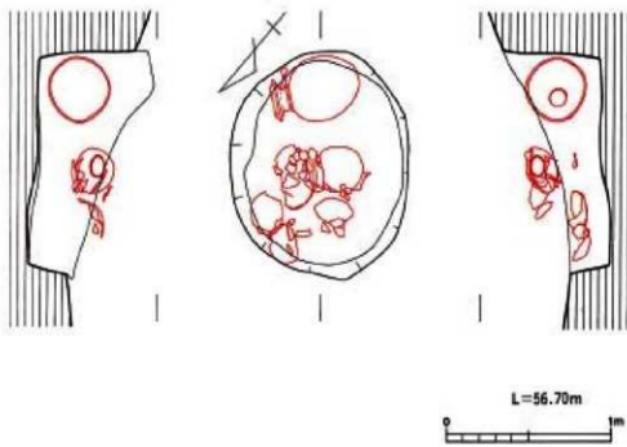
SK5はSK4の北東約4mの位置にある平面形状は長円形、断面形状は逆台形の土坑である。底面の規模は北西～南東方向に約115cm、北東～南西方向に約95cm、深さは最大約70cm、最小約20cmで、底面標高は55.92mである。土坑の規模・形状から、貯蔵穴と考えられる。土坑内からは、弥生土器(80～85)が出土した。このうち、壺形土器(80)、壺形土器(83・84)は、ほぼ完形に近い。土器の出土レベルは底面から約8cm上部と約20cm上部との2段階に分かれ。土器の型式は、布留0式の土師器であり、第2号古墳とほぼ同時期の遺構となるため、第2号古墳の築造に伴う祭祀が行われた可能性が考えられる。その場合、土器の出土レベルが2段階に分かれているのも、祭祀を2段階で行ったためと想定できる。

⑫ SX3（第36図・図版23b）

SX3は調査区北東半の緩斜面中、57m平坦面の北側、SH3の北西約10mの地点に位置する。壁面はコの字状に遺存しており、北側は完全に流失していると考えられる。平坦面規模は東西方向に約450cm、南北方向は現状で150～230cm、最高所の標高は55.45mである。壁高は最大112.2cmである。



第34図 SK 4 実測図 ($S = 1:30$)



第35図 SK 5 実測図 ($S = 1:30$)

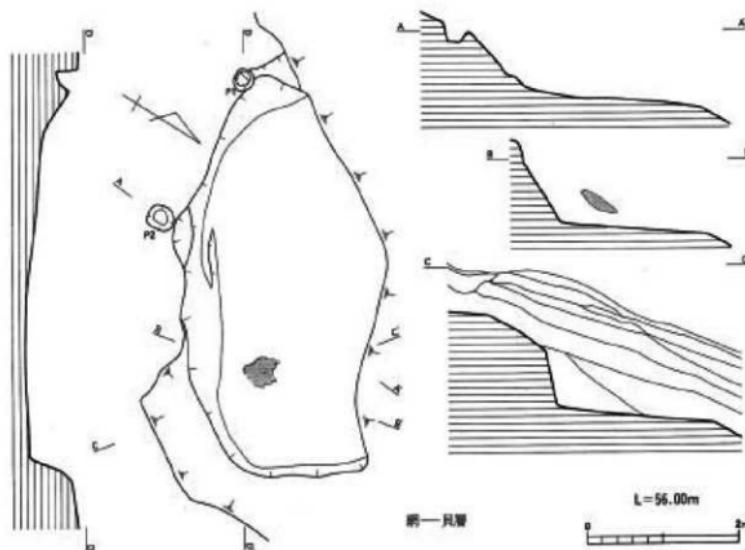
また壁面の外側に残存部の深さが約25cmのP1・P2を確認した。底面の規模はP1が直径約17cm、P2が直径約18cmの円形である。底面標高はP1が55.87m、P2が55.65mで、柱間距離は約205cmである。柱穴があることから、本遺構がテラス状遺構では無く、住居跡であるという可能性も考えられるが、現状では上屋構造の想定が困難なため、テラス状遺構と判断した。

なお、東寄の平坦面上約30cmで、貝層が出土した。貝層は約40×45cmの範囲で5~15cmの厚みを持つ。また、貝層を構成する貝のうち二枚貝は大半が開いたり、対になる貝殻が無くなったりしており、食用に供された後のものであろう。これらのことから、本貝層は本住居跡が遺棄された後に廃棄されたものと考えられる。貝はカキ・アサリが主で、ウミニナ・レイシガイを1点ずつ確認した。ウミニナやレイシガイは食用貝の採集の際に混入したものであろう。いずれも内湾に棲息する貝である。

本遺構に伴う遺物は出土していないが、埋土中から弥生土器(86・87)・鉄斧(99)が出土している。本遺構の時期は土器型式から上深川Ⅲ式古段階以降のものであると考えられる。

(3) 出土遺物

集落跡の出土遺物としては、多数の土器の他、石器（砥石・石錘・磨石）、鉄器（鉄鎌・鉄斧）が出土した。以下、各遺物について述べたい。なお、個々の土器の詳細については、後掲する土器観



第36図 SX 3 実測図 (S = 1:60)

察表を参照されたい。

① 土器（第37～42図・図版25～30）

当遺跡内で出土した土器の内、出土状態及び形状から古墳に伴うと断定しがたいものについて、ここで一括して取り扱うこととする。そのため、時期的にみて古墳に伴うものも含まれている。従来から、広島湾周辺の弥生時代後期の土器については、口縁部の形態等の特徴から上深Ⅰ式、Ⅱ式、Ⅲ式という分類が行われているが⁴⁾、本遺跡の出土遺物を見れば、Ⅲ式がその大半を占め、次いでⅡ式、Ⅰ式については1点(87)のみの出土である。最も数の多いⅢ式について概観すれば、①胴部最大径を中位に持ち、口縁部屈曲点辺りから底部に至るまで均一に薄く仕上げられているものと、②胴部最大径が中位より僅かに高く底部周辺が肥厚するものの2種類がある。後者の中には、頸部の文様体や底部に平底を一部残すなどⅡ式に見られる古い要素を残すものが多く有り、その相違は時期の差に起因するものと考えられる。すなわち従来Ⅲ式古段階、新段階と呼称しているのがほぼこれに該当するものである。次に出土数の多いⅡ式について概観すれば、Ⅱ式の中でも口縁部の中位から強く外湾するタイプが大多数を占めており、これらがⅢ式と共に伴することが多く、丸胴化や無文化の傾向も強くあらわれるなど、Ⅱ式でも最も新しい要素を多く含む、Ⅱ式終末の時期の土器と考えられる⁵⁾。

また、遺構内から出土した遺物について見てみれば、Ⅱ式終末のものについてはSX1・SH2遺構面から出土した遺物にはば限られ、Ⅲ式新段階のものについても、出土がSK5に限られている。Ⅲ式古段階のものについては調査区全域から最も多く出土しているが、一括資料としてはSH1出土のものやSX2土器だまり出土の土器が注意される。

次に、当遺跡出土の土器の時期比定についてであるが、それについては従来から上深川Ⅱ式終末を庄内式、鍵尾Ⅱ式に併行する弥生時代終末の時期に、上深川Ⅲ式古段階を庄内式新層ないしは布留0式、大木式に併行する古墳時代初頭の時期に、上深川Ⅲ式新段階を布留1式、小谷式に併行する古墳時代前期前葉に比定する考え方が提示されてきた⁶⁾。今回の調査では、上深川Ⅲ式古段階に属するSX2土器だまり及び新段階に属するSK5の出土土器の中に非在地系の土器が含まれており、従来の時期比定の妥当性について検討を行うこととする。まず、SX2土器だまり出土の(65・66)については吉備系の壺形土器と考えられるが、時期は古墳時代初頭に比定されていることから⁷⁾、従来の時期比定の妥当性を傍証するものと考えられる。また、同じくSX2土器だまり出土の(71)については山陰系の壺形土器と考えるが口縁端部の平坦面の形成が不十分であることから大木式に属すと考えられ⁸⁾、これも従来の時期比定を追認するものと考えられる。次に、SK5出土の(85)であるが、山陰系の壺形土器と考えられ、口縁端部に平坦面が形成され胴部も丸胴化が顕著であるなど、小谷式の特徴を示すものと考えられる⁹⁾。前述したようにSK5出土の在地系土器のはほとんどが上深川Ⅲ式新段階に属すると考えられることから、これらの土器の共伴関係も従来の時期比定を傍証するものと考えることができよう。

また、SX2土器だまり出土の(76)については、城ノ下第6号古墳出土のものと酷似しており、同様に第6号古墳出土の複合口縁壺と同様な¹⁰⁾も第2号古墳埋土中から出土しており、当土器だまりの土器が時期的に性格的にも第2号古墳と極めて深い関係にあることを伺わせる。

以上のように、出土土器のかなりのものが古墳時代に属しており、これらを伴出する古墳以外の遺構と古墳との関係についても慎重な取り扱いが必要であろう。

② 石器（第42、43図・図版30）

・砥石

S H 1 から(89～92)が^g、S H 2 から(93～95)が出土している。

(89)は全長227mm・幅152mm・厚さ62mmの四角柱状の石の1面を利用している。使用面は、ほとんど磨耗していない。

(90)は全長196mm・幅48mm・厚さ33mmの四角柱状の石の5面を利用している。主要面は、磨耗しており、部分的に線状痕が見られる。中央部で折れている。

(91)は全長167mm・幅74mm・厚さ30mmの偏平な石の1面を利用している。使用面は、ほとんど磨耗していない。

(92)は全長131mm・幅71mm・厚さ67mmの偏平な石の1面を利用している。使用面は、ほとんど磨耗していない。

(93)は全長222mm・幅79mm・厚さ63mmの四角柱状の石の2面を利用している。使用面は、磨耗しており、2面ともに部分的に線状痕が見られる。

(94)は全長93mm・幅52mm・厚さ24mmの偏平な四角柱状の石の2面を利用している。2面ともに、ほとんど磨耗していないが、主要面に2条の溝状の擦痕が見られ、そのうち三条は反対面に至っている。

(95)は全長98mm・幅40.5mm・厚さ38mmの八角柱状の石の8面を利用している。主要面は、著しく磨耗しており、すべての面で部分的に線状痕が見られる。

・磨石

S H 2 から(96)が出土している。全長126mm・最大幅74mm・最大厚69mmで、長卵形を呈している。幅広の側に使用痕跡が見られる。

・石錐

S X 2 から(97)が出土している。全長115mm・最大幅63mm・最大厚39mm・重量398gで、偏平な長円盤状を呈している。長円形の長径にあたる両端を打ち欠いて、綱の固定面としている。

③ 鉄器（第43図・図版30）

・鉄鎌

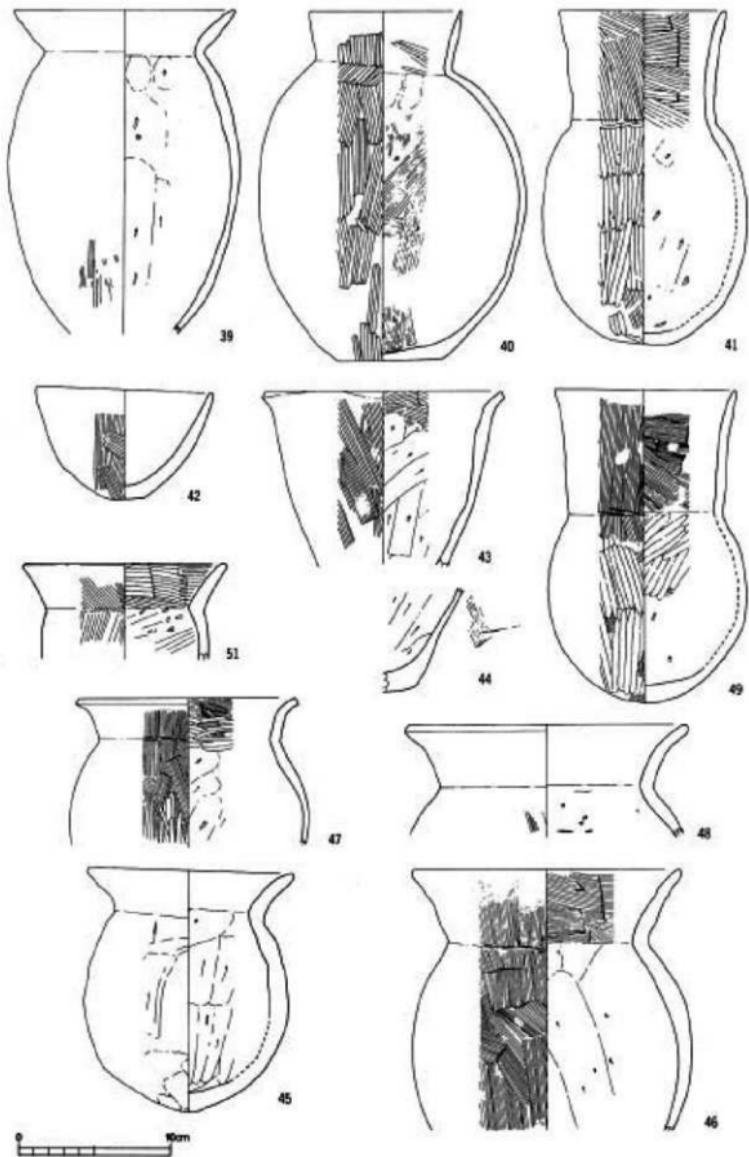
S H 1 の埋土中から(98)が出土している。茎部が一部を残して欠損しており、残存長116mm・最大幅38mm・刃部厚3mm・重量39.9gである。形状は凸基有茎式で、刃部は柳葉状になる。刃部と茎部の間に明確な闊は存在しない。刃部の断面形状は薄いレンズ状、茎部の断面形は長方形を呈している。

・鉄斧

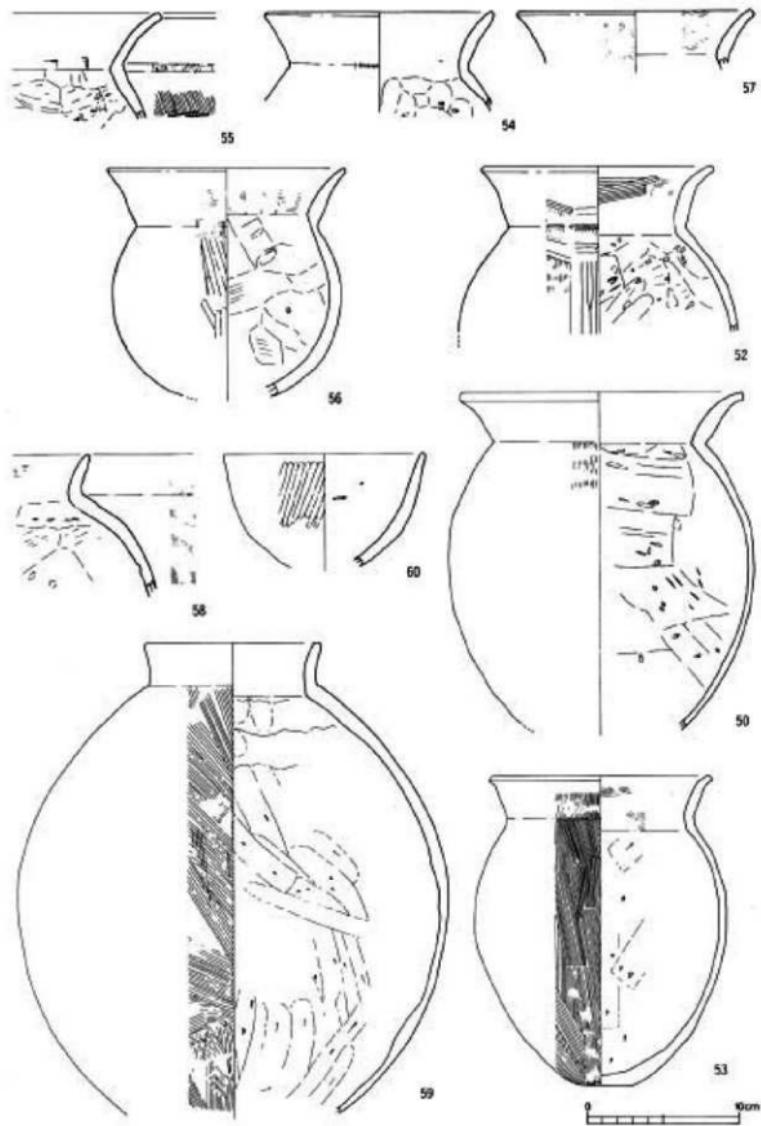
S X 3 の埋土中から(99)が出土している。全長74mm・刃部幅44mm・基部幅40mm・厚さ4.5mm・重量74.9gの板状鉄斧である。平面形状は基部幅より、刃部幅が大きくなり、ばち形に開く。基部の断面形は長方形である。刃部は片刃式である。

注

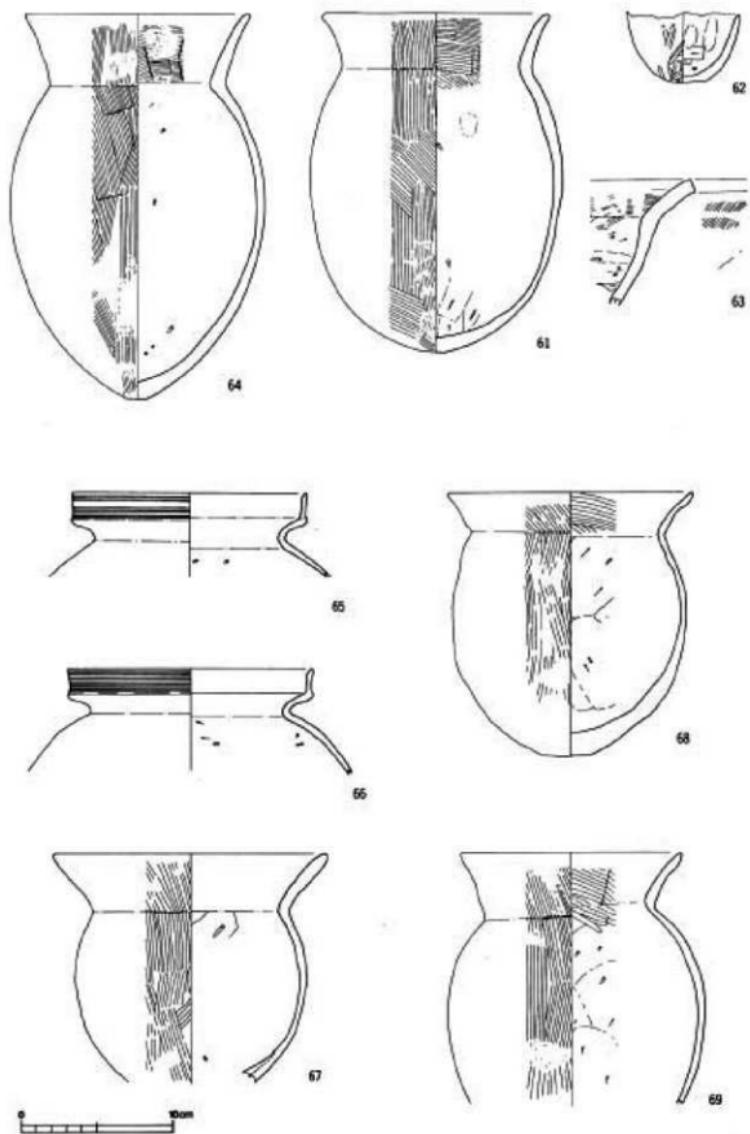
1. 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター『歳ノ神遺跡群 中出勝負峠墳墓群』1986年
2. 村上恭通「弥生時代における鉄器文化の特質－東アジア諸地域との比較を通して－」『九州考古学会・嶺南考古学会第1回合同考古学会：資料編：』九州考古学会・嶺南考古学会合同考古学会実行委員会 1994年
3. 宮本長二郎「堅穴住居の復元」『考古学による日本歴史 15 家族と住まい』雄山閣 1996年
4. 広島市教育委員会『一般県道原田五日市線（石内バイパス）道路改良工事事業地内遺跡発掘調査報告』1988年
5. 財團法人広島市歴史科学教育事業団『牛田早稲田遺跡発掘調査報告』1994年
6. 4に同じ
7. 高橋 譲「土師器の編年 中国・四国」「古墳時代の研究 6 土師器と須恵器」雄山閣 1991年
8. 鹿島町教育委員会『講武地区県営は場整備事業発掘調査報告書 5 南講武草田遺跡』1992年
9. 8に同じ



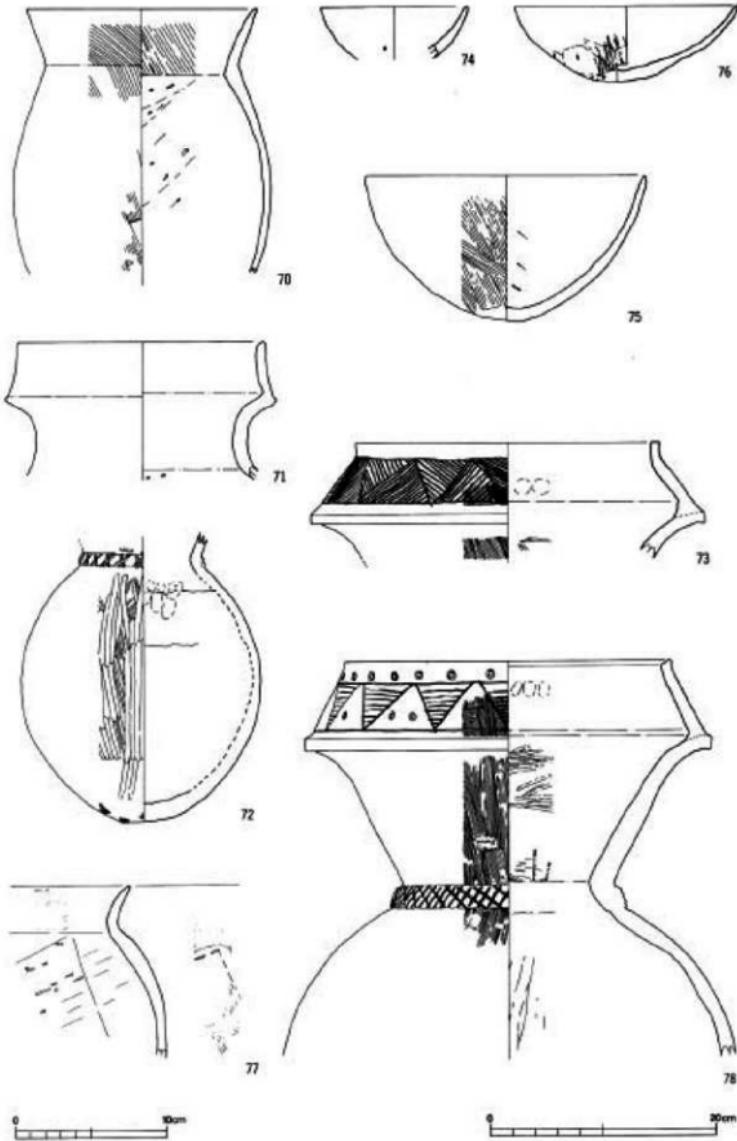
第37図 その他の遺構出土遺物実測図 [1] (S = 1:3)



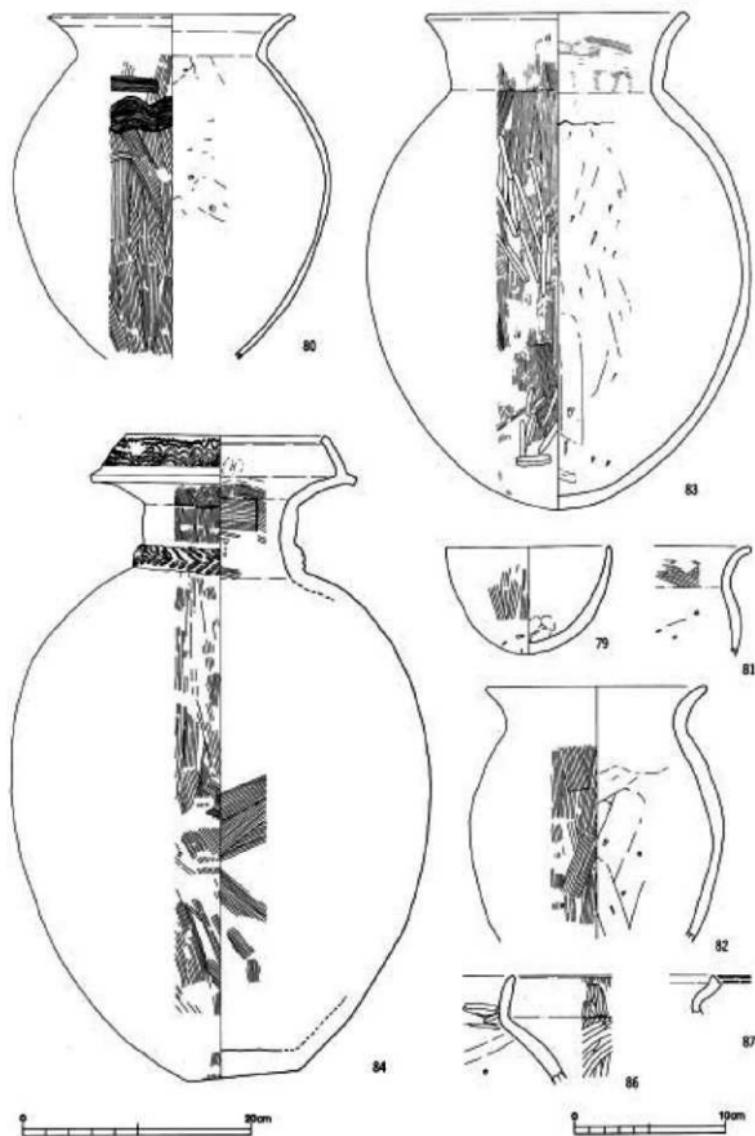
第38図 その他の遺構出土遺物実測図 [2] (S = 1:3)



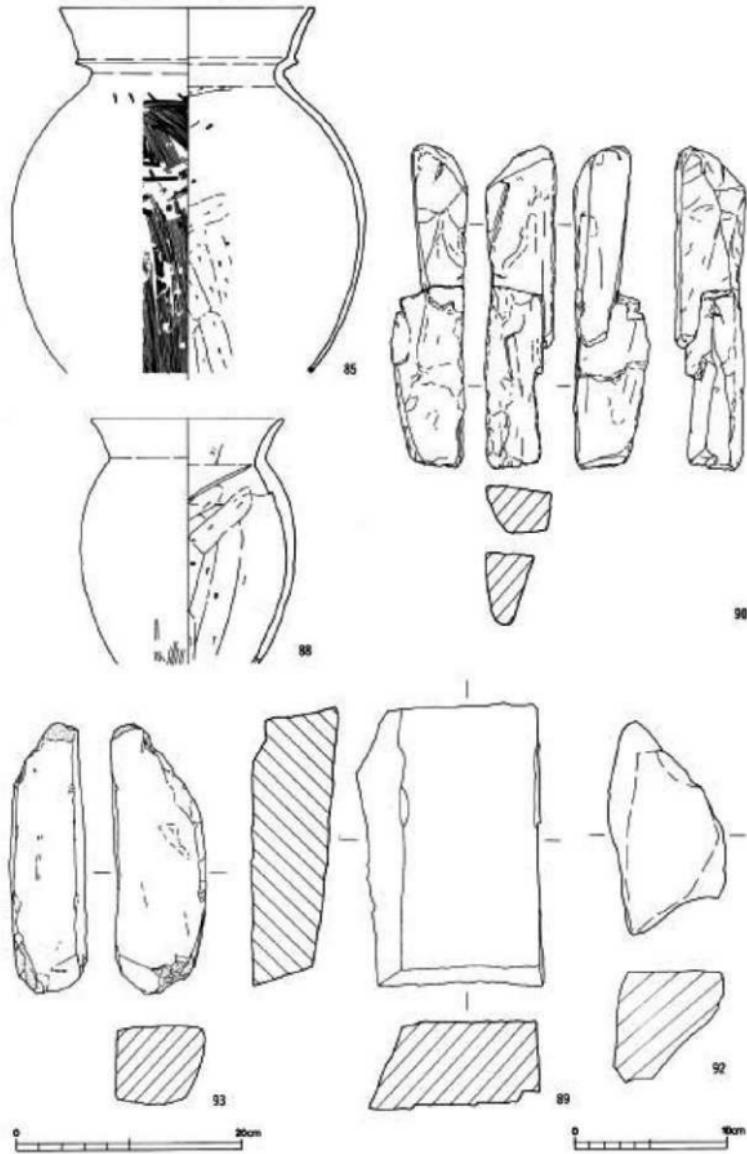
第39図 その他の遺構出土遺物実測図 [3] (S = 1:3)



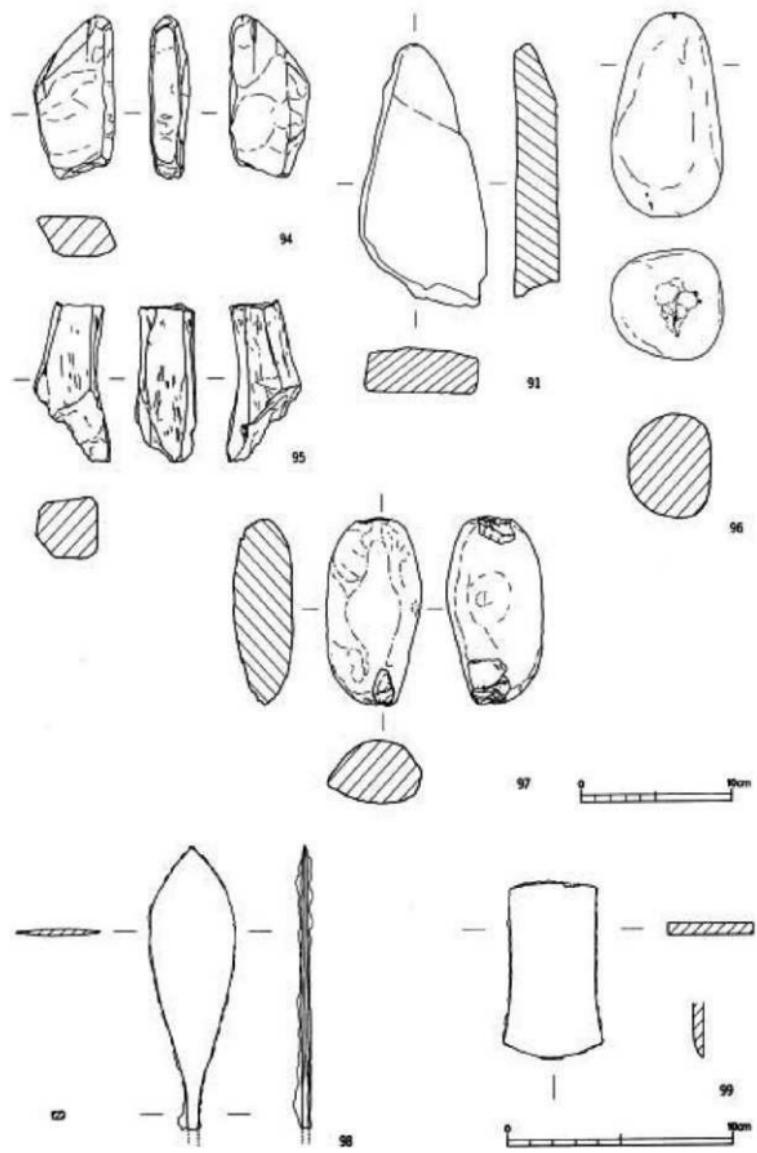
第40図 その他の遺構出土遺物実測図 [4] (S = 1:3, 73・78はS = 1:4)



第41図 その他の造構出土遺物実測図 [5] (S = 1:3, 84はS = 1:4)



第42図 その他の造構出土遺物実測図 [6] (S = 1:3, 85・89・93はS = 1:4)



第43図 その他の造構出土遺物実測図 [7] (S = 1:3, 98・99はS = 1:2)

第3表 その他の遺構出土土器観察表

([])は復元値

番号	器種	出土位置	寸法(cm)	器 形	調整・成形	備 考
39	甕形土器	SH1	口径 14.6 胸郭部最大径 [15.4]	口縁部は外反し、端部直上で肥厚し、端部は尖り氣味におさめる。胸郭部は倒卵形を呈する。	外面： 口縁端部ヨコナダ。胸郭部下部ハケ目。調整のち化粧土を内面口縁部まで塗布。 内面： 胸郭直下へラ削りのちナダ、指頭圧痕。以下へラ削り。	色調： 外面 茶褐色 内面 明褐色 胎土： 1mm大の砂粒多く含む 焼成： 良好 スス付着。
40	甕形土器	SH1	器高 21.4 口径 10.1 胸郭部最大径 [17.9]	口縁部は「く」の字状に外反しつつ上方にのび、端部は尖り氣味におさめる。胸郭部は倒卵形を呈する。底部は平底。	外面： 口縁端部ヨコナダ。以下へラ磨き。底部ハケ目。 内面： 口縁端部ヨコナダ。口縁部一部へラ磨き。胸郭直下へラ削りのちナダ、指頭圧痕。以下へラ削りのちハケ目。	色調： 外面 明褐色 内面 棕褐色 胎土： 1~2mm大の砂粒若干含む 焼成： 良好
41	甕形土器	SH1	器高 20.3 口径 11.0 胸郭部最大径 13.8	口縁部は「く」の字状に緩やかに外反し、端部はやや尖り氣味におさめる。胸郭部は倒卵形を呈する。底部は丸底。	外面： 口縁部ハケ目。頂部からはハケ目のちへラ磨き。 内面： 口縁部ハケ目。頂部ナダ。以下へラ削り。	色調： 茶褐色 胎土： 2mm大の砂粒含む 焼成： 良好
42	陶形土器	SH1	器高 6.7 口径 11.6	口縁部は下方に延び、端部はやや尖り氣味におさめる。底部は平底。	外面： 口縁部ヨコナダ。以下ハケ目。 内面： 口縁部ヨコナダ。以下ナダ。	色調： 茶褐色 胎土： 1~2mm大の砂粒多く含む 焼成： 良好
43	鉢形土器	SH1 埋土	口径 [15.8]	胸郭部は「く」の字状に内反し、口縁部は「く」の字状に外反する。端部は平たくおさめている。	外面： 口縁部ナダ。以下ハケ目。 内面： 口縁部ハケ目。以下へラ削り。	色調： 明褐色 胎土： 1mm大の砂粒若干含む 焼成： 良好 44と同一個体の可能性あり。
44	鉢形土器	SH1 埋土 ?		底部は平底。	外面： ナダ。一部ハケ目。 内面： ヘラ削り。	色調： 明褐色 胎土： 1~2mm大の砂粒若干含む 焼成： 良好 43と同一個体の可能性あり。
45	甕形土器	SX1	器高 14.7 口径 13.6 胸郭部最大径 13.7	口縁部は「く」の字状に外反し、端部は丸くおさめる。胸郭部は球形を呈する。底部はわずかに平底。	外面： 口縁部ヨコナダ。以下へラ削りのちナダ、底部へラ削り。 内面： 口縁部ヨコナダ。以下へラ削り。	色調： 明褐色 胎土： 1~2mm大の砂粒多く含む 焼成： 良好
46	甕形土器	SX1	口径 17.9 胸郭部最大径 [18.7]	口縁部は「く」の字状に外反し、端部は丸くおさめる。胸郭部は倒卵形を呈する。	外面： 口縁部上ハケ目のちヨコナダ。口縁下部以下ハケ目。 内面： 口縁端部ヨコナダ。口縁部ハケ目。以下へラ削り。口縁上部に尖状工具による記号状の線刻あり。	色調： 茶褐色～黒褐色 胎土： 2~3mm大の砂粒多く含む 焼成： 良好
47	甕形土器	SX1	口径 14.4 胸郭部最大径 [15.8]	口縁部は「く」の字状に外反し、端部にかけて外溝し、端部は平らにおさめる。	外面： 口縁端部ヨコナダ。口縁部以下ハケ目。胸郭ハケ目のちへラ磨き。 内面： 口縁部上ハケ目。胸郭直下までハケ目のちへラ磨き。以下へラ削り。	色調： 橙色～黄褐色 胎土： 1mm大の砂粒多く含む 焼成： 良好
48	甕形土器	SX1	口径 [18.4]	口縁部は「く」の字状に外反し、端部はやや平らにおさめる。	外面： 口縁部ヨコナダ。以下ハケ目のちヨコナダ。 内面： 口縁部ヨコナダ。以下へラ削り。	色調： 橙色 胎土： 1~2mm大の砂粒多く含む 焼成： 良好
49	甕形土器	SX1	器高 19.1 口径 12.0 胸郭部最大径 13.3	口縁部は「く」の字状に緩やかに外反し、端部はやや尖り氣味におさめる。胸郭部は球形を呈する。底部は丸底。	外面： 口縁端部ヨコナダ。以下ハケ目。 内面： 口縁端部ヨコナダ。口縁部ナダ。	色調： 明褐色 胎土： 1~2mm大の砂粒含む 焼成： 良好
50	甕形土器	SX1 埋土	口径 [18.6] 胸郭部最大径 [20.4]	口縁部は「く」の字状に外反し、端部はやや平たんにおさめる。胸郭部は倒卵形を呈する。	外面： 口縁端部ヨコナダ。以下ハケ目。 内面： 口縁端部ヨコナダ。口縁部ナダ。	色調： 茶褐色 胎土： 1~5mm大の砂粒多く含む 焼成： やや軟調 スス付着。

番号	器種	出土位置	寸法(cm)	器 形	調整・成形	備 考
51	變形土器	S X 1 理土	口径 [13.6]	口縁部は「く」の字状に外反し、端部は丸くおさめる。	外面： 口縁端部ヨコナデ。以下ハケ目。 内面： 口縁部ハケ目。以下ヘラ削り。	色調： 淡茶褐色 胎土： 1~2mm大の砂粒多く含む 焼成： 良好
52	變形土器	S H 2	口径 [15.5]	口縁部は「く」の字状に外反し、端部は丸くおさめる。	外面： 口縁端部ヨコナデ。以下ハケ目の中へラ磨き。 内面： 口縁端部ヨコナデ。口縁部ハケ目のちへラ磨き。以下ヘラ削り。	色調： 茶褐色 胎土： 1~2mm大の砂粒多く含む 焼成： やや軟調
53	變形土器	S H 2	器高 19.5 口径 14.4 胸部最大径 16.7 底径 3.5	口縁部は外反し、頸部直上で肥厚し、端部にかけた外反し、端部は平らにおさめる。胸部は倒卵形を呈する。底部は平底。	外面： 口縁端部ヨコナデ。口縁部以下ハケ目。 内面： 口縁端部ヨコナデ。口縁部ハケ目のちナデ。以下ヘラ削り。	色調： 黄褐色 胎土： 1~3mm大の砂粒多く含む 焼成： 良好
54	變形土器	S H 2	口径 [15.3]	口縁部は外済し、端部は丸くおさめる。	外面： 口縁端部ヨコナデ。以下ハケ目の中ナデ。 内面： 口縁端部ヨコナデ。口縁部ハケ目のちナデ。以下ヘラ削り。	色調： 茶灰色 胎土： 1~3mm大の砂粒多く含む 焼成： やや軟調
55	變形土器	S H 2		口縁部は「く」の字状に外反し、端部は平たくおさめる。	外面： 口縁端部ヨコナデ。口縁部ハケ目のちナデ。以下ハケ目。 内面： 口縁部ハケ目のちナデ。以下ヘラ削り。	色調： 橙褐色 胎土： 1~4mm大の砂粒多く含む 焼成： 良好 スス付着。
56	變形土器	S H 2	口径 [15.8] 胸部最大径 15.2	口縁部は「く」の字状に外反し、端部は尖り氣味におさめる。胸部は球形を呈する。	外面： 口縁端部ヨコナデ。口縁部ハケ目のちナデ。胸部ハケ目の中へラ磨き。 内面： 口縁部ハケ目のちナデ。以下ヘラ削り。	色調： 茶褐色 胎土： 1~5mm大の砂粒多く含む 焼成： やや軟調 スス付着。
57	變形土器	S H 2	口径 [15.8]	口縁部は「く」の字状に外反し、端部はやや平らにおさめる。胸部は球形	外面： 口縁端部ヨコナデ。ハケ目の中ナデ。 内面： ハケ目のちナデ。	色調： 黒褐色 胎土： 1~2mm大の砂粒多 焼成： やや軟調
58	變形土器	S H 2		口縁部は外反し、端部は尖り氣味におさめる。	外面： 胸部ハケ目のちナデ。 内面： 口縁部ハケ目のちナデ。以下ヘラ削り。	色調： 外面 黄褐色 内面 茶褐色 胎土： 1~5mm大の砂粒多く含む 焼成： やや軟調 スス付着。
59	變形土器	S H 2	口径 [11.5] 胸部最大径 [28.6]	口縁部は「く」の字状に外反し、端部は平たにおさめる。胸部は球形に近い。	外面： 口縁部ヨコナデ。以下ハケ目。 内面： 口縁部ナデ。口縁部直下ナデ、指痕圧痕。以下ヘラ削り。	色調： 淡茶色 胎土： 1mm大の砂粒若干含む 焼成： 良好
60	輪形土器	S H 2	口径 [13.3]	胸部から口縁部にかけて縦ややく内溝しつつ外方に延び、端部は丸くおさめる。	外面： 口縁部ヨコナデ。以下ヘラ磨き。底部にかけたナデ。 内面： 口縁部ヨコナデ。以下ヘラ削りのち一部ナデ。	色調： 橙褐色 胎土： 1mm大の砂粒若干含む 焼成： 良好
61	變形土器	S H 3 理土	器高 21.1 口径 15.0 胸部最大径 17.0	口縁部は外反し、端部はやや尖り氣味におさめる。胸部は倒卵形を呈する。底部は丸底。	外面： 口縁部ヨコナデ。口縁部以下ハケ目。底部一部ナデ。 内面： 口縁端部ヨコナデ。以下頭削り。	色調： 淡黄褐色 胎土： 1~2mm大の砂粒若干含む 焼成： 良好 スス付着。
62	輪形土器	S H 3 理土	器高 4.4 口径 7.5 底径 2.3	口縁部は外方に延び、端部は尖り氣味におさめる。底部は平底。	外面： 口縁部ヨコナデ。以下ヘラ削りのちナデ。体部にヘラ削り。	色調： 外面 明黄褐色 内面 橙色 胎土： 0.5~1mm大の砂粒 焼成： 良好
63	不明	S H 3 理土		口縁部は「く」の字状に外反し、端部は平たくおさめる。	外面： 口縁端部ヨコナデ。以下ハケ目。 内面： 頭部までハケ目のちヨコナ	色調： 黄褐色~淡褐色 胎土： 1~2mm大の砂粒含む 焼成： 良好
64	變形土器	S K 2	器高 24.1 口径 14.8 胸部最大径 16.8	口縁部は「く」の字状に外反し、端部は尖り氣味におさめる。胸部は倒卵形を呈する。底部は平底。	外面： 口縁端部ヨコナデ。口縁部ハケ目。 内面： 口縁端部ヨコナデ。口縁上	色調： 外面 茶褐色 内面 暗黄褐色 胎土： 1~2mm大の砂粒多く含む 焼成： やや軟調 スス付着。

番号	器種	出土位置	寸法(cm)	器 形	調整・成形	備 考
65	彫形土器	S X 2	口径 [15.6]	外反する口縁に、垂直な立ち上がり部を接合する複合口縁。端部は尖り気味におさめる。口縁部外面に9条の沈線を施す。	外面： ヨコナデ。 内面： 口縁部周辺ヨコナデ。以下ヘラ削り。	色調： 黄褐色 胎土： 1mm大の砂粒若干含む 焼成： 良好
66	彫形土器	S X 2	口径 [16.2]	外反する口縁に、ほぼ垂直な立ち上がり部を接合する複合口縁。端部は、やや外傾し、尖り気味におさめる。口縁部外面に9条の沈線を施す。	外面： 口縁部ヨコナデ。以下ナデ。 内面： 口縁部ヨコナデ。以下ヘラ削り。	色調： 黄褐色 胎土： 密 焼成： 良好
67	彫形土器	S X 2	口径 [17.9] 胸部最大径 [15.4]	口縁部は「く」の字状に外反し、端部は尖り気味におさめる。胸部は急な弧を描く。	外面： 口縁端部ヨコナデ。以下ハケ目。 内面： 口縁部ヨコナデ。以下ヘラ削り。	色調： 暗黄褐色 胎土： 1~2mm大の砂粒若干含む 焼成： 良好 スス付着。
68	彫形土器	S X 2	器高 16.5 口径 16.2 胸部最大径 15.7	口縁部は「く」の字状に外反し端部にかけて外溝し、端部は尖り気味におさめる。胸部は側卵形を呈する。底部は平底。	外面： 口縁端部ヨコナデ。以下ハケ目。胸部下部ヘラ削り。底部ナデ。 内面： 口縁部ハケ目。以下ヘラ削り。	色調： 明褐色～明橙色 胎土： 0.5~1mm大の砂粒含む 焼成： やや軟調
69	彫形土器	S X 2	口径 13.6 胸部最大径 [17.3]	口縁部は「く」の字状に外反し、端部にかけて若干外反し、端部は尖り気味におさめる。胸部は側卵形を呈する。	外面： 口縁端部ハケ目のちヨコナデ。口縁部以下ハケ目。 内面： 口縁端部ヨコナデ。口縁部ハケ目。底部ヘラ削りのちハ磨き。以下ヘラ削り。	色調： 明橙色 胎土： 1~2mm大の砂粒多く含む 焼成： 良好 スス付着。
70	彫形土器	S X 2	口径 [15.2] 胸部最大径 [17.2]	口縁部は「く」の字状に外反し、端部は尖り気味におさめる。胸部は側卵形を呈する。	外面： 口縁端部ヨコナデ。以下ハケ目。胸部ハケ目のち一部ナデ。 内面： 口縁端部ヨコナデ。口縁部ハケ目。以下ヘラ削り。	色調： 明褐色 胎土： 1~2mm大の砂粒含む 焼成： 良好
71	彫形土器	S X 2	口径 16.2	外溝する口縁に、内傾し、緩やかに外反する立ち上がり部を接合する複合口縁。端部は丸くおさめる。	外面： ヨコナデ。 内面： 口縁部周辺ヨコナデ。以下ヘラ削り。	色調： 淡黄褐色 胎土： 密 焼成： やや軟調
72	彫形土器	S X 2	胸部最大径 16.0	口縁部は「く」の字状に外反する。頸部は×状の刻みを入れた貼付突部をめぐらす。胸部は側卵形を呈する。底部は丸底。	外面： 口縁下部ハケ目。胸部ハケ目のちヘラ磨き。底部ナデ、一部ハケ目。 内面： ナデ。頸部直下に指崩痕底。	色調： 黄褐色～明橙色 胎土： 1~2mm大の砂粒若干含む 焼成： 良好
73	彫形土器	S X 2	口径 [27.2]	外反する口縁に、内傾する立ち上がり部を接合する複合口縁。口縁端部に向けて外溝し、端部は平らにおさめる。	外面： 口縁端部ヨコナデ。口縁上部ハケ目のち刺突状工具による幾何学紋様をめぐらす。口縁下部ハケ目。 内面： 口縁部ヨコナデ、外側調整時の指崩痕底残る。口縁下部、一部ヘラ磨き。	色調： 橙色 胎土： 1~3mm大の砂粒含む 焼成： 良好
74	彫形土器	S X 2	口径 [9.8]	口縁部は外方に延び、端部は尖り気味におさめる。底部は丸底。	外面： 口縁部ヨコナデ。以下ヘラ削りのちナデ。 内面： 口縁部ヨコナデ。以下ナデ。	色調： 暗黄褐色 胎土： 1mm大の砂粒若干含む 焼成： 良好
75	彫形土器	S X 2	器高 9.0 口径 18.8	口縁部は外方に延び、端部は尖り気味におさめる。底部は丸底。内面底部はやへこむ。	外面： 口縁部ヨコナデ。以下ヘラ削り。 内面： 口縁部ヨコナデ。以下ナデ。	色調： 淡黄褐色 胎土： 0.5~2mm大の砂粒含む 焼成： 良好
76	彫形土器	S X 2	器高 4.7 口径 15.0	口縁部は外溝し、端部は尖り気味におさめる。	外面： 口縁部ヨコナデ。以下ヘラ削り。 内面： ナデ。	色調： 黄褐色 胎土： 密 焼成： 良好
77	不明	S X 2			外面： 口縁端部ヨコナデ。以下ハ 内面： 口縁端部ヨコナデ。口縁部	色調： 黄褐色 胎土： 1~2mm大の砂粒多く含む 焼成： やや軟調

番号	器種	出土位置	寸法(cm)	器形	調整・成形	備考
78	壺形土器	S X 2 墓土	口径 [28.8]	「く」の字状に外反する口縁に、内傾する立ち上がり部を接合する複合口縁。端部は平らにおさめる。頸部に刺突状工具による刻目格子を入れた貼付突帯をめぐらす。	外面： 口縁部ハケ目のち刺突状工具による幾何学紋様をめぐらし、竹管紋を施す。頸部ハケ目。以下ハケ目。 内面： 口縁部ナゲ。外面調整時の指頭圧痕残る。頸部上部ヘラ磨き。頸部下部ハケ目のちナゲ。頸部直下ナゲ。以下ヘラ削りのちナゲ。	色調： 淡褐色 胎土： 1~3mm大の砂粒多く含む 焼成： 良好
79	壺形土器	S K 4 墓土	器高 口径 6.6 10.8	体部から急な弧を描き、口部は外方に延び、端部はほぼ垂直に立ち上がり、丸くおさめる。底部は丸底。	外面： 口縁部ヨコナゲ。以下ハケ目。底部はヘラ削りのちナゲ。 内面： 口縁部ヨコナゲ。以下ナゲ。底部に指頭圧痕。	色調： 暗黄褐色 胎土： 1~2mm大の砂粒多く含む 焼成： 良好
80	壺形土器	S K 5	口径 15.8 胸部最大径 21.2	口縁部は「く」の字状に外反し、端部にかけて外湾し、端部は丸くおさめる。口縁部には強いナゲによる凹縫がめぐる。胸部は倒卵形を呈する。	外面： 口縁部ヨコナゲ。以下ハケ目。頸部直下に波状紋をめぐらす。 内面： 口縁端部ヨコナゲ。口縁部ハケ目。以下ヘラ削り。	色調： 黄褐色 胎土： 1~2mm大の砂粒多く含む 焼成： 良好
81	壺形土器	S K 5		口縁部は外溝し、端部にかけてさらに外溝し、端部は丸くおさめる。	外面： 口縁部ヨコナゲ。 内面： 口縁上部ヨコナゲ。口縁下部ハケ目。頸部直下ハケ目のちナゲ。以下ヘラ削り。	色調： 外面 灰褐色 内面 椎色 胎土： 1mm大の砂粒多く含む 焼成： 良好
82	壺形土器	S K 5	口径 14.5 胸部最大径 17.0	口縁部は外溝し、端部はやや尖り気味におさめる。胸部は倒卵形を呈する。底部は丸底。	外面： 口縁部ヨコナゲ。胸部ハケ目。 内面： 頸部直下までヨコナゲ。以下ヘラ削り。	色調： 外面 明褐色 内面 椎色 胎土： 1~2mm大の砂粒多く含む 焼成： やや軟調
83	壺形土器	S K 5	器高 31.0 口径 [17.0] 胸部最大径 25.7	口縁部は「く」の字状に外反し、端部は平らにおさめる。胸部は倒卵形を呈する。底部は丸底。	外面： 口縁端部ヨコナゲ。口縁部ハケ目のちナゲ。以下ハケ目のち一部ヘラ磨き。底部ハケ目のち一部ナゲ。 内面： 口縁端部ヨコナゲ。口縁部ハケ目。以下ヘラ削り。	色調： 外面 黄褐色~椎色 内面 黄褐色~明褐色 色~黒色 胎土： 1~3mm大の砂粒多く含む 焼成： 良好
84	壺形土器	S K 5	器高 53.6 口径 17.4 胸部最大径 37.1 底径 9.9	「く」の字状に外反する口縁に、内傾し、緩やかに内側する立ち上がり部を接合する複合口縁。端部は平らにおさめる。頸部にハサ形工具による織衫紋を1段入れた貼付突帯をめぐらす。胸部は倒卵形を呈する。底部は平底。	外面： 口縁端部ヨコナゲ。口縁部には櫛衝状工具による波状紋をめぐらす。頸部ハケ目。以下ハケ目のち一部ナゲ。底部ハケ目。 内面： 口縁部ヨコナゲ。外面調整時の指頭圧痕。以下頸部までハケ目のちナゲ。以下ナゲ、部分的にハケ目。	色調： 黄褐色~淡褐色 胎土： 1~2mm大の砂粒若干含む 焼成： 良好
85	壺形土器	S K 5	口径 22.6 胸部最大径 31.6	外反する口縁に緩やかに内側する立ち上がり部を接合する複合口縁。端部はやや平たく、やや内傾する。	外面： 口縁部周辺ヨコナゲ。以下ハケ目。肩部に刺突状工具により線状の施紋を1段施す。 内面： 口縁部ヨコナゲ。以下	色調： 淡黄褐色 胎土： 1~2mm大の砂粒若干含む 焼成： 良好
86	壺形土器	S X 3 墓土		口縁部は「く」の字状に外反し、端部はやや平らにおさめる。	外面： 口縁部ヨコナゲ。以下ヘラ削り。 内面： 口縁部ヨコナゲ、一部ヘラ	色調： 椎色 胎土： 1mm大の砂粒若干含む 焼成： 良好
87	不明	S X 3 墓土		口縁部は外反し、端部は平らにおさめる。端部に2条の沈縫を施す。	外面： ヨコナゲ。 内面： ヨコナゲ。	色調： 黄褐色 胎土： 1mm大の砂粒若干含む 焼成： 良好
88	壺形土器	標高64m平 埴面埋土	口径 [12.7] 胸部最大径 [14.5]	口縁部は「く」の字状に外反し、端部は尖り気味におさめる。胸部は倒卵形を呈する。	外面： 口縁部ヨコナゲ。胸部ハケ目。 内面： 口縁端部ヨコナゲ。口縁部ハケ目のちナゲ。頸部直下ナ	色調： 外面 黄褐色~椎色 内面 椎色 胎土： 1~2mm大の砂粒多く含む 焼成： 良好

IV まとめ

成岡A地点遺跡では、3基の古墳をはじめ、竪穴式住居跡3軒・掘立柱建物跡1棟・テラス状遺構3か所・土坑5基を調査した。なお、本遺跡の位置する丘陵の最高所で、小型の円墳と思われる第4号古墳を確認している。しかし、第4号古墳は未調査であるため、本稿では調査によって明らかにすることが出来た遺構について、その時期と性格、また広島市域における歴史的位置付けについて、若干の考察を行いたい。

1. 古墳群の構成と時期

(1) 概要

3基の古墳は、尾根筋の先端から順に第1号～第3号古墳である。本遺跡の位置する尾根筋全体の中でも最も広い平坦面で、調査区西半分を占める64m平坦面上を第3号古墳が専有し、第2号古墳・第1号古墳はその東側の緩斜面上に築かれている。

第1号古墳は東西を溝によって区画された方墳で、規模は東西9m南北7.5～11m、埋葬主体は木棺直葬で、刀子と飾り金具が副葬されていた。第2号古墳は西側を溝で区画された円墳で、直径約11m、埋葬主体は箱形石棺で、老年の男性人骨が良好な状態で出土し、その頭骨の脇に刀子が副葬されていた。第3号古墳は、西側を溝で区画され、残る東南北は平坦面（墳裾部平坦面）が巡らされた長円形の墳丘を持ち、規模は東西13.5m南北11.5mで、3基の中で最も規模が大きい。中心となる埋葬主体は墳丘中央に築かれた木棺木棺墓の第1主体で、鉄劍・鈴・大型鉄鎌2点が相内から、小型鉄鎌19点が棺外からそれぞれ出土した。また、墳丘の周間に9基の埋葬主体（第2～第10主体）が築かれていた。これらは、それぞれの長軸方位が直近の墳裾とは平行し、あたかも墳丘を取り囲むように位置していること、第9・第10主体を除き墓底面の標高がほぼ一定で、その深さから墳裾部平坦面から掘り込まれている可能性が高いことなどから、本古墳に伴う副次的な埋葬主体（副主体）と考えられる。埋葬施設は、第9主体が箱形石棺の他はいずれも木棺直葬である。また、第5主体から管玉が、第7・第9主体からガラ久小玉が、第10主体からはガラス小玉3点・鉄鎌1点がそれぞれ出土している。

(2) 築造時期

各古墳の築造時期は、第1号古墳は、区画溝から出土した布留0式に並行するものと考えられる小型丸底壺形土器から、第2号古墳は、やはり周溝から出土した鼓形器台や墳丘埋土中の布留0式の二重口縁壺形土器の□縁部から、いずれも古墳時代初頭までに築造されたものと考えられる。この両古墳間の新旧関係については、第2号古墳墳丘東斜面上にはほとんど埋土が堆積していなかったため、土層断面の観察では確認する事はできなかった。ところで、第1号古墳は東西を溝で区画するが、西側が東側に比べ非常に浅く造られている。第1号古墳単独で考えるならば、この構造は緩斜面という地形を積極的に活用し、投入した労働力以上に墳丘の規模を大きく見せる効果を求めた結果と考えることができる。しかし、他の2基が墳丘の西側を大きく掘り込んだ溝によって区画されていることを考えれば、第1号古墳の西側区画溝だけが浅く作られた理由としては不十分と思わ

れる。そこで、第1号古墳と第2号古墳の位置関係を見ると、第2号古墳の東側墳裾は第1号古墳西側区画溝の西縁から約1～2mに位置すると推定される。このため、第1号古墳の西側区画溝を、少なくとも他の2基と同程度、若しくは東西が対称となるように掘削した場合、第2号古墳の墳丘が削り込まれることになる。つまり、第1号古墳は、第2号古墳との関係からその構造を規制された可能性が考えられるのである。

一方第3号古墳の築造時期については、時期決定の参考になる遺物が一切出土しなかったため明確にはできなかった。また、土層の観察からも、東側に位置する第2号古墳との新旧関係について明らかにすることはできなかった。ただし、第3号古墳が専有する64m平坦面は、本遺跡の位置する尾根のなかで最も広く、見晴らしもよいなど、第1号古墳・第2号古墳の築造地点に比べ明らかに造墓地として優れている。よって、本古墳群中、最初に築かれたのは第3号古墳であった可能性が高い。また、古墳群以外の遺構群の時期は、後述のように弥生終末期～古墳時代初頭であり、これが第3号古墳の築造時期の上限と考えてよいであろう。以上から、第3号古墳は最古式・出現期の古墳と考えられる。

このように、本古墳群は第3号古墳を契機に、第2号古墳、第1号古墳の順に古墳時代初頭の、極めて短期間に相次いで築造されたものと考えられる。

(3) 関係

言うまでもなく、古墳とは本来集団から隔絶した有力者のための個人墓である。つまり本古墳群の個々の古墳の被葬者も、それぞれ集団を代表する有力者であったと見るべきである。しかし、前段で見たように、本古墳群の形成は極めて短期間であったと考えられる。よって、本古墳群は同じ集団を代々率いた有力者達の世代墓とは考えにくい。では、3基の古墳はどのような関係にあったのであろうか。

ここでは第3号古墳の副主体群の被葬者達の性格について考えてみたい。第1に副葬品に着目すると、広島市域における弥生時代後期～古墳時代初頭の一般集団墓の場合、副葬品を持つ例は非常にまれである。よって、副葬品を持つことは、その被葬者が一般民衆とは異なる社会的な階層に属していることを示していると考えられる。その副葬品が、本副主体群では9基中4基とほぼ半数から出土している。さらに、古墳の周囲という特殊な場所に位置することも合わせて考えれば、本副主体群の被葬者達は、副葬品を持たないものも含め、一般集団とは異なる社会的階層に属する人々であったと考えられる。次に墓壙の規模を見ると、底面の長さが2mを越える大型のもの（第3・4・7～10主体）と1m前後の小型のもの（第2・5・6主体）に分かれる。しかし、構造は基本的に違いが認められないため、規模の違いは被葬者の体格の違いに根ざしたものであり、大型の墓壙には成人が、小型のものには小児が葬られていたと考えられる。このことは、被葬者達が、母集団の中から能力や年齢など社会的な条件で選び出された集団ではなく、より個人的な関係に根ざした集団であることを示していると言えよう。以上から、第3号古墳の副主体群の被葬者集団は・第1主体の被葬者と個人的な関係によって結び付けられた特定集団＝家族とみてよいであろう。なお、第5主体は小児用であるにもかかわらず、副葬品として管玉を持ち、第10主体は、墓壙規模・副葬品の質・量ともに副主体群中最も優れている。これらのことは、この特定家族の中にも何らかの階

層差が存在しており、それは年齢に因われない質、おそらく第1主体の被葬者との血縁の遠近などであることを示していると考えられる。

さて、これまで見てきたように、3基の古墳の構造は墳丘・埋葬施設ともにすべて異なる。仮に3基の古墳の被葬者が血縁を有し、葬送儀礼を同じくするのならば、このような違いが生じる要因としては築造時期や被葬者の階層の相違などが挙げられよう。しかしながら、築造時期にはほとんど差は認められない。また、第3号古墳の副主体群を見ると、埋葬施設の構造は基本的にほぼ共通であるため、その被葬者である特定家族内における階層差は、副葬品の有無やその量、もしくは墓壇規模によって表現されていると考えられる。よって、階層差が要因とも考えにくい。つまり、3基の古墳の被葬者は同一の特定家族には属しておらず、それぞれの古墳の築造母体となったのは、葬送に関して異なった伝統を持つ、異なった集団であった可能性が高いのである。

以上のように、本古墳群は、同一尾根上に近接して、ほぼ同時期に、葬送儀礼が異なる別個の集団が、それぞれ古墳を築いたものということができる。このような一見矛盾するとも思える集団の形態として、例えば3つの小集団からなる瀬野川流域連合ともいいくべき大集団を想定してみたい。本古墳群の被葬者達は、同世代に属するそれぞれの小集団の長であり、かつ連合を率いていたのが第3号古墳の被葬者であったと考えるならば、本古墳群の一見相反するとも思える条件をみたすことができよう。埋葬主体の墓壇規模と副葬・供献品の量だけを取り出せば、第3号古墳第10主体が第1号古墳の埋葬主体を上回るという逆転現象も、第1集団と第3集団との相対的な関係の上から考えれば理解することも可能である。

2. 古墳出土遺物

第1主体から出土した鉄鎌のうち、大型鉄鎌(11)は主頭式の鉄鎌である。弥生時代では主頭鎌は北部九州を中心に分布し、広島市域での出土例は極わずかである¹⁾。また、骨鏡形鉄鎌は本来朝鮮半島で製造されていた型式で、日本国内における出土例は福岡県郷屋遺跡の2点のみが知られているだけである。さらに骨鎌形鉄鎌は、全てがほぼ同一の形状・寸法であることから一括して製作され、この地にもたらされたものと考えてよいだろう。朝鮮半島の工人の手による可能性も考えられる。

一方、第2号古墳に供獻されていた鼓形器台(4)は、形状は弥生時代後期後半～古墳時代前期前半期の山陰で見られる鼓形器台に非常に近い。しかしながら、山陰で製作された鼓形器台の口径が20cm前後で胎土も白っぽい粗いものであるのに比べ、寸法が小型で胎土が緻密な黄褐色であるなど異なる点が多い。このことから、この(4)は、近年「近畿製鼓形器台」と認識されているものと判断することができる²⁾。さらに、表面には赤色顔料が塗布されているが、これは吉備北部で見られる特徴と考えられている。また、S X 2土器だまりから出土した甕形土器(65・66)も、吉備地方の酒津式の特徴を持つものである。

以上のように、本古墳群出土遺物の様相は、本古墳群を築造した勢力の、北部九州（その先にある朝鮮半島も含め）や吉備・近畿地域との活発な交流を示しているものと考えられる。

3. その他の遺構の時期と性格

Ⅲ-2で述べたように、古墳以外の遺構は、64m平坦面でSH1, SB1, SK1を、57m平坦面の南側でSX1, SH2・3, SK2・3を、北西側でSX2・3, SK4・5をそれぞれ確認した。

これらの遺構の時期について整理すると、SX1, SH2が上深川Ⅱ式終末=弥生時代終末から上深川Ⅲ式古段階=古墳時代初頭のもの、SK5及びSX2土器だまりが上深川Ⅲ式新段階=古墳時代前期前葉のものである以外はいずれも、上深川Ⅲ式古段階のほぼ同時期に営まれてい肌前述のように、古墳群の築造は古墳時代初頭と考えられることから、古墳とその他の遺構群は、一部さかのぼるものも含まれるもの、ほとんど時期差の無いものと考えられる。

このうち、SX2土器だまりは、Ⅲ-2-(3)-①で述べたように、城ノ下第6号古墳出土土器との関係から、またSK5は出土土器の時期から、いずれも第2号古墳と同時期に存在した可能性が高い。その性格は、第2号古墳との位置関係から考えれば、第2号古墳築造に伴う祭祀遺構である可能性が考えられよう。

その他の大多数の遺構群の性格については、住居・掘立柱建物・貯蔵穴といった集落を構成する遺構が確認されており、その配置についても、64m平坦面上に無遺構部分があり・その縁辺部に比較的大きなSH1を築造し、傾斜の急峻な場所に小規模なSH2・SH3を築造しているなど、八幡川流域の浄安寺遺跡3)や下沖5号遺跡4)、太田川流域の大明地遺跡5)などでも確認された市域の集落の在り方の一類型と考えることができる。集落規模については、調査範囲外に続く尾根上等に遺構の存在する可能性があるものの、営まれた期間は、弥生時代終末～古墳時代初頭の短期間であり、市域の集落と比べれば、小規模な分村と見ることができよう。なお、古墳築造と時期が近接することから、古墳築造に伴って、集落が移転、廃絶した可能性も考えられる。

一方、本遺構群については、先述の浄安寺遺跡や下沖5号遺跡、大明地遺跡の集落と細部を比較した場合、住居の立地に最適な64m平坦面にSH1の1軒のみしか住居が確認できず、また、57m平坦面やSX2にも住居が確認できないなど、住居の密集度が低い。また、SH2・3は、柱穴が掘方の外にあり、床面積が約5～7m²程度と狭く、市域に類例を見ない口また掘立柱建物についてもⅢ-2で想定したように2間×3間であるならば、規模が大きいにも関わらず、傾斜の低い側の柱穴が地山まで達しておらず、集落の構成建物として長期間使用できるものとは考えにくい。これらのことあわせて考えると、本遺構群が、一定期間、通常の集落として機能を維持したのかという疑問が生じる。ここで、古墳群とほとんど時期差が無い点、住居構築の容易な第3号古墳のある64m平坦面を避けるように遺構が分布している点、第2号古墳より、SH3, SX3が確実に先行している点をあわせて考えると、3基の古墳の中では、最も古い時期にさかのぼると考えられる第3号古墳の築造に伴う遺構群と捉える考え方できよう。

いずれにしても、瀬野川流域でのこのような遺構の本格的な発掘調査は初めてのことであり、遺構群の性格を明らかにすることができなかった。今後の調査成果の蓄積により、本遺構群の性格が明らかになることを期待したい。

4. 結び

成岡古墳群は、広島市域東部を流域とする瀬野川水系で初めて確認された前期前半期の古墳群である。なかでも、第3号古墳は広島市域の中でも最古級の出現期の古墳である可能性が高い。

さて、第Ⅱ章で見えてきたように、弥生墳丘墓や古式古墳の様相から、弥生時代後期から古墳時代前期における広島市域では、太田川河口域にのみ突出した政治力・経済力をもつ勢力が存在していたものと、従来考えられてきた。この歴史観は、八幡川流域の城ノ下古墳群の調査によって、やや修正を迫られたものの、時期が該当する城ノ下第6号古墳の規模・内容は、太田川下流域の古墳に比べ著しく劣るため、その存在が十分に評価されていたとは言がたかった。

しかしながら、本遺跡の調査によって、瀬野川水系においても古墳時代初頭の古式古墳群が存在することが明らかになった。特に第3号古墳の規模や構造、豊富な副葬・供献品は、その被葬者の勢力の大きさと、盛んな対外交流の様子を窺わせる。加えて、成岡遺跡の約1.5km下流の丘陵上に位置する上安井古墳⁶⁾は、成岡第1号古墳・第2号古墳とほぼ同時期に築造されたと考えられているが、埋葬主体に竪穴式石室を持つなど、成岡古墳群とはやや異なる様相を示している。このことから、古墳時代初頭の瀬野川水系には、複数の政治勢力が存在していた可能性さえ考えられるのである。

もっとも、太田川水系の主要な古式古墳と、成岡古墳群を初めとする他地域の古式古墳の規模や副葬品を比較するならば、やはり太田川水系の優位は揺るがないことは確かであろう。けれども、古墳時代初頭の広島市域には、太田川水系だけでなく東の瀬野川・西の八幡川と市域の主要河川の流域に、それぞれ古墳の築造を成した独自の勢力が存在していたという事が明らかになったことは、これまでの広島市域の弥生時代後期後半から古墳時代にかけての歴史観・地域観を大きく塗り替えるものと評価することができる。

注

1. 川越哲志『弥生時代の鉄器文化』1993年
2. 市村慎太郎「久宝寺遺跡出土鼓形器台の意義」『河内平野遺跡群の動態Ⅶ』大阪府教育委員会・財団法人大阪府文化財調査研究センター 1999年
3. 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（Ⅲ）』1986年
4. 広島市教育委員会『一般県道原田五日市線（石内バイパス）道路改良工事事業地内遺跡群発掘調査報告』1988年
5. 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（Ⅳ）』1987年
6. 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『上安井古墳見学会資料』2000年

広島市成岡第2号古墳出土の人の骨

松下孝幸*

【キーワード】:広島県、古墳人骨、石棺墓、広額、高身長

はじめに

広島県広島市安芸区中野東2丁目に所在する成岡A地点遺跡の発掘調査が、東広島バイパスへのアクセス道路建設に伴い、広島市文化財団によって1999年から2000年にかけておこなわれた。成岡A地点遺跡は瀬野川を見下ろす標高50m~60mの尾根上に位置し、ここから瀬野川流域一帯を展望することが可能である。この尾根上から古墳時代前期の古墳3基と弥生時代後期に営まれた集落跡などが発見された。古墳3基のうちの1基(第2号古墳)の内部主体である箱形石棺から保存良好な人骨が1体検出された。なお、第1号古墳は一辺が約9mの方墳、第2号古墳は直径が約11mの円墳、第3号古墳は直径約13mの円墳で、内部主体はそれぞれ・木棺・石棺・木棺木棺墓である。木棺と木棺木棺墓からは人骨は検出されなかった。

これまで、広島県内で、筆者が古人の調査に加わったり、報告したもののうち、古墳人骨は、芳賀谷3号墳(広島市、1984)、大槻3号遺跡(東広島市、1985)、八鳥矢内追横穴墓群(西城町、1990)、城ノ下A地点遺跡(広島市、1991)、助平古墳(東広島市、1992)、陣開遺跡(本郷町、1993)、打堀山遺跡群A地点(府中市、1997)、梶平塚第2号墳(東城町、1997)、山の神古墳群(府中市、1998)、会下山(えげやま)(吉田町未刊行)、新宮第2号古墳(八千代町、2000)がある。また、弥生時代から古墳時代にかけての人骨については、歳ノ神遺跡群(千代田町、1986)、中出勝負峠古墳群(千代田町、1986)、鶯の森遺跡(竹原市、1991)、手山由墳墓群(豊栄町、1991)、胡麻4号遺跡(東広島市、1990)の例がある。弥生人骨の出土例も増え、広島県内の弥生人骨や古墳人骨の出土例数が次第に増加しつつある。しかし、そうはいっても保存状態が良好なものはやはり少ない。古墳人骨としては保存状態が良かったのは八鳥矢内追横穴墓群、中出勝負峠古墳群、山の神古墳群出土の人骨であり、それぞれ特徴を明らかにすることができた。

地域的に注目されるのは千代田町と府中市である。千代田町の氏神正田古墳人は、「高額・高身長」ではあったが、「低身長」で、中出勝負峠古墳人は「低額」ではあるが、「高身長」であるというように「高額・高身長」と「低・広額、低身長」が混在したり、両者の中间的形態や計測値を示す古墳人が認められる。

一方、府中市の山の神古墳群からは保存状態がきわめて良好な古墳人骨が出土した。彼らの特徴は男女とも額は「低・広額」で、顔は南九州の山間部の地下式横穴から出土する古墳人に酷似していたが、身長はかなり荷く、とくに女性は著しい高身長であった。

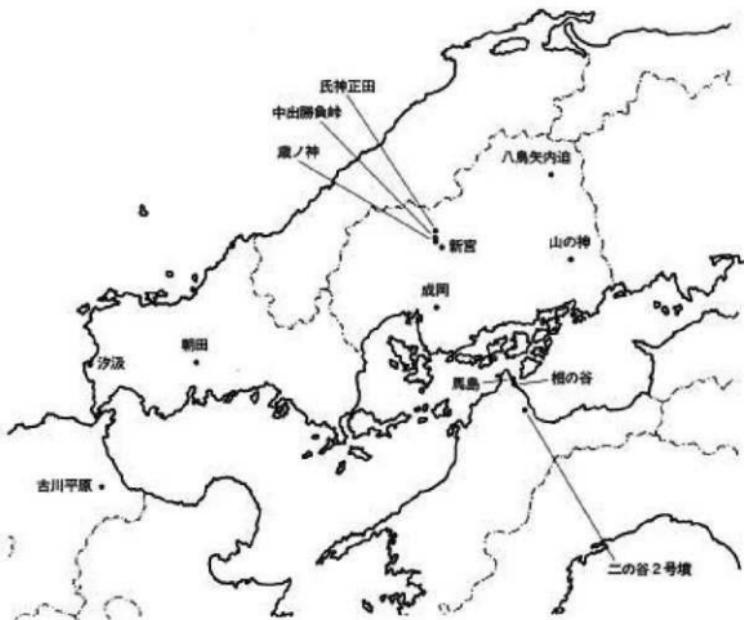
また、八千代町の新宮第2号古墳の北主体の石棺から保存良好な男性骨1体が出土した。この古墳人は頭蓋が大きく、頭型は短頭に近い中頭型で、顔の高径がやや高く、高身長であった。

本例は頭蓋の保存状態が良好で、また、現場で大腿骨の最大長を計測することができたので、推定身長を算出することも可能であった。人類学的観察や計測をおこない、若干の考察もあわせておこなったので、その結果を報告しておきたい。

資料

第2号古墳の内部主体である箱形石棺から出土した人骨は1体である。本人骨は所見の項で詳述しているように老年の男性骨である。埋葬姿勢は仰臥で、肘関節と膝関節は伸展状態であった。人骨の保存状態は良好で、ほぼ全身の骨が残っていた。頭蓋はほぼ完全な状態で残存していた。鎖骨、肩甲骨、上腕骨、尺骨、大腿骨、脛骨、腓骨は両側が残存していたが、尺骨だけは左側のみで、右側は残っていないかった。また、肋骨も左側は残っていたが、右側は欠損しており、椎骨は腰椎と下位の胸椎は残存していたが、上部胸椎および頸椎は残っていないかった。仙骨も残存しており、足の骨(足根骨、中足骨、指骨)は左側の方が右側よりも保存状態が良い。なお、手の骨(手根骨、中手骨、指骨)は両側とも残存していないかった。他の骨は良く残っていたにもかかわらず、右側

* Takayuki MATSUSHITA



第1図 遺跡位置 (1/30,000) (Fig. 1 .Location of the Narioka Site
Hiroshima City, Hiroshima Prefecture)

の前腕の骨や右側の肋骨が残存していなかったのは、右側の前腕の骨があった場所の死床面が一番低くなっていたので、相内に流れ込んだ雨水がこの低い面に溜まり、右側の前腕の骨や右側の肋骨を溶かしてしまったものと思われる。

出土人骨の性別、年齢は表1のとおりである。

表1 出土人骨一覧(Table 1. List of skeletons)

人骨番号	性別	年齢	頭型、身長など
第2号古墳人骨	男性	老年	中頭型、高身長(161.58cm)

第2号古墳人骨は、考古学的所見から、古墳時代前期(3世紀後半)に属する人骨と推定されている。なお、頭蓋の付近に鉄製の刀子が1口副葬してあった。

計測方法は、Martin-SaHer(1957)によったが、脛骨の横径はオリビエの方法で計測し、鼻根部については鈴木(1963)と松下ら(1983)の方法で計測した。

なお、性別と年齢については、所見の項で述べているとおり、男性で、老年と推定された。年齢区分に関しては表2の基準のとおりである。

表2 年齢区分(Table 2. Division of age)

年齢区分	年齢
未成人	乳児 1歳未満
	幼児 1歳～5歳(第一大臼歯萌出直前まで)
	小児 6歳～15歳(第一大臼歯萌出から第二大臼歯歯根完成まで)
	成年 16歳～20歳(蝶後頭軟骨結合癒合まで)
成人	壮年 21歳～39歳(40歳未満)
	熟年 40歳～59歳(60歳未満)
	老年 60歳以上

注)成年という用語については土井ヶ浜遺跡第14次発掘調査報告書(1996)を参照されたい。

所 見

各骨の残存状態は第2図に示すとおりである。また、骨の計測値は、文末に掲載している。第2号古墳人骨の顔面頭蓋には赤色顔料が付着している。

1. 頭蓋

(1) 脳頭蓋

後頭骨後頭鱗の大部分を欠損している。骨壁はやや厚く、しっかりしている。外後頭隆起の発達はあまり著明ではない。また、乳様突起もあまり大きくなり。外耳道は両側とも観察できたが、骨腫は左右とも認められない。三主縫合は、内板はすべて瘻合閉鎖しており、外板もほとんど瘻合閉鎖している。

脳頭蓋の計測値は、頭蓋最大長が185mm、頭蓋最大幅は141mm、バジオン・ブレグマ高は135mmである。頭蓋長幅示数は76.22、頭蓋高示数は72.97、頭蓋幅高示数は95.74となり、頭型はmeso-, ortho-, metriokran(中、中、中頭型)に属している。また、頭蓋水平周は530mm、横弧長は308mmであるが、正中矢状弧長は計測できない。

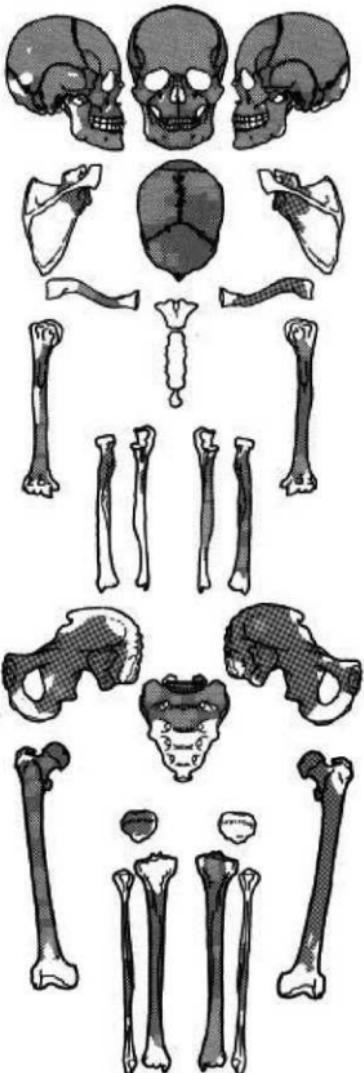
(2) 顔面頭蓋

顔面頭蓋は完全である。眉上弓の隆起は強く、前項鱗は後に傾斜している。鼻骨はわずかに隆起するだけで、鼻根部の凹陷はみられない。頬骨は外側へ著しく張り出し、顎の幅径は広い。

顔面頭蓋の計測値は、額長が102mm、頬骨弓幅は147mm、中頸幅は108mm、額高は116mm、上頸高は71mmで、額示数は78.91(K)、107.41(V)、上頸示数は48.30(K)、65.74(V)となり、顔面には著しい広顎傾向が認められる。

眼窩幅は46mm(右)、44mm(左)、眼窩高は32mm(右)、32mm(左)で、眼窓示数は69.57(右)、72.73(左)となり、両側ともchamaekonch(低眼窓)に属している。

鼻幅は27mm、鼻高は56mmで、鼻示数は48.21となり、mesorrhin(中鼻)に属している。



第2図 人骨の残存部、アミかけ部分 (Fig. 2. Regions of preservation of the skeleton. Shaded areas are preserved.)

鼻根部の計測値は、前眼窓間幅が18 mm、鼻根横弧長は21 mm、鼻根弯曲示数は85.71となり、鼻根部はやや扁平である。両眼窓幅は103 mmで、眼窓間示数は17.48となり、顔の幅に対して、眼窓間幅が狭い。鼻骨最小幅は8 mmで、前頭突起水平傾斜角は70度を示し、前頭突起の向きは矢状方向である。鼻根角は146度、鼻根凹面示数は13.89である。また、鼻頸骨角は147度である。

側面角は、全側面角が85度、鼻側面角が89度、歯槽側面角は73度で、歯槽性突顎の傾向は弱い。

下顎骨は、右側の下顎枝の保存状態が悪い。下顎体の高さはあまり高くないが、下顎枝は幅広く、下顎切痕は浅い。下顎角は外反している。

2. 齒

上下両顎には歯が釘植していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

M3 M2 M1 P2 P1 C I2 I1 I1 O C P1 P2 M1 M2 O [O:歯槽開存]
M3 M2 M1 P2 P1 C I2 I1 I1 I2 C P1 P2 M1 M2 M3

咬耗度はBrocaの1~2度で、下顎の小白歯はエナメル質しか咬耗しておらず、大臼歯は部分的に象牙質まで咬耗している。なお、風習的抜歯の痕跡は認められない。また、歯の咬合形式は錯子状咬合である。

3. 四肢骨

(1) 上肢骨

肩甲骨、鎖骨、上腕骨、橈骨、尺骨が残存していた。

①鎖骨

やや大きく、垂直径が矢状径よりも大きい。

②上腕骨

長さはわからないが、骨体は大きく、三角筋粗面の発達も良好である。計測は左側のみが可能であった。

計測値は、中央最大径が21 mm(左)、中央最小径は16 mm(左)で、骨体断面示数は76.19(左)となり、骨体はあまり扁平ではない。骨体最小周は計測できないが、中央周は64 mm(左)で、骨体は大きい。

③脛骨

左側の方が保存状態がいい。骨体は大きく、回内筋粗面はよく発達しており、また骨間縁も鋭く突出している。

④尺骨

尺骨も左側の方の保存状態がよい。径は大きく、骨間縁は中央部でよく発達している。

(2) 下肢骨

寛骨、大腿骨、脛骨、膝蓋骨および腓骨が残存していた。

①寛骨

左右とも坐骨を欠損している。径はあまり大きくなはない。大坐骨切痕の角度は小さく、恥骨下角も小さい。

②大腿骨

左右とも遠位端を欠損しているが、左側は現場では下端が残存しており、最大長を計測することができた。長さはやや長く、粗線の発達はそれほどよくなし。骨体上部は扁平である。

計測値は、現場で計測した最大長が427 mm(左)である。骨体中央周は86 mm(右)、85 mm(左)で、骨体は男性としてはそれほど大きいものではない。骨体中央矢状径は27 mm(右)、26 mm(左)、横径は27 mm(右)、27 mm(左)で、骨体中央断面示数は100.00(右)、96.30(左)となり、粗線や骨体両側面の後方への発達はあまりよくない。また、上骨体断面示数は77.42(右)、75.00(左)となり、骨体上部は扁平である。

③脛骨

両側とも残っていたが、左側はほぼ完全である。長さは短く、骨体は矢状径が大きく、やや扁平である。ヒラメ筋線の発達はよくないが、両側とも後面に一稜が形成されており、右側はかなり鋭く突出している。骨体の断面形は両側ともヘリチカのIV型を呈している。

計測値は、脛骨最大長が334 mm(左)、骨体周は85 mm(右)、84 mm(左)、最小周は76 mm(右)、77 mm(左)で、骨体は大きい。中央最大径は32 mm(右)、32 mm(左)、中央横径は21 mm(右)、23 mm(左)で、中央断面示数は65.63(右)、71.88(左)となり、骨体はやや扁平である。

④ 脊骨

両側ともよく骨体が残存していたが、計測はできない。骨体はかなり扁平である。

4. 推定身長値

左側の大腿骨最大長から、Pearson および藤井の公式を用いて推定身長値を算出すると、それぞれ 161.58 cm(Pearson)、160.31 cm(藤井)となり、高身長であるが、左側脛骨の最大長から算出すると、156.37 cm(藤井)という低い値になってしまう。これは本例の脛骨が大腿骨長さの割には短いことによる。

5. 性別・年齢

性別は、眉上弓が強く隆起し、大坐骨切痕の角度や恥骨下角が小さいことから、男性と推定した。年齢は、三縫合の内板と外板の大部分が癒合していることから、老年と考えられる。

考 察

古墳時代人骨について、広島県内を中心にして周辺の人骨との比較をおこなってみた。

1. 頭蓋

(1) 脳頭蓋

まず、頭型を検討してみたい。頭型は頭蓋長幅示数で表される。表3は脳頭蓋の主要計測値の比較表で、広島県内の古墳人とその他に山口県と四国愛媛県の古墳人を載せている。頭蓋長幅示数が算出できた県内の古墳人の例数は多くない。表3には主に筆者が所見を書いた古墳人を掲げた。本例は頭型は中頭型で、示数値も中頭型のはば中位にあり、表3に掲げた古墳人のなかでは八鳥矢内迫頭蓋Vとほぼ一致する示数値である。県内の古墳人の頭型をみてみると千代田町の中出勝負峰5号人骨が短頭型で、同じ中出勝負峰7号人骨、氏神正田、山の神が長頭型に属しており、残りの5例は中頭型である。中頭型5例のうち八千代町の新宮、西城町の八鳥矢内迫IVとⅤの3例は短頭に傾いた中頭型で、残りの成岡と八鳥矢内迫Vが中頭型の中位である。従って、今のところ広島県の頭型は中頭型で、わずかに短頭に傾いているようであるが、なにしろ例数が少なすぎて時期差や地域的特徴をつかむところまで至っていない。また、山口県や愛媛県の古墳人の頭型は、愛媛県の相の谷が長頭型に属している以外は中頭型である。山口市の朝田古墳人は計測できないものも含めると示数値以上に長頭型に傾いていて、鼻根部が扁平で、歯槽性突顎がみられるなど中世化が進んでいた。成岡の頭蓋長幅示数は山口市の朝田にも近い示数値である。

頭蓋の高さを表すバジオン・ブレグマ高は135mmで、広島県では中出勝負岬5号人骨と、愛媛県では二の谷と同じ計測値であるが、この値は広島県でみれば決して大きな計測値ではない。

また、脳頭蓋の全体の大きさを表す頭蓋水平周は530mmもあり、この値は表3では最大値となり、成岡の脳頭蓋がかなり大きいことがわかる。

(2) 顔面頭蓋

表4は顔面頭蓋の比較表である。顔の幅を表す頬骨弓幅は表4では最も大きく、中顎幅も馬島に次いで大きな値で、これは新宮と同じ値である。要するに成岡古墳人の顔の幅はかなり広いのである。顔の高さを示す顔高は広島県内では氏神正田、中出勝負岬5号墳人骨および7号墳人骨に次いで大きな値であるが、120mmを超える値ではない。また、成岡古墳人の顔高は山口市の朝田、汐汲、愛媛県の馬島、二の谷よりも小さな計測値である。上顎高は70mmを超え、大想田山、山の神、八鳥矢内追よりは大きな値ではあるが、氏神、胡麻よりは小さく、新宮、歲ノ神、中出勝負岬と大差ない。山口県と愛媛県の例では朝田よりは大きいが、二の谷と汐汲よりは小さく、馬島の値に一致する。このように成岡の顔面の計測値は、高径もけっして小さくはないが、それ以上に幅径がかなり広いので、顔示数や上顔示数は小さな値となり、コルマンの顔示数は表4では最小値となり、ウィルヒョーの顔示数は山の神に次いで小さな値である。コルマンの上顔示数は山の神、八鳥矢内追よりは大きいものの、新宮、歲ノ神、中出勝負岬7号墳よりは小さく、また、汐汲、二の谷よりも小さく、中出勝負岬5号墳、朝田、馬島に近い。ウィルヒョーの上顔示数も山の神、大想田山、八鳥矢内追頭蓋IVよりは大きいが、歲ノ神、胡麻、中出勝負岬7号墳よりもわずかに小さく、新宮、中出勝負岬5号墳に近い値である。また、汐汲、二の谷よりも小さく、朝田と馬島にも近い。

眼窩示数は表4では最小値となるが、示数值は新宮と大差なく、眼窩の高径がかなり低い。鼻示数は鼻高が高いので、小さな示数值になり、歲ノ神、馬島、胡麻に次いで小さな値で、二の谷に一致し、眼窩の高径が低いわりには鼻高が高い。

歯槽側面角は氏神正田、山の神、中出勝負岬5号墳に次いで小さく、比較的中出勝負岬7号墳に近い値で、歯槽性の突顎傾向は弱い。

鼻根部の計測値をみてみると(表5)、鼻根彎曲示数は八鳥矢内追頭蓋IVよりは大きいが、氏神正田、中出勝負岬7号墳、八鳥矢内追頭蓋Vよりは小さく、示数值は山の神、八鳥矢内追頭蓋VIに一致し、その他の資料とも大差ない。山口県と愛媛県の資料とでは馬島と二の谷よりは大きく、朝田と相の谷よりは小さい。すなわち、鼻根部は氏神正田、中出勝負岬ほど扁平ではないが、鼻骨の正中央状縫合方向への隆起は八鳥矢内追頭蓋IVや馬島ほ

ど強くはなく、山の神、八鳥矢内迫頭蓋轍と同じ程度である。

2. 四肢骨

①上腕骨

表6は上腕骨の比較表である。骨体の太さを表す中央周は山の神、朝田よりは小さいが、中出勝負峰、氏神正田、手島山、汐汲、相の谷より大きく、比較的鶯の森に近い値である。骨体断面示数は手島山、中出勝負峰よりは小さいが、氏神正田、山の神(松下)、汐汲よりも大きく、朝田、山ノ神(吉岡)、相の谷に近く、骨体の扁平性は強くない。

②大腿骨

表7は大腿骨の比較表である。成岡の最大長はほぼ中出勝負峰に一致し、氏神正田、山の神、新宮、鶯の森、朝田、二の谷、相の谷よりは長い。骨体の太さを表す骨体中央周は氏神正田、二の谷よりは大きいが、陣開よりは著しく小さく、計測値は中出勝負峰に一致し、八鳥矢内迫、山の神、鶯の森、朝田とも大差ない値である。要するに古墳人としては若干小さめの骨体である。骨体中央断面示数は陣開、鶯の森、山の神(松下)、中出勝負峰、朝田よりは小さいが、八鳥矢内迫、山ノ神(吉岡)、二の谷よりは大きく、氏神正田に一致する。上骨体断面示数は氏神正田、陣開、鶯の森、朝田よりは小さいが、八鳥矢内迫、中出勝負峰、山ノ神(吉岡)、馬島よりは大きく、山の神(松下)の値に一致する。すなわち、成岡古墳人の大腿骨は長さが長く、骨体の形状は氏神正田と同じように柱状性はみられず、骨体上部は扁平で、その程度は山の神(松下)と同じぐらいである。

③脛骨

表8は脛骨の比較表である。最大長は中出勝負峰、二の谷よりも短いが、氏神正田、山ノ神(吉岡)よりも長く、山の神(松下)に一致する。骨体の太さを示す骨体周は陣開、新宮よりは小さいが、その他の資料よりは大

きい。最小周は表7では大想田に次いで大きく、骨体は陣間ほどではないが、やや大きい方である。中央断面示数は馬島、氏神正田に次いで小さく、骨体は古墳人としては扁平な方である。

3. 推定身長値

表9は推定身長値の比較表である。成岡の推定身長値は愛媛県の馬島よりは低いが、中出勝負峠や新宮と大差なく、その他の資料よりはやや大きい。すなわち、本古墳人は高身長である。表9をみてみると広島県の古墳人は山ノ神（吉岡）や氏神正田は低身長であるが、その他の160cm程度である。山口県の古墳人は160cmに届かず低身長である。また、愛媛県の古墳人は馬島が飛び抜けて高身長で、その他の2例は160cm程度である。

要 約

広島県広島市安芸区中野東2丁目に所在する成岡遺跡の発掘調査で、古墳から1体の人骨が出土した。古墳人骨の保存状態はきわめて良好で、広島県の古墳時代人の特徴を明らかにするための貴重な資料となるものである。人骨の人類学的観察と計測をおこない以下の所見を得た。

- 古墳人骨は、第2号古墳の内部主体である箱形石棺から出土し、埋葬姿勢は仰臥の伸展葬である。
- 年齢・性別は、老年の男性骨である。
- 古墳人骨は、古墳時代前期(3世紀後半)に属する人骨と推定されて】る。
- 脳頭蓋の計測値は、頭蓋最大長が185mm、頭蓋最大幅は141mm、バジオン・ブレグ高は135mmで、頭蓋長幅示数は76.22となり、頭型は中頭型である。
- 顔面頭蓋の計測値は、頬骨弓幅147mm、中顎幅108mm、顎高U6mm、上顎高71mmで、顎示数は78.91(K)、107.41(V)、上顎示数は48.30(K)、65.74(V)となり、顔面には広顎傾向が認められる。眼窓示数は69.57(右)、72.73(左)となり、両側とも低眼窓に属し、鼻示数は48.21となり、中鼻に属している。鼻根部は狭く、歯槽側面角は73度で、歯槽性突頭の傾向は弱い。
- 上腕骨は太く、三角筋粗面の発達も良好で、橈骨と尺骨も大きく、骨間縫が突出している。大腿骨の長さはやや長いが、骨体は細く、粗線や骨体両側面の後方への発達はよくない。脛骨は、長さは短いが、骨体は太く、扁平である。また、腓骨もかなり扁平である。
- 推定身長値は、161.58cm(Pearson)となり、高身長である。
- 成岡第2号古墳の被葬者は、頭型は中頭型で、顔面の幅が著しく広く、精悍な顔つきをしていたようである。顔面の形態と推定身長値は、広島県内の古墳人のなかでは八千代町の新宮第2号古墳の被葬者に近似している。広島県での古墳人骨の出土例も増えるに伴い、保存良好な人骨も増加してきている。地理的な変異や、ある特定の地域の特異性も次第にみえ始めてきた。

参考文献

- 池田次郎、他、1984：広島県氏神正田遺跡出土の古墳時代人骨について。広島県山縣郡千代田町氏神正田遺跡発掘調査報告：1318。
- MARTIN-SALLER、1957：Lehrbuch der Anthropologie.Bd.1.Gustav Fischer Verlag,Stuttgart : 429-597.
- 松下孝幸、1982：山口県朝田墳墓群第2地区出土の人骨。朝田墳墓群V(山口県埋蔵文化財調査報64)：179-206。
- 松下孝幸、他、1983：山口県豊北町井ヶ浜遺跡出土の人骨。土井ヶ浜遺跡第7次発掘調査概報(豊北町埋蔵文化財調査報告2)：1930。
- 松下孝幸、他、1992：東広島市助平古墳出土の古墳・中世人骨。西城第一土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書I(東広島市教育委員会文化財調査報告書第21集)：127-134。
- 松下孝幸、他、1983：山口県山口市朝田墳墓群第11地区出土の人骨一覧括弧篇一。朝田墳墓群VI(山口県埋蔵文化財調査報69)：219-242。
- 松下孝幸、1984：広島市芳カ谷3号墳出土の古墳時代人骨。広島市安佐南区祇園町所在広島経済大学構内遺跡群発掘調査報告(広島市の文化財第30集)：61-68。
- 松下孝幸、他、1985：東広島市大橋3号遺跡出土の古墳時代・中世人骨。大橋遺跡群(広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第38集)：117-122。
- 松下孝幸、他、1986a：歳ノ神遺跡群出土の弥生・古墳時代人骨。歳ノ神遺跡群・中出勝負姉墳墓群(広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第49集)：201-212。
- 松下孝幸、他、1986b：中出勝負姉墳墓群出土の弥生・古墳時代人骨。歳ノ神遺跡群・中出勝負姉墳墓群(広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第49集)：213-244。
- 松下孝幸、1990a：広島県の古骨。みよし風土記の丘、No40：1-4。みよし風土記の丘友の会。
- 松下孝幸、他、1990b：広島縣西城町八尾尻内追横穴墓群出土の古墳時代人骨。西城町教育委員会文化財報告書第2集：33-65。
- 松下孝幸、他、1991a：広島県竹原市鷲の森遺跡出土の弥生～古墳時代人骨。鷲の森遺跡発掘調査報告(付編)：1-40。
- 松下孝幸・他、1991b：広島県豊栄町手島山墳墓群出土の弥生～古墳時代人骨。手島山墳墓群(広島県埋蔵文化財調査センター文化財発掘調査報告第93集)：61-80。
- 松下孝幸、他、1991c：広島市府ノ下A地点出土の古墳時代人骨。(財)歴史科学教育事業団調査報告第2集：54-59。
- 松下孝幸、1993：広島県本郷町陣間遺跡出土の古墳時代人骨。陣間遺跡(本郷町教育委員会文化財調査報告書第2集)：1-5。
- 松下孝幸、1997a：福岡県岸川町古川平原古墳出土の古墳時代・近世人骨。古川平原古墳群(岸川町文化財調査報告書第5集)：82-98。
- 松下孝幸、1997a：広島県府中市打堀山遺跡A地点出土の弥生・古墳時代人骨。打堀山遺跡A・B地点(広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第147集)：47-50。
- 松下孝幸、1997b：広島県東城町梶平塚第2号墳出土の古墳時代人骨。梶平塚第2号墳発掘調査報告書(広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第150集)：53-60。
- 松下孝幸、1998a：広島県福山市法寺古墳出土の弥生・古墳時代人骨。法寺古墳(広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第166集)：52-58。
- 松下孝幸、1998b：広島県府中市山の神・池ノ道・貫跡群出土の弥生・古墳時代人骨。山の神・池ノ道遺跡群(広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第165集)：75-105。
- 松下孝幸、2000：広島県八千代町新宮第2古墳出土の人骨。新宮遺跡発掘調査報告書(八千代町埋蔵文化財調査報告書第1集)：95-108。
- 鈴木尚、1963：日本人の骨。岩波、東京。

成岡A地点遺跡出土遺物の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

成岡A地点遺跡は、瀬野川左岸の天狗防山の北西尾根上に位置する。発掘調査により、古墳時代前期の古墳と弥生時代終末から古墳時代初頭の集落遺構が検出されている。このうち第1号住居跡は火災住居跡であり、住居構築材と考えられる炭化材が出土している。これらの炭化材は、樹種同定を行った全点がクリであることが確認されている。また、第3号古墳を取り開む墓穴から出土したガラス小玉は、蛍光X線分析によりアルカリ珪酸塩ガラスのカリガラスであることが確認された。

本報告では、成岡遺跡の第3号古墳内から出土した剣に付着していた鞘の可能性がある木片の樹種同定、布の薄片および電顕観察、鉄鎌の矢柄の材質の同定を行う。

成岡第3号古墳出土遺物の分析

1. 剣の布の分析（図版16）

(1) 試料

試料は、剣に付着していた布片2点(細・粗)である。共に酸化鉄が染み込んでおり、本来の形質は失われている。

(2) 方法

実体顕微鏡および電子顕微鏡を用いて、試料外観の特徴を観察する。試料を樹脂で包埋し、ダイアモンドカッターで繊維の横断面を切断してスライドグラスに接着し、厚さ0.03mmになるように研磨してプレパラートとする。生物顕微鏡などを用いて横断面に見られる組織などを観察する。

(3) 結果

布(細)は、実体顕微鏡による観察で、径0.5mm以下の繊維で編まれている。隙間が小さく、全体に目が細かい。電子顕微鏡では、酸化鉄が染み込んでいるためにほとんど観察できない。薄片の観察では、横断面で円形状になる部分と波状の部分がある。円形の組織は繊維の横断面である。波状の部分は、繊維に対して平行に切断した部分であり、円形の繊維を縋うように編まれている様子が見られる。繊維の横断面の観察では、径が10~15μmの繊維が150~160本集まって1本の繊維を形成している様子がみられる。これらの繊維は、芯が見られない、製いたような部分が見られない、不規則な形状を有する等の特徴が見られることから、絹と同定される。

布(粗)は、径0.6mm程の繊維で編まれている。布(細)に比較すると隙間が大きく、目が粗い。布(細)と同様に、電子顕微鏡による観察はできなかった。薄片の観察では、布(細)と同様の構造が見られ、サイズが異なるものの同じく絹と同定される。

(4) 考察

剣の布片は、いずれも絹糸で編まれていた。絹は蚕糸からつくられ、中国が発祥の地である。日本は、その技術を最も早く中国から導入した国の一とされ、福岡市有田遺跡で出土した弥生時代前中期の例が国内最古の出土例とされる（布目、1992）。

弥生時代は、主に北部九州の遺跡から出土しているが、古墳時代にはいると富山市杉谷A遺跡、天理市大和天神山古墳、埼玉県坂戸市人石塚古墳など各地で出土例が報告されており、絹の利用が広まっていたことがうかがえる。古墳時代の出土例を見ると、古墳から出土した銅鏡や刀・剣等に付着している例が多く見られ、副葬品として納められた品々を絹製の布で包んでいたことが推定される。今回の例は、これらの例とも一致しており、本古墳でも剣が絹製の布で包まれて納められたことが推定される。

2. 木質遺物の同定（図版17）

(1) 試料

試料は、剣の柄材(表)と材(裏)、鉄鎌の矢柄の合計3点である。

(2) 方法

試料は炭化していないが、酸化鉄が染み込んで元の木材の形質も残していない。そのため、炭化材で用いられる方法を用いて同定を試みた。

木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

(3)結果

試料のうち、剣の材(裏)は保存状態が悪いために種類の同定には至らなかった。その他の試料は、剣の材(表)が落葉広葉樹のトネリコ属に、矢柄がイネ科タケ亜科にそれぞれ同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

・トネリコ属(*Fraxinus*)モクセイ科

試料は小片であるが、年輪界を挟んだ道管径の変化から環孔材と判断できる。道管壁は厚く、横断面では円形～楕円形、単独または2個が複合、複合部はさらに厚くなる。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、1～3細胞幅、1～40細胞高。

・イネ科タケ亜科(*Gramineae* subfam. *Bambusoideae*)

維管束が基本組織の中に散在する不齊中心柱が認められ、放射組織は認められない。タケ亜科は、タケ・ササ類であるが解剖学的特徴では区別できない。

(4)考察

剣に付着していた木片は、落葉広葉樹のトネリコ属であった。古墳から出土した刀の鞘については、これまでにも各地で樹種同定が行われている島地・伊東, 1988; 伊東, 1990; 福田, 1995。その結果を見ると、針葉樹のヒノキ属やスギなどが多く認められるが、広葉樹のシノキ属、カエデ属などが認められることもある。今回の場合は、後者の例と同様の出土例といえる。

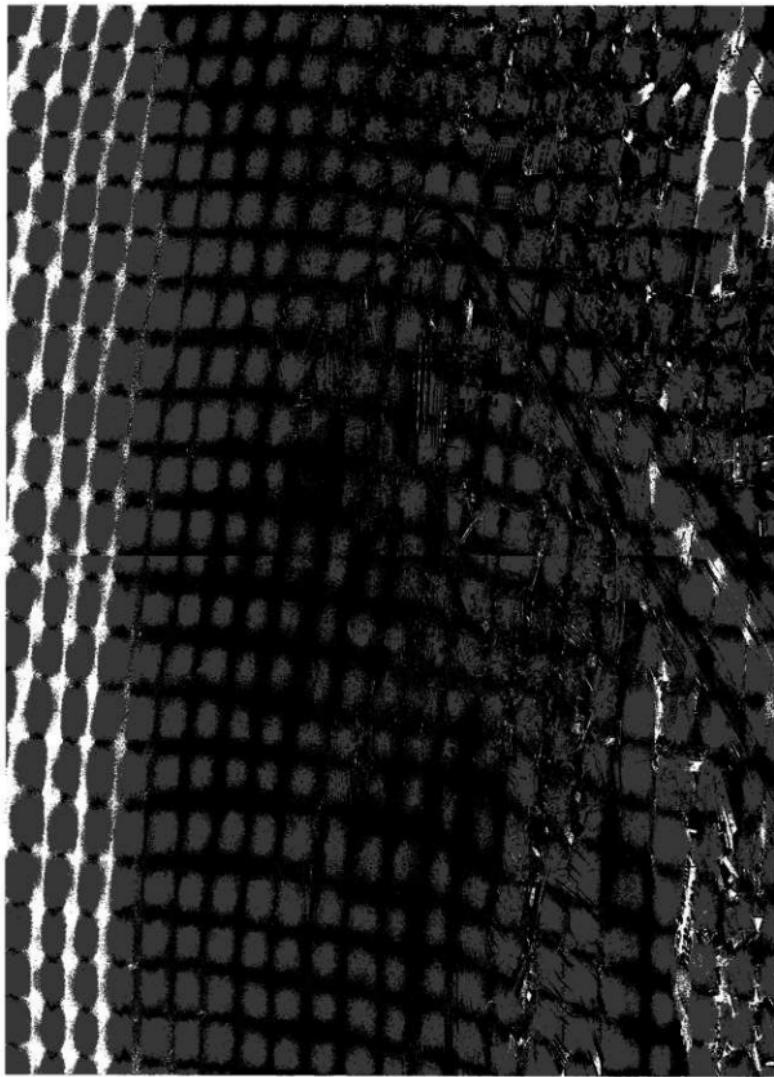
一般に、針葉樹と広葉樹では材質が大きく異なっており、前者には軟質の木材、後者には硬質の木材が比較的多い。材質が異なる背景には、利用目的(実用品・儀礼用)の違い、漆塗りの有無など様々な要因が考えられる。しかし、詳細は不明であり、今後さらに調査事例を蓄積したい。

矢柄はタケ亜科であった。タケ亜科にはヤダケ(矢竹)のように、矢柄として利用する種類が含まれる。出土例も報告されており(島地・伊東, 1988), 古くから竹が矢柄として利用されていたことが推定され、今回の結果もその一例といえる。矢柄には樹皮が巻き付けてあり、鑑の固定や矢柄の補強などをを行うためと考えられる。樹皮の種類は不明であるが、民俗事例などを考慮するとサクラ、カバノキ、スギ、ヒノキなど樹皮を利用する種類の可能性がある。

引用文献

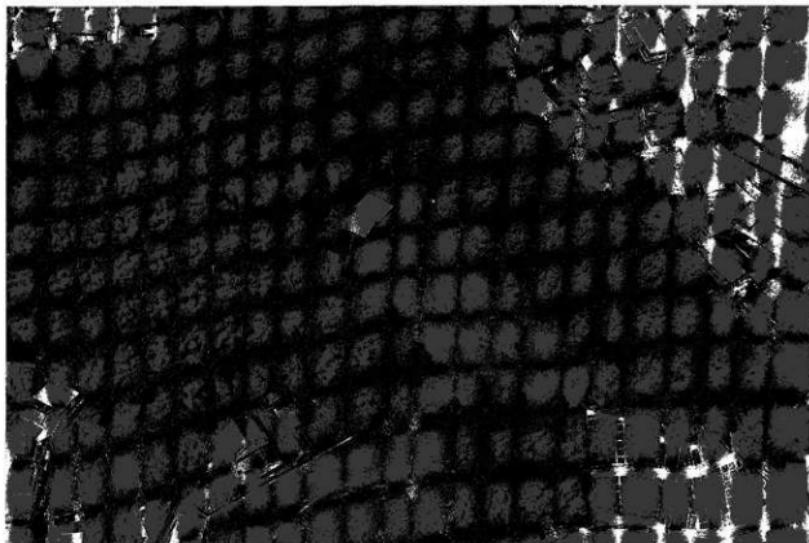
- 福田さよ子(1995)刀剣類の外装に使用された木材. 日本文化財科学会第12回大会研究発表要旨集, p.88-89.
平井信二(1979)木の事典第2卷. かなえ書房.
平井信二(1980)木の事典第4卷. かなえ書房.
平井信二(1982)木の事典第15卷. かなえ書房.
伊東隆夫(1990)日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途 11. 木材研究・資料, 26, p.91-189, 京都大学木材研究所.
宮脇昭輔(1983)日本植生誌中国, 540p., 至文堂.
布目順郎(1992)目で見る繊維の考古学繊維遺物資料集成, 314p., 染織と生活社.
島地 謙・伊東隆夫編(1988)日本の遺跡出土木製品総覧, 296p., 雄山閣.

図 版

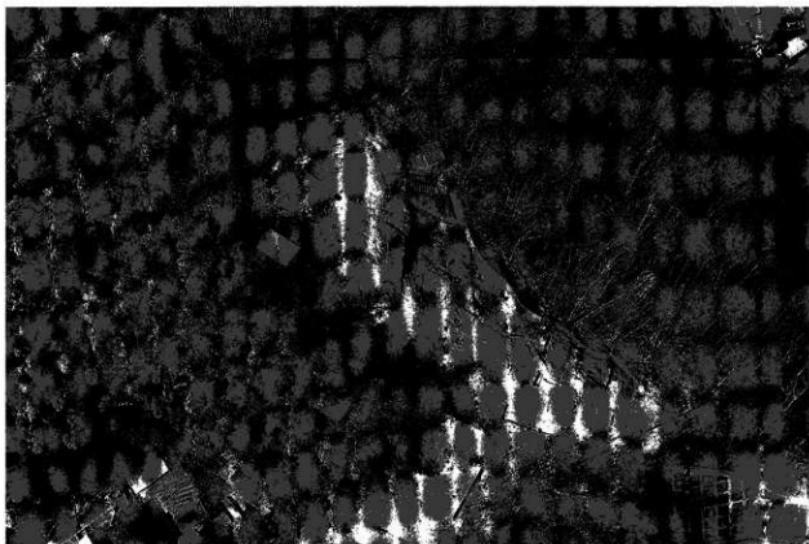


成岡 A 地点遠景 (航空写真・北東から)

図版 1

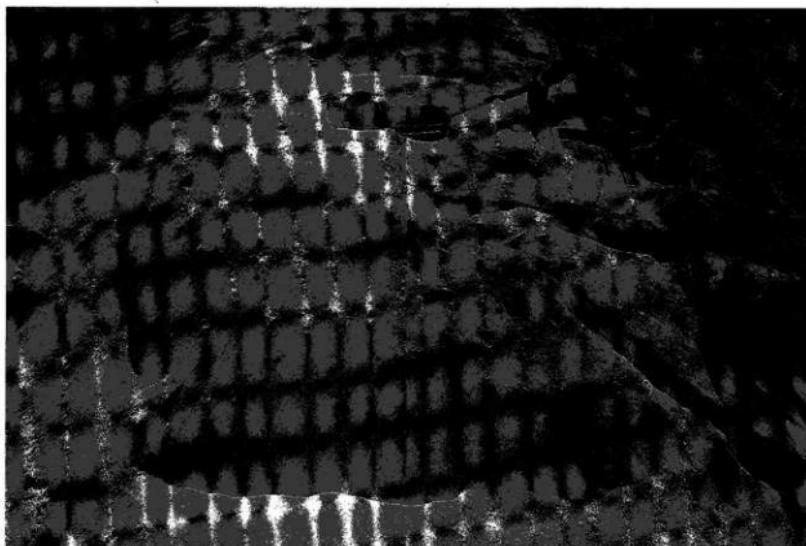


a 成岡 A 地点遺跡調査前（航空写真・東から）



b 成岡 A 地点遺跡調査後（航空写真・東から）

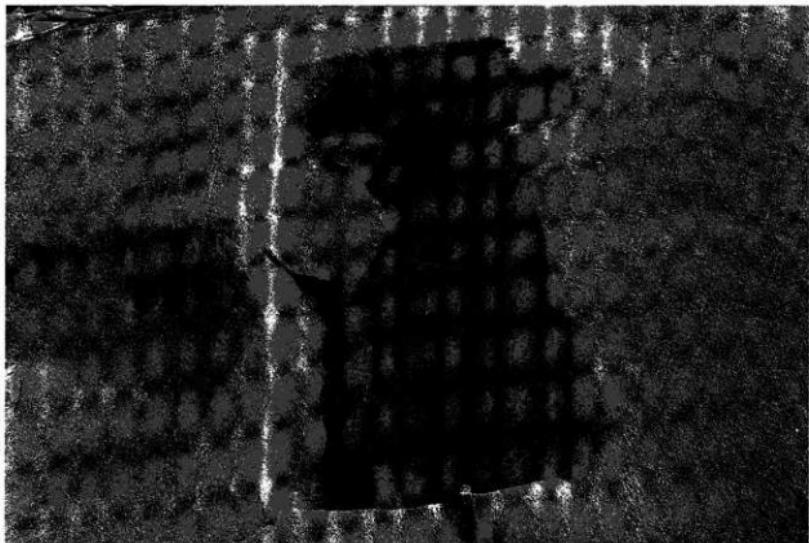
図版2



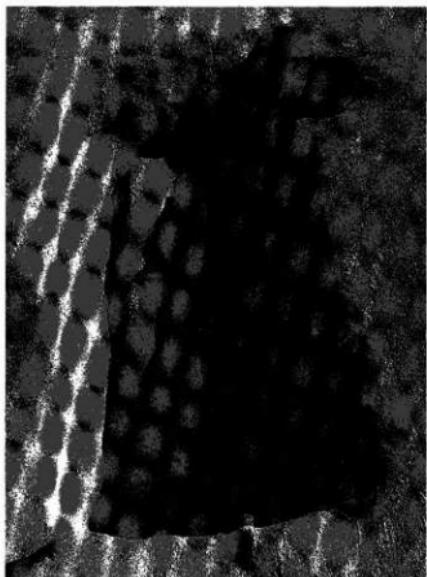
a 第1号古墳墳丘全景（北東から）



b 第1号古墳埋葬主体木棺痕跡
(北西から)

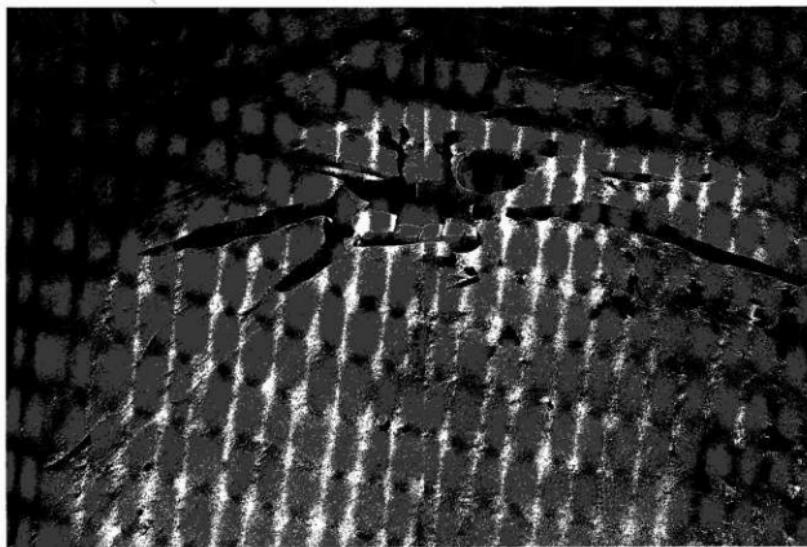


a 第1号古墳埋葬主体遺物出土状況（北西から）

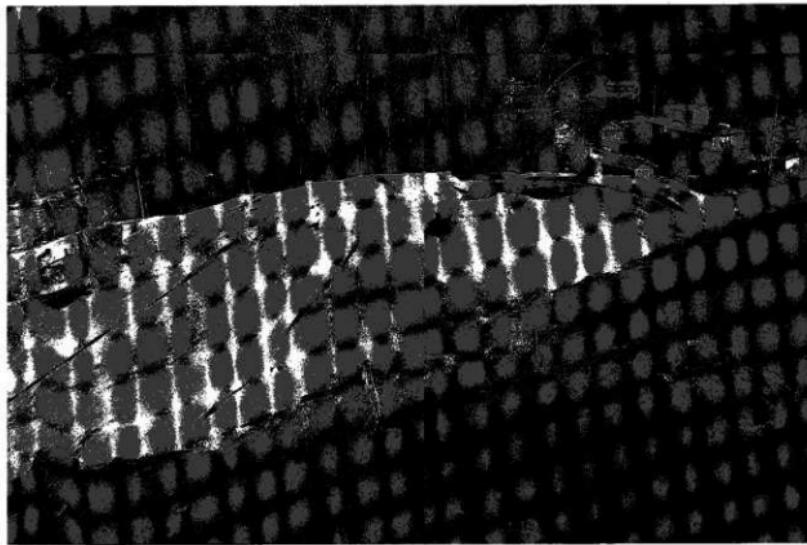


b 第1号古墳埋葬主体完掘後
(北西から)

図版 4

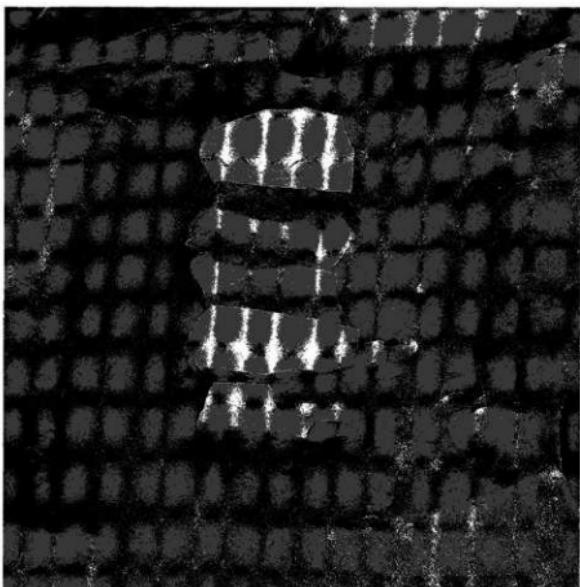


a 第2号古墳墳丘全景（北東から）

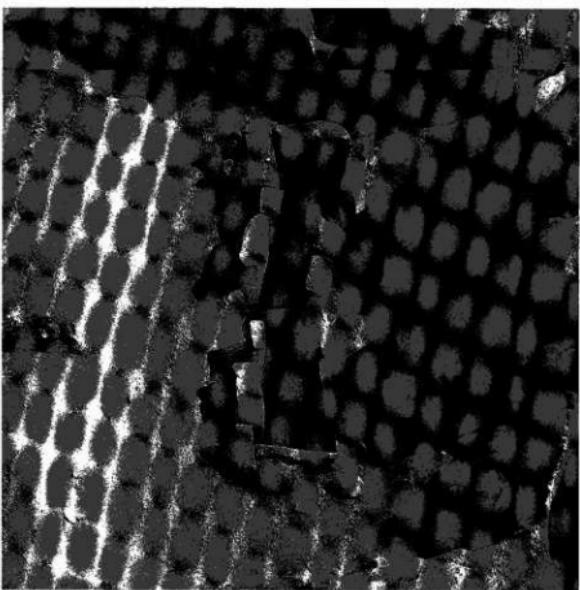


b 第2号古墳墳丘全景（西から）

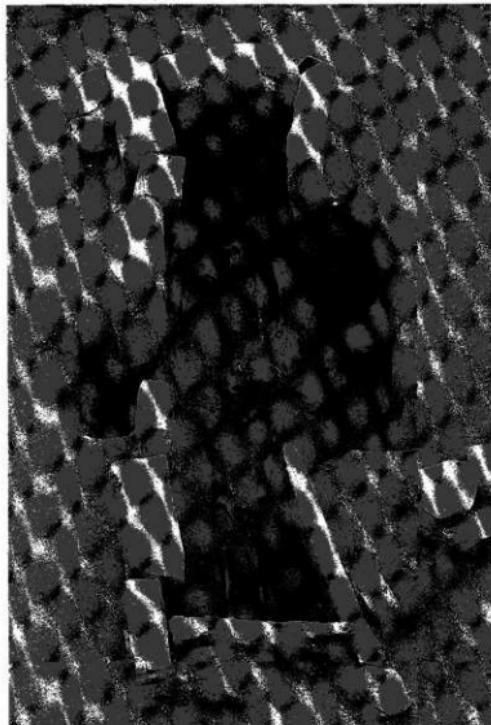
a 第2号古墳埋葬
主体石棺開棺前
(北西から)



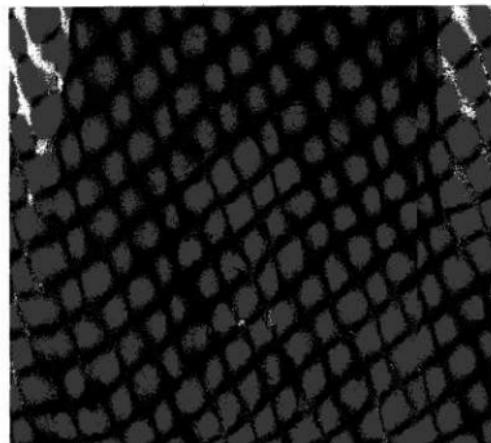
b 第2号古墳埋葬
主体石棺開棺後
(北西から)



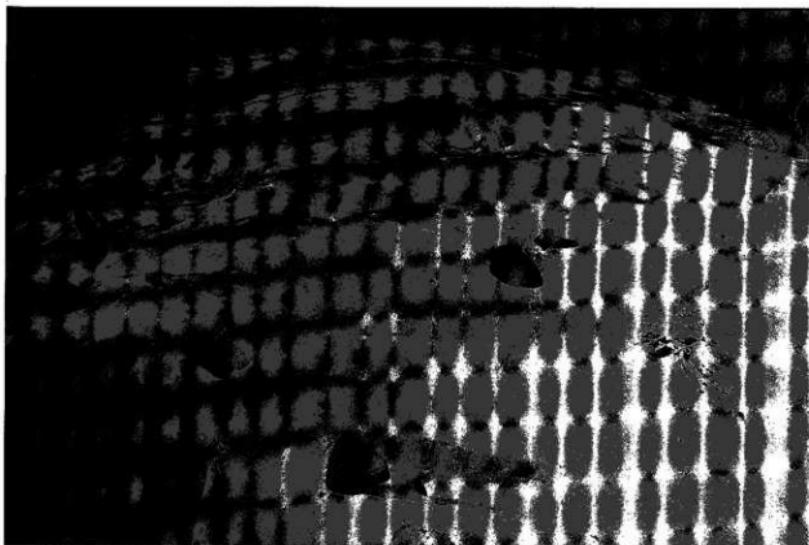
図版 6



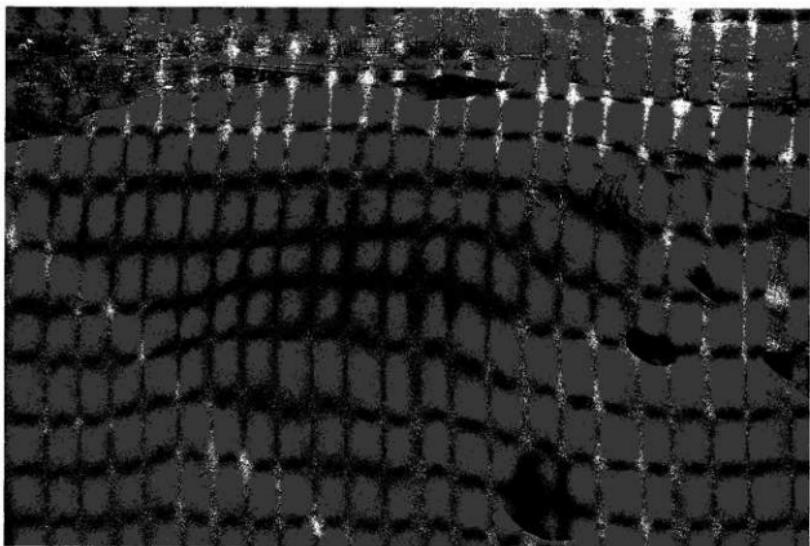
a 第2号古墳埋葬主体人骨出土
状況（北西から）



b 第2号古墳埋葬主体遺物出土
状況（北西から）

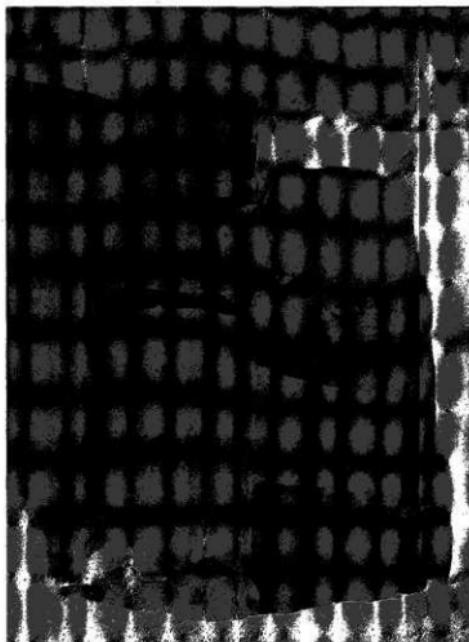


a 第3号古墳墳丘全景（東から）

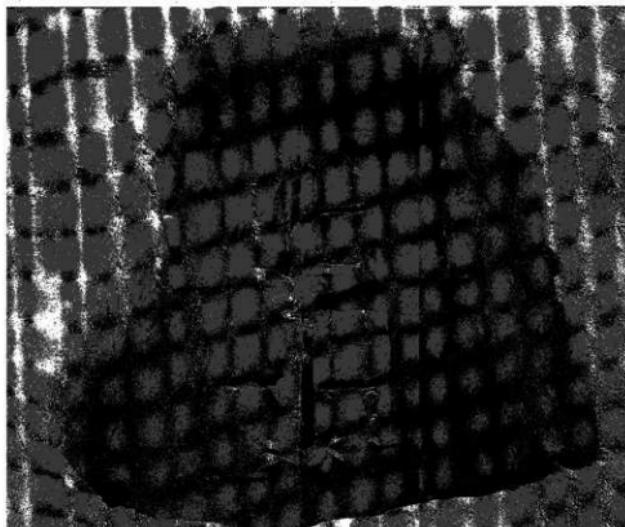


b 第3号古墳墳丘全景（南から）

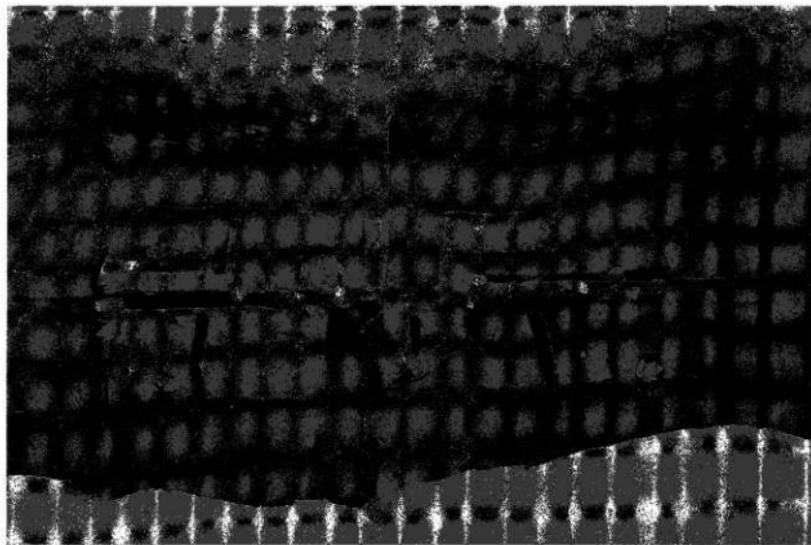
図版 8



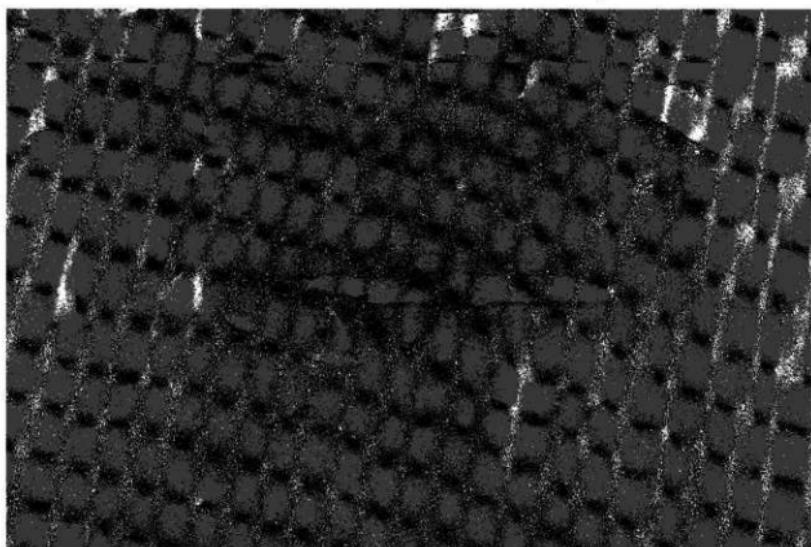
a 第3号古墳第1主体木棺痕跡
検出状況（北東から）



b 第3号古墳第1
主体棺台土及び
遺物出土状況
(北東から)

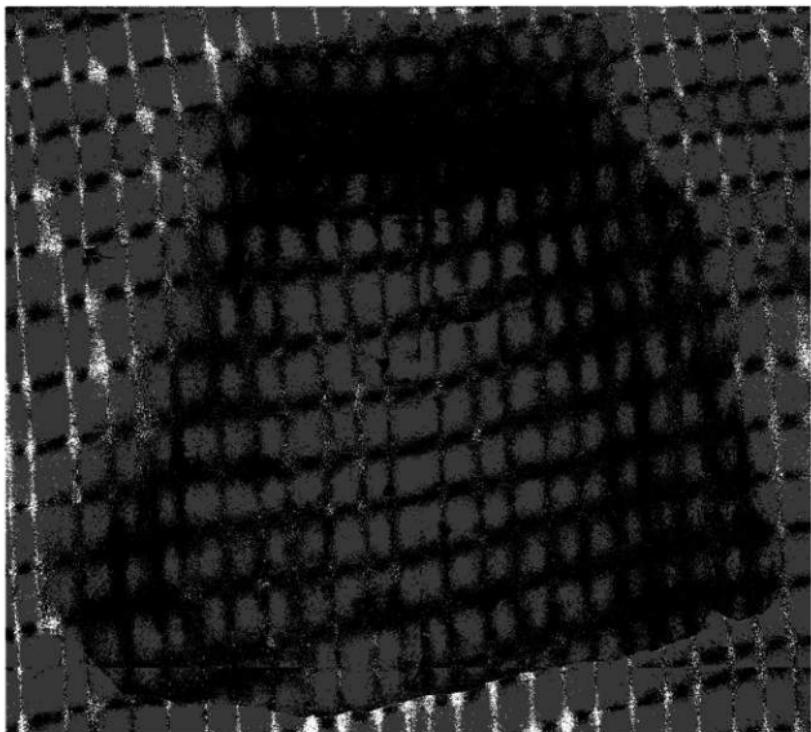


a 第3号古墳第1主体棺台土及び遺物出土状況（北西から）

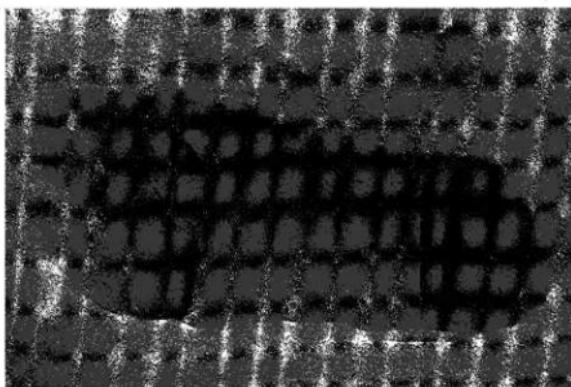


b 第3号古墳第1主体鉄剣等出土状況（南東から）

図版10

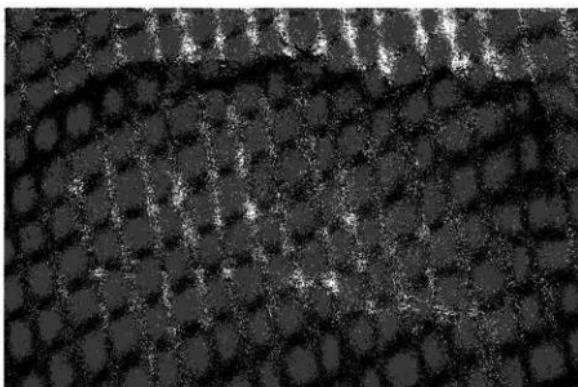


a 第3号古墳第1主体完掘後（北東から）

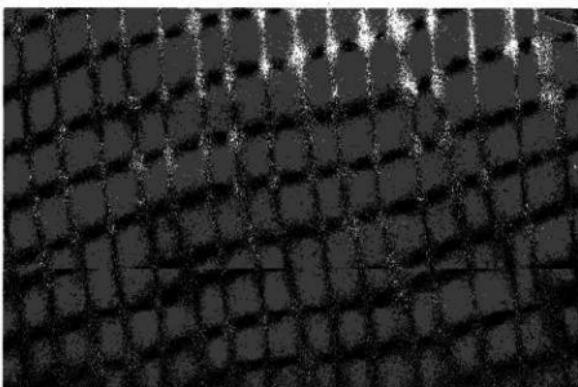


b 第3号古墳第2主体
(南から)

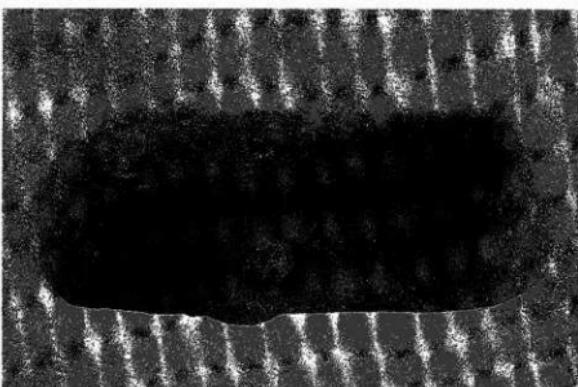
図版11



a 第3号古墳第3主体
(南東から)

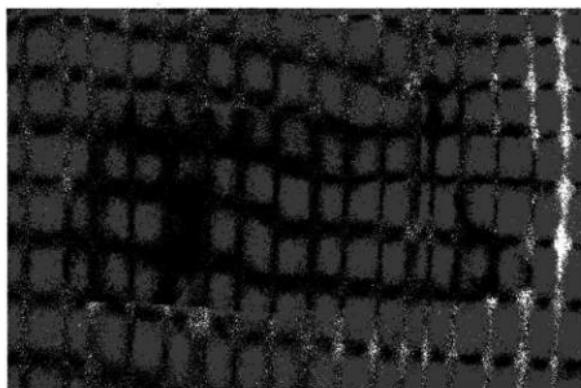


b 第3号古墳第4主体
(南東から)

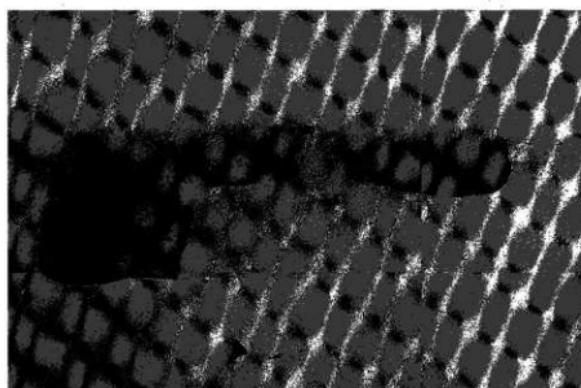


c 第3号古墳第5主体
(東から)

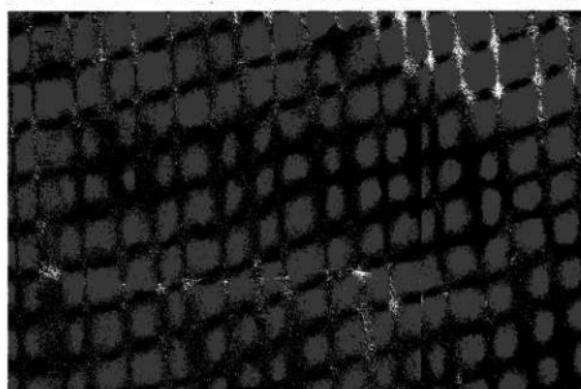
図版12



a 第3号古墳第6主体
(南東から)

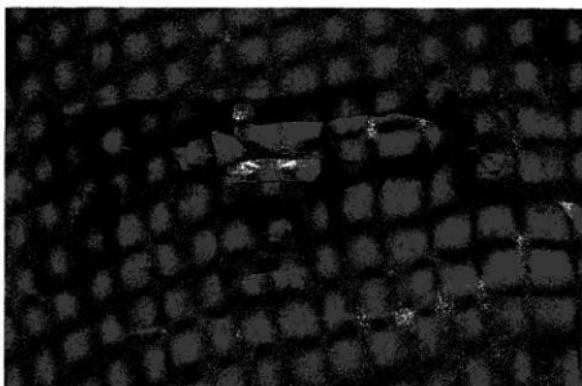


b 第3号古墳第7主体
(東から)

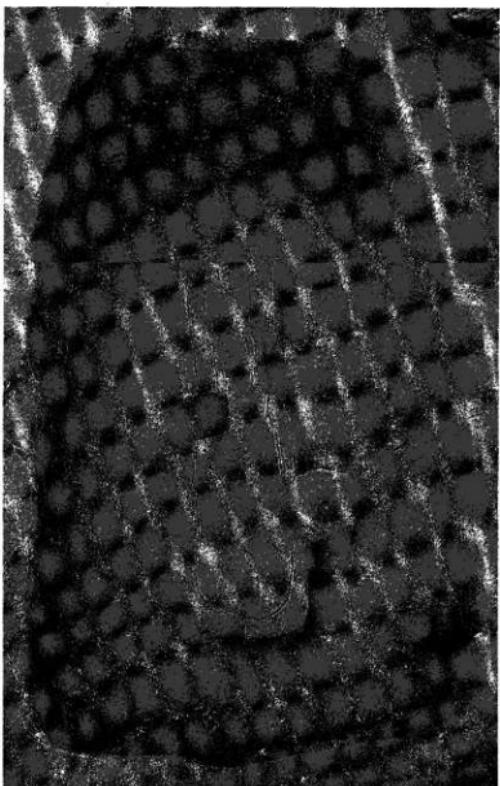


c 第3号古墳第8主体
(北東から)

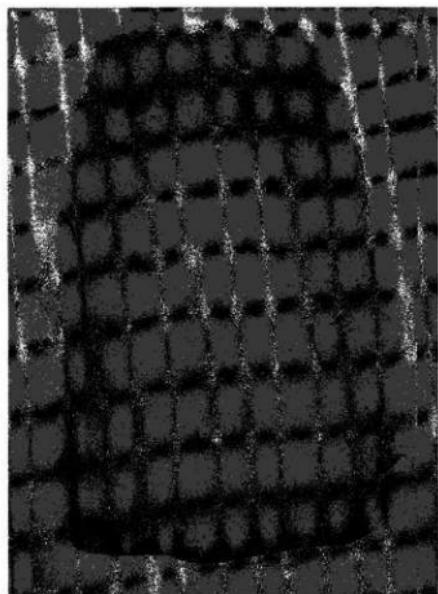
a 第3号古墳第9主体
(東から)



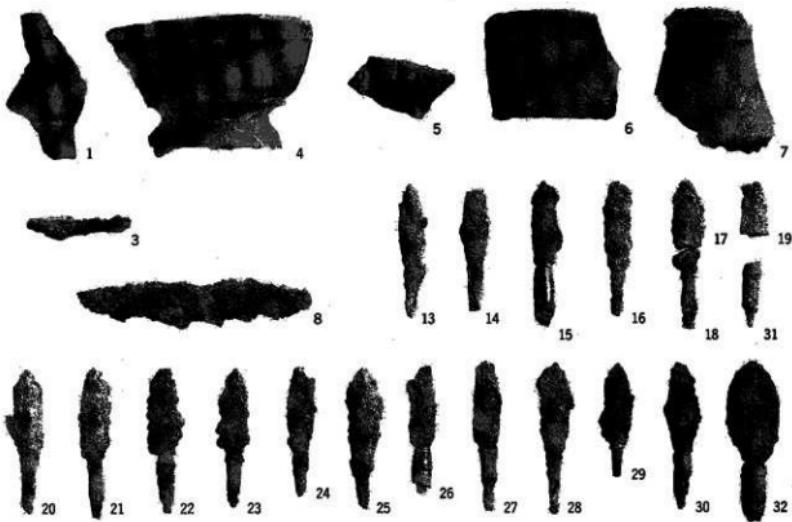
b 第3号古墳第10主体木棺痕跡
(北西から)



図版14



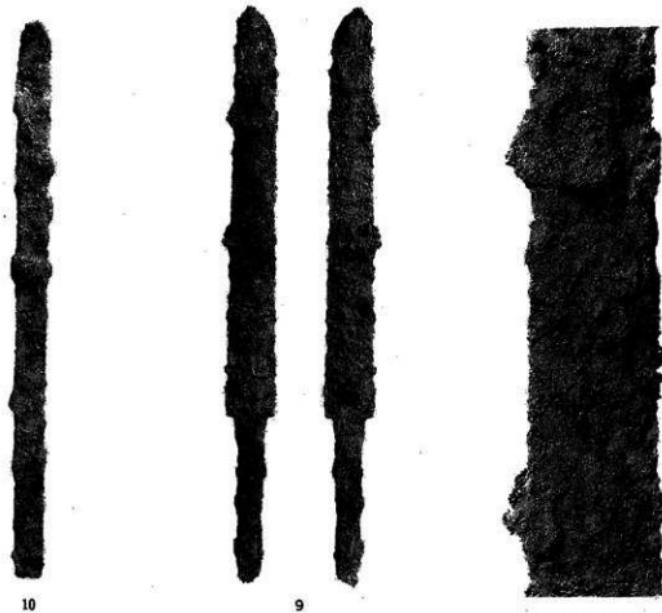
a 第3号古墳第10主体完掘後
(北西から)



b 古墳遺構出土遺物(1)



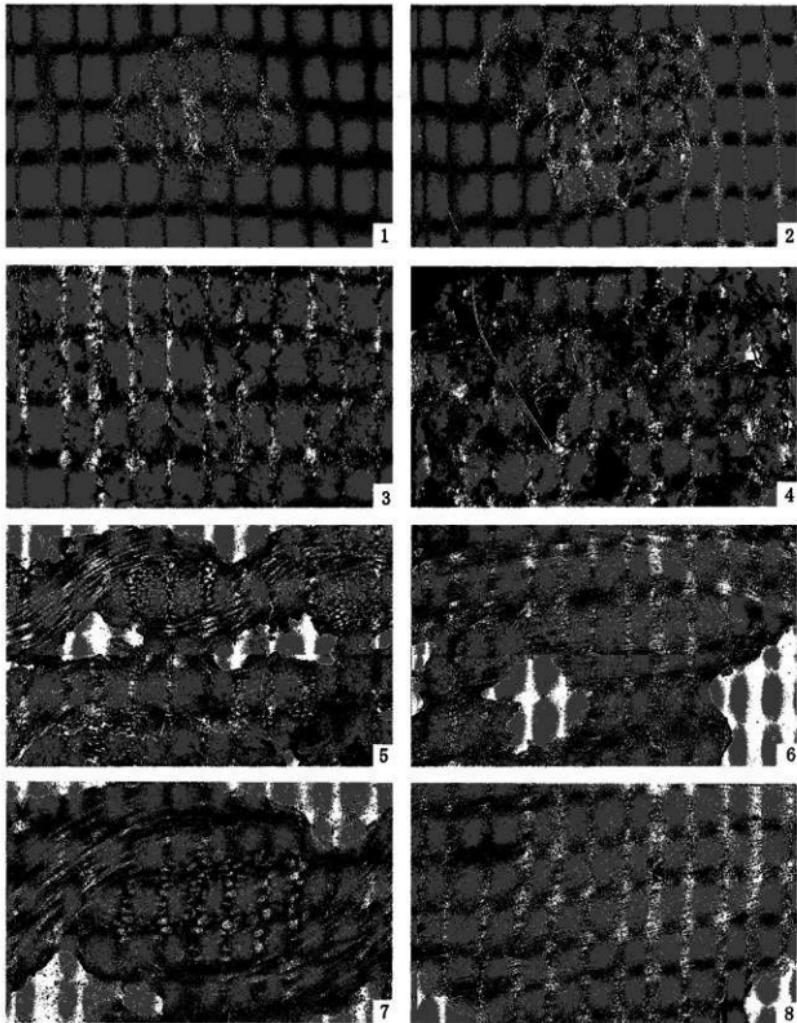
木質残存鉄鎌拡大写真



鉄刺布目拡大写真

古墳遺構出土遺物(2)

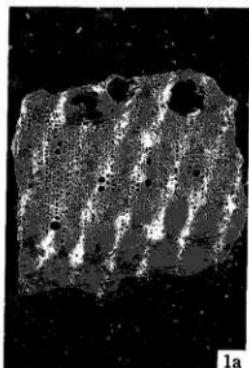
図版16



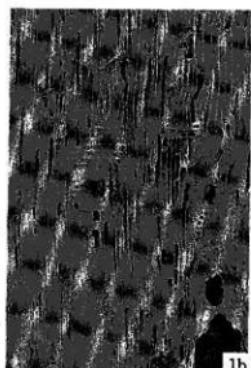
1. 布片（細）
2. 布片（粗）
3. 布片（細）
4. 布片（粗）
5. 布片（細）の断面
6. 布片（粗）の断面
7. 布片（細）の断面
8. 布片（粗）の断面

5mm : 1-2
2mm : 3-4
200 μm : 5-6
100 μm : 7-8

鉄剣付着布片顕微鏡写真



1a



1b



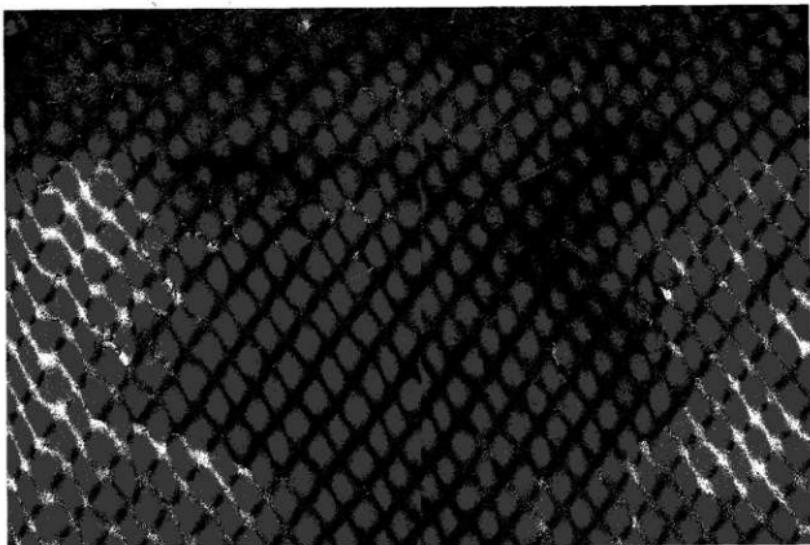
1c

1. トネリコ属 (剣の柄材(表))
a : 木口, b : 柾目, c : 板目

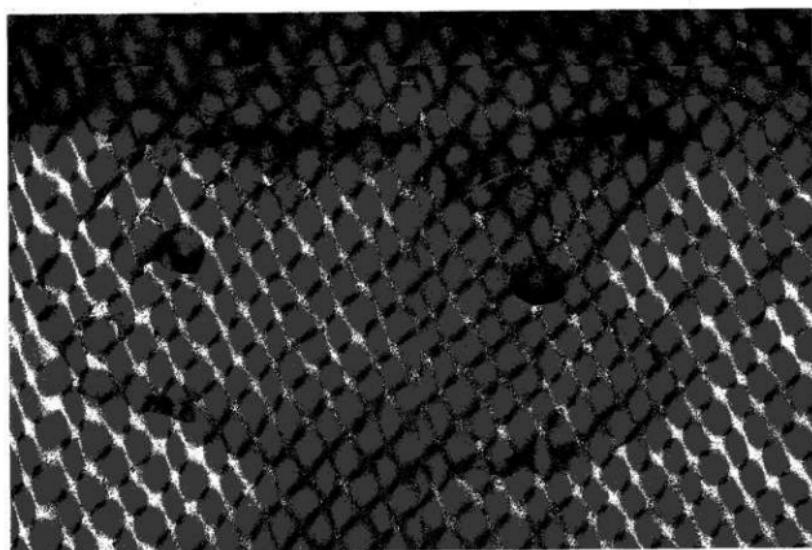
— 200 μ m : a
— 200 μ m : b, c

鉄剣付着木材顕微鏡写真

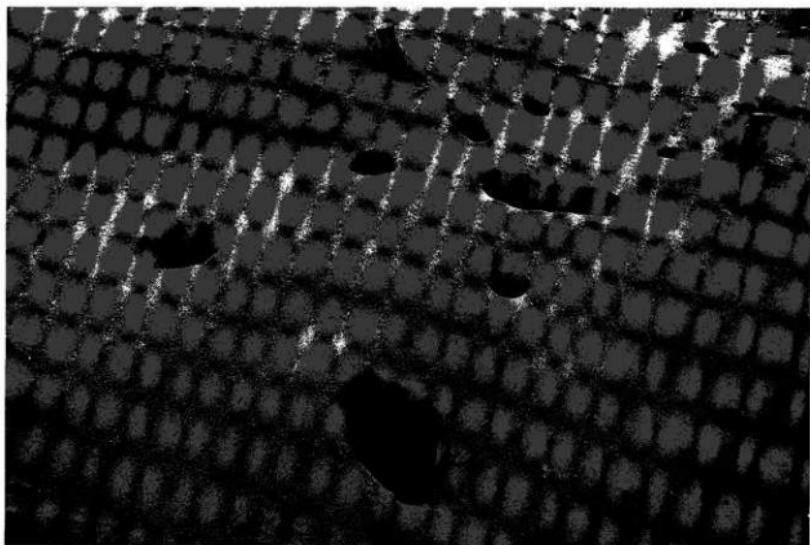
図版18



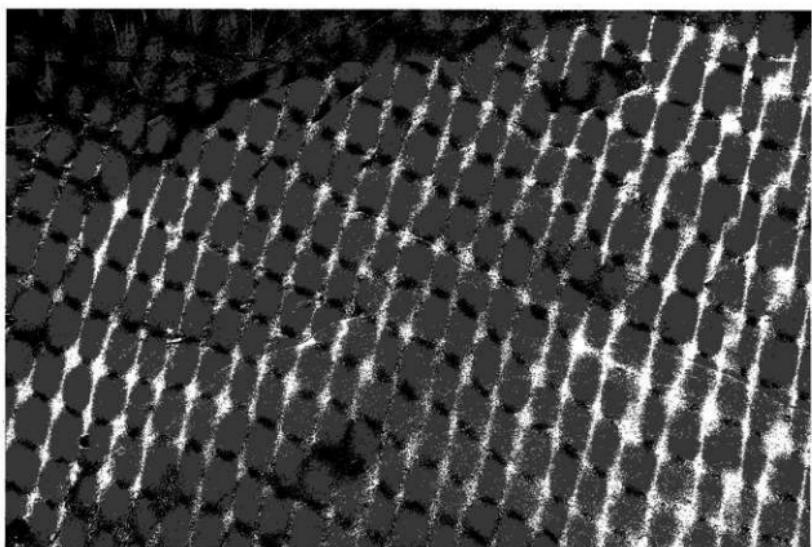
a SH1 炭化材出土状況（北から）



b SH1（北から）

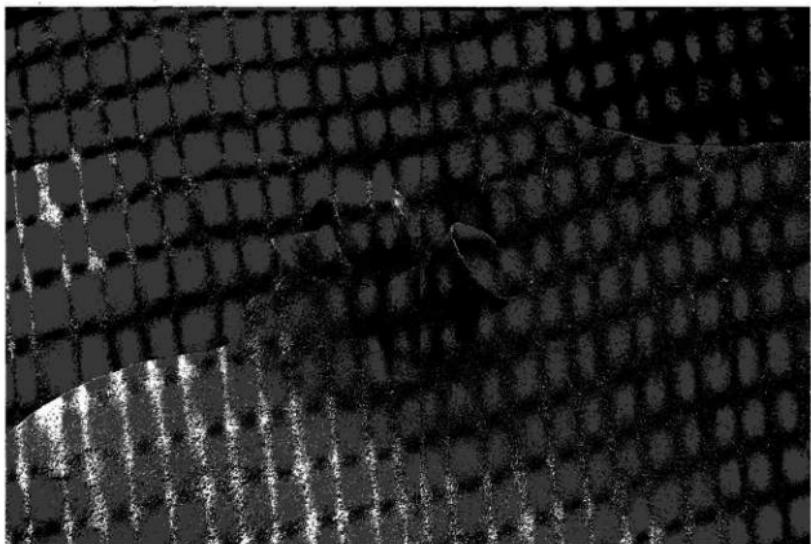


a SB1 (南から)

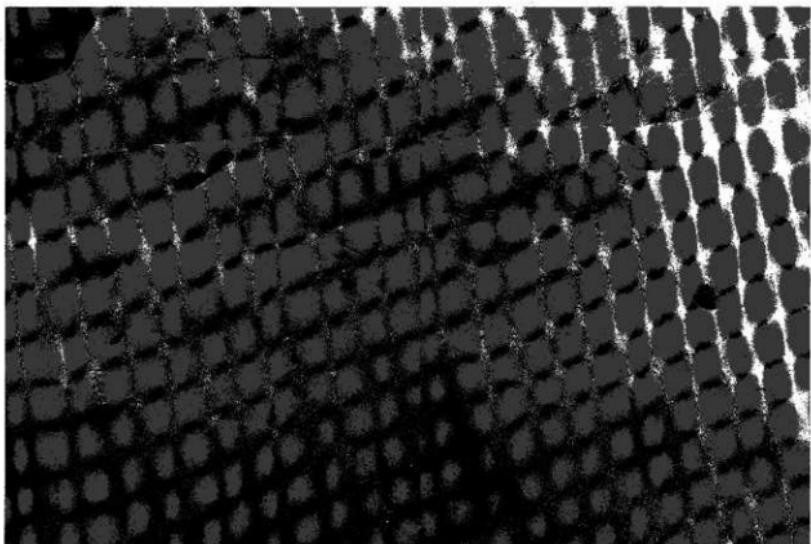


b SX1 (北東から)

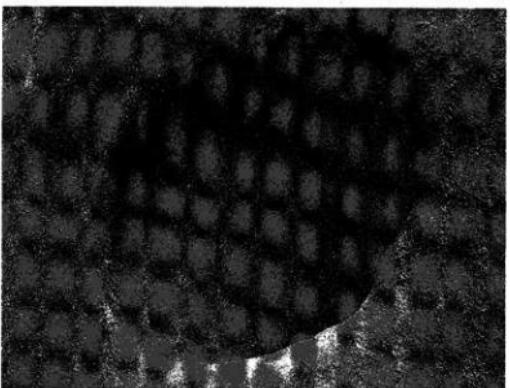
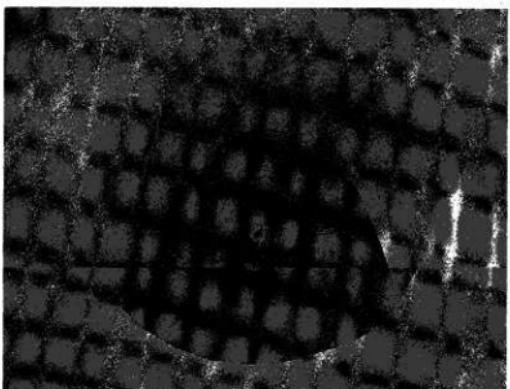
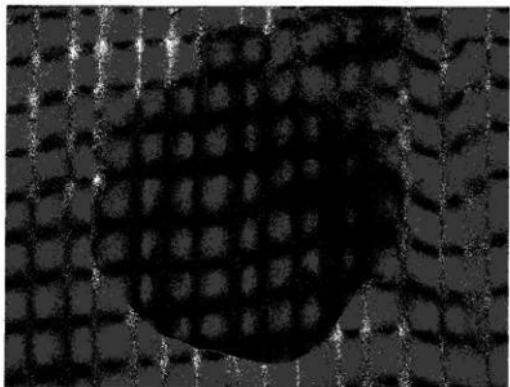
図版20



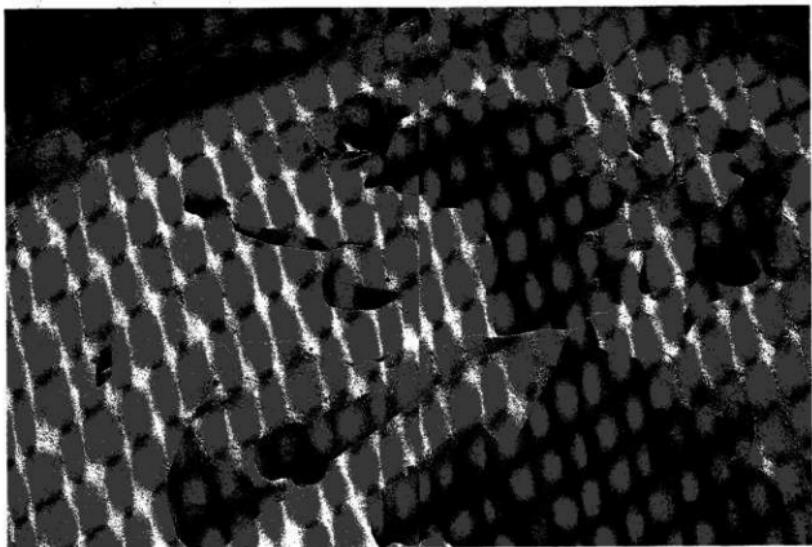
a SX1 土器出土状況（南東から）



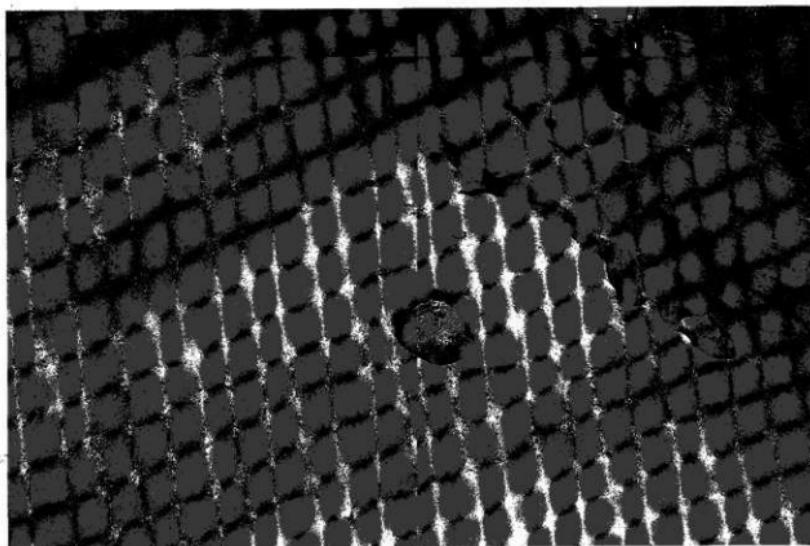
b SH2（南東から）



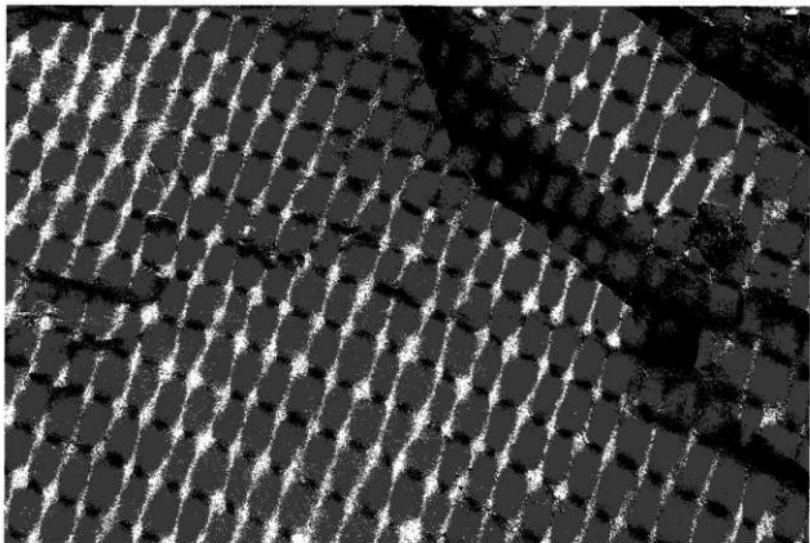
図版22



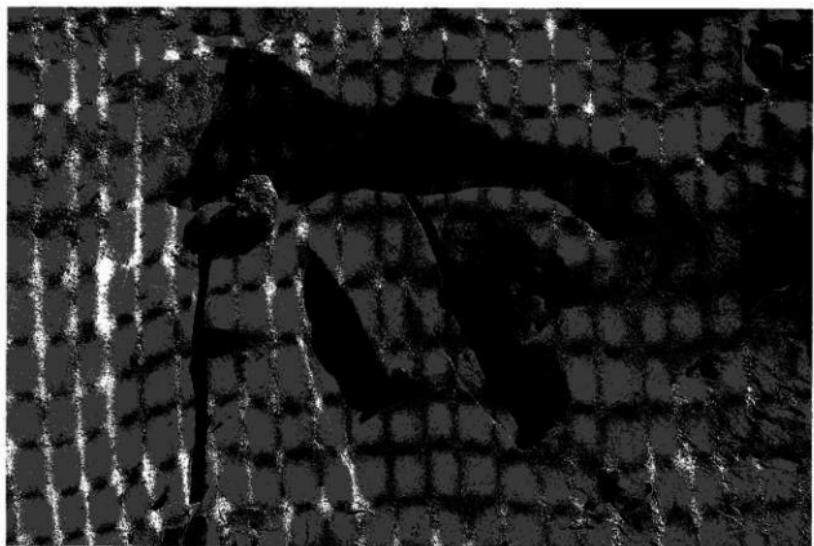
a SH3 (北から)



b SX2 (東から)

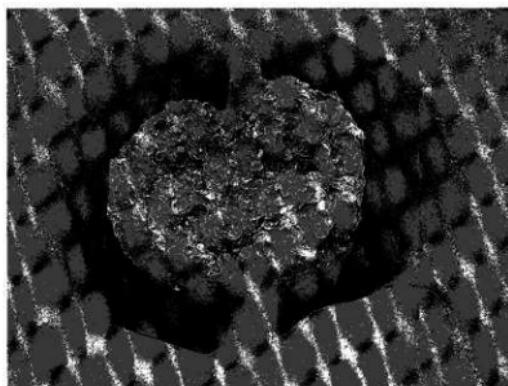


a SX2 土器だまり（東から）

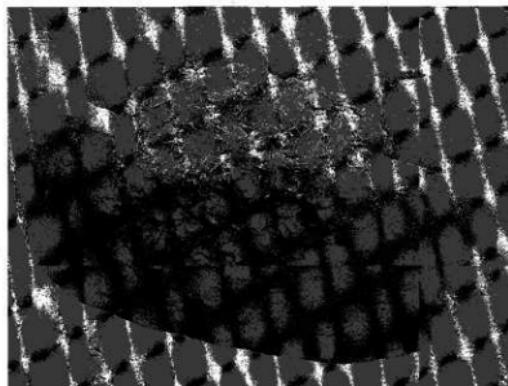


b SX3 (北から)

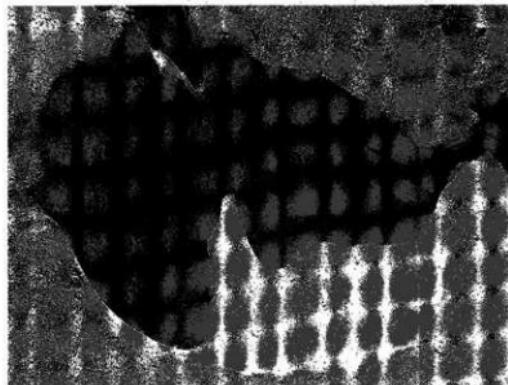
図版24



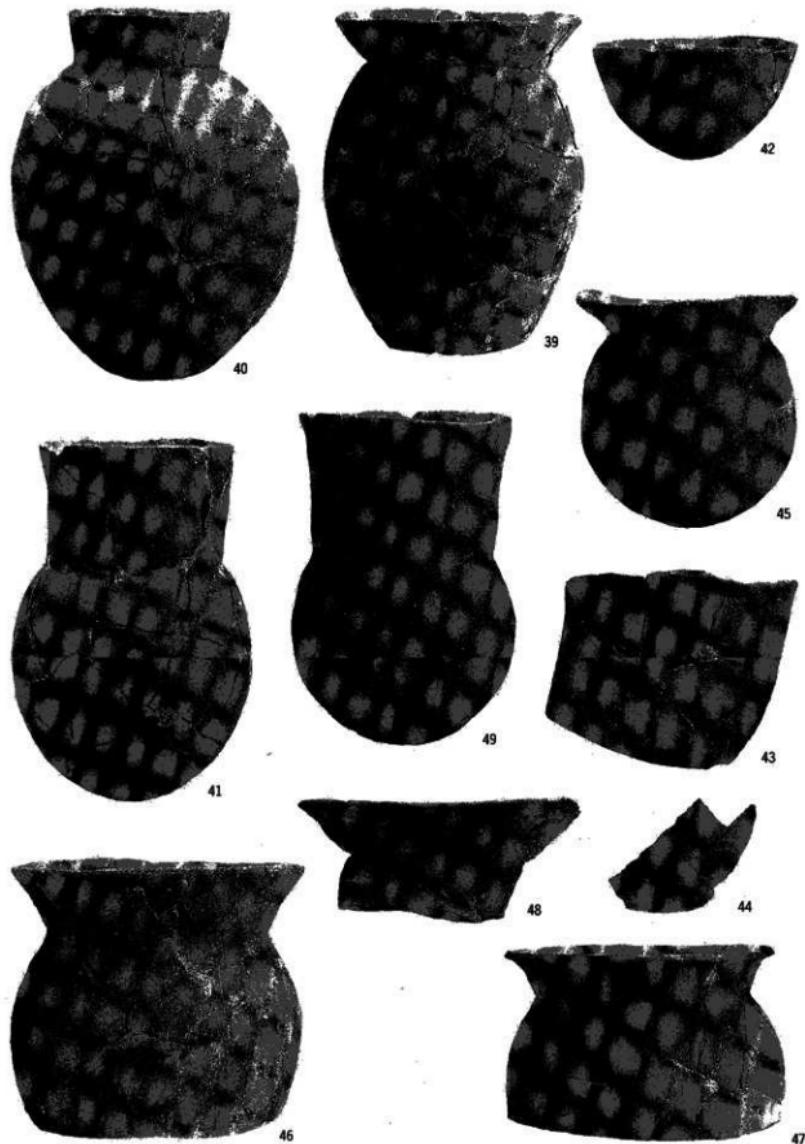
a SK4 (北東から)



b SK4 貝層出土状況
(東から)

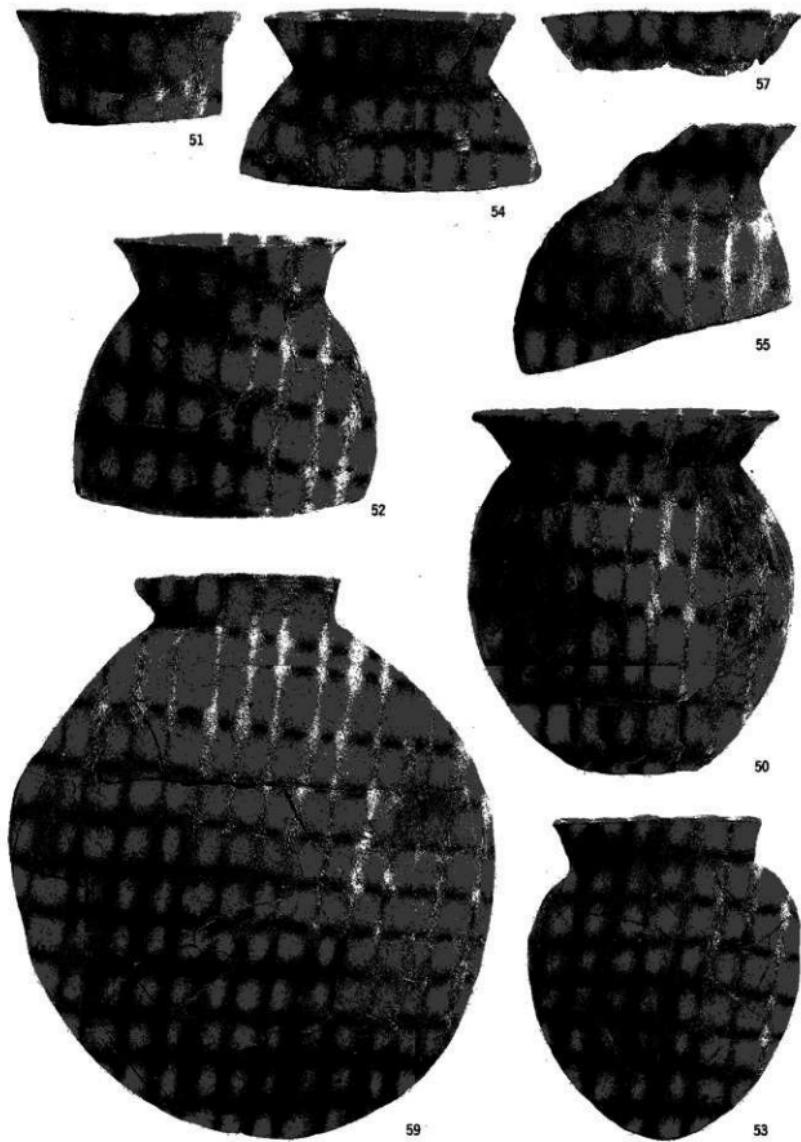


c SK5 (北東から)

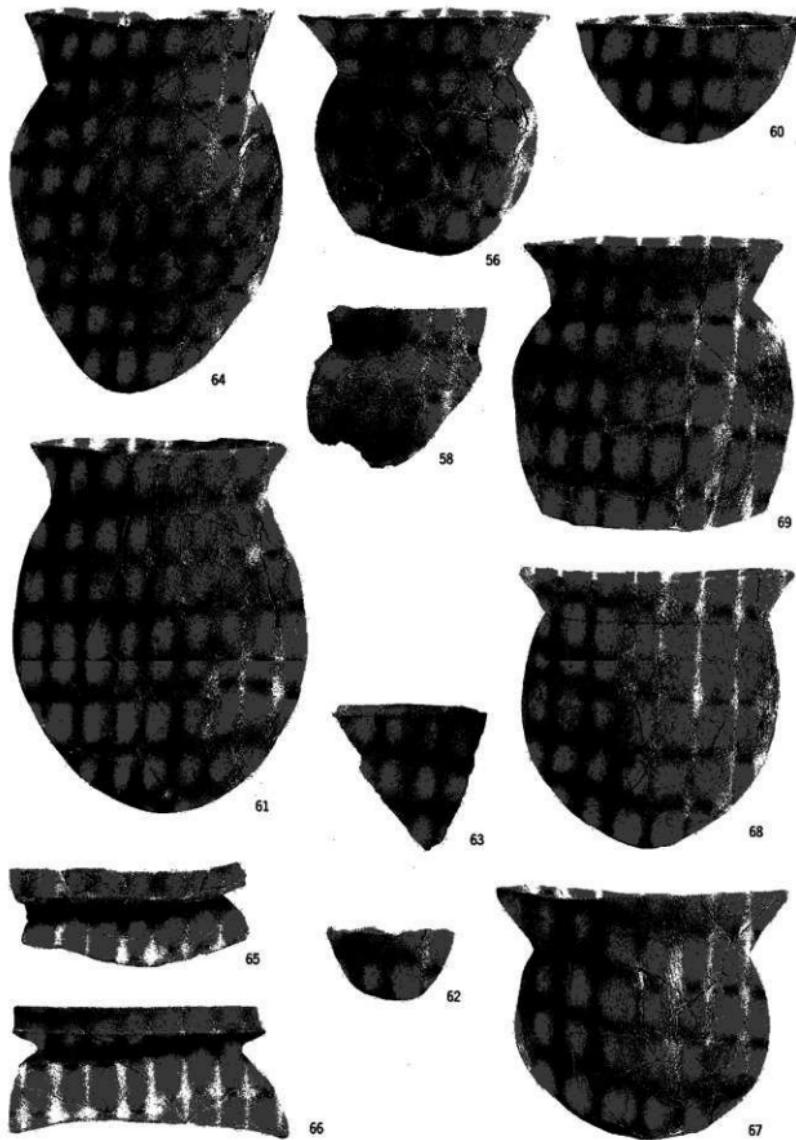


その他の遺構出土遺物(1)

図版26



その他の遺構出土遺物(2)



その他の遺構出土遺物(3)

図版28



70

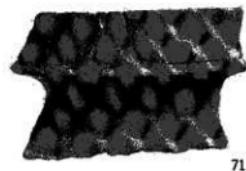


74

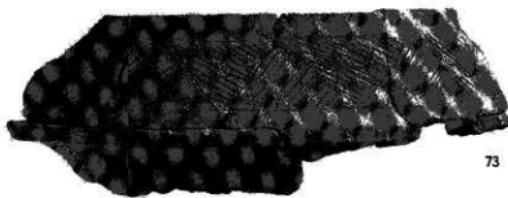
76



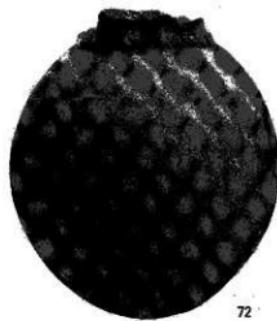
75



71



73



72

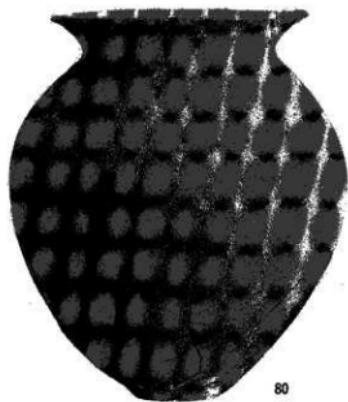


77

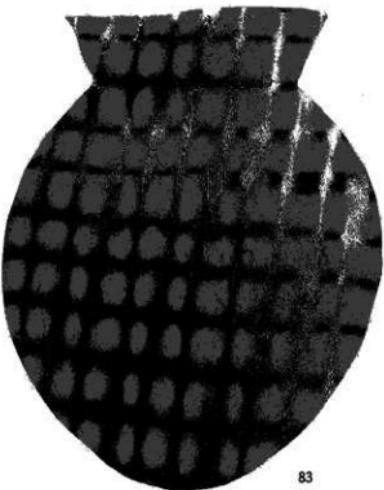


78

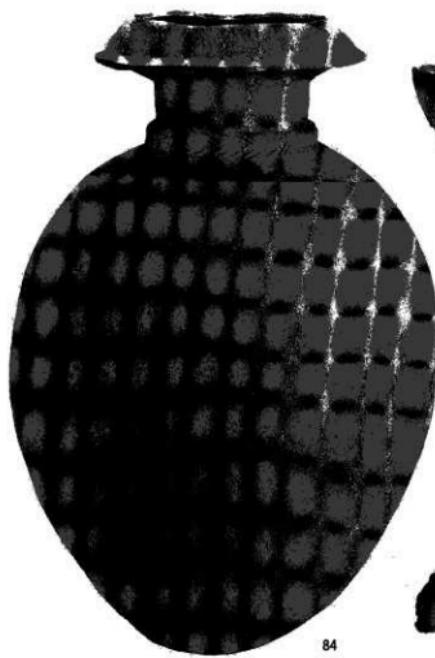
その他の遺構出土遺物(4)



80



83



84



79



81



82



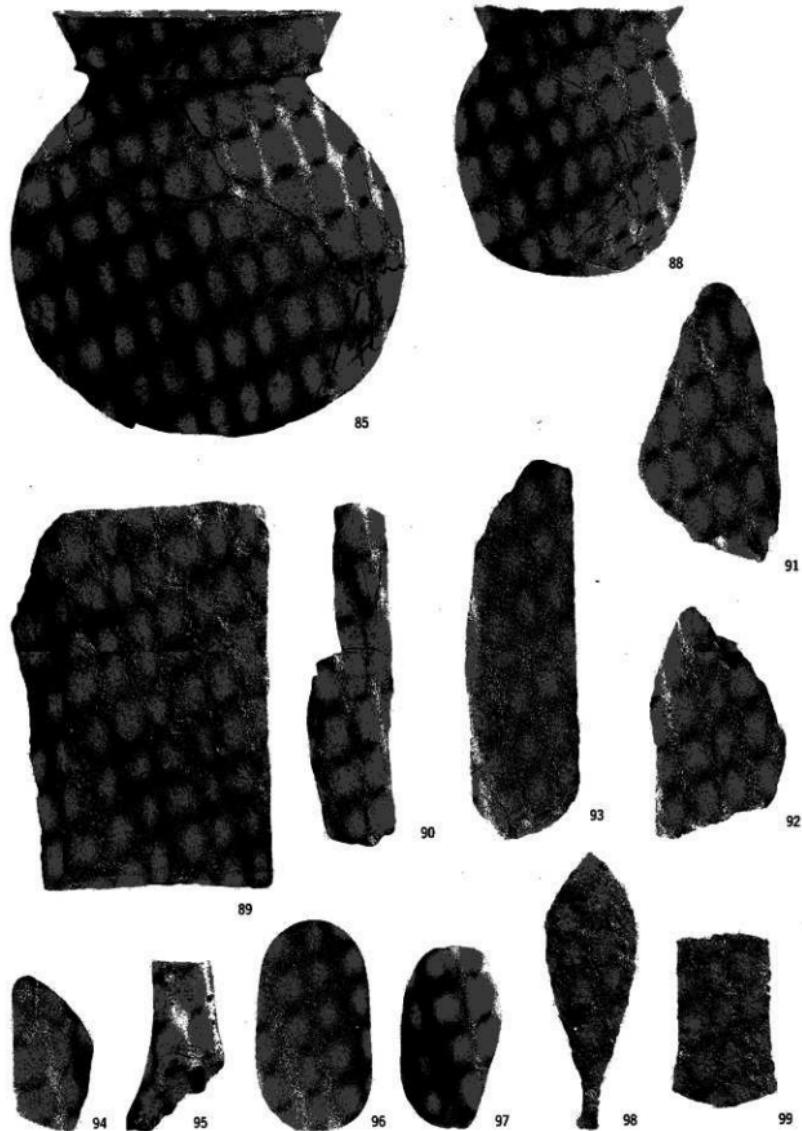
86



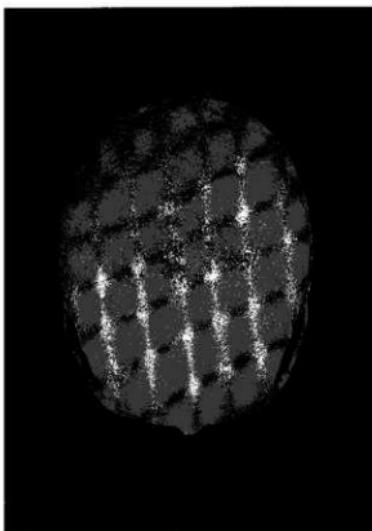
87

その他の造構出土遺物(5)

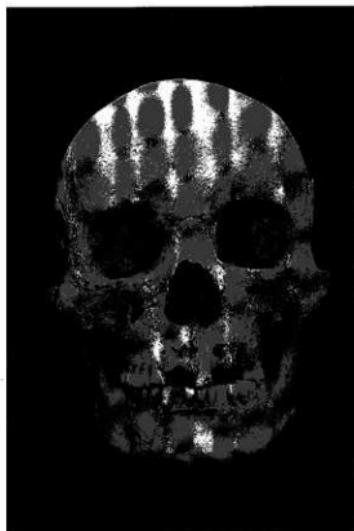
図版30



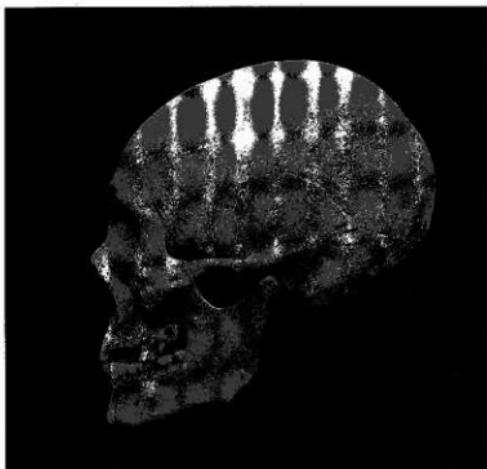
その他の遺構出土遺物(6)



頭蓋上面 (Superior view of the skull)



頭蓋正面 (Frontal view of the skull)

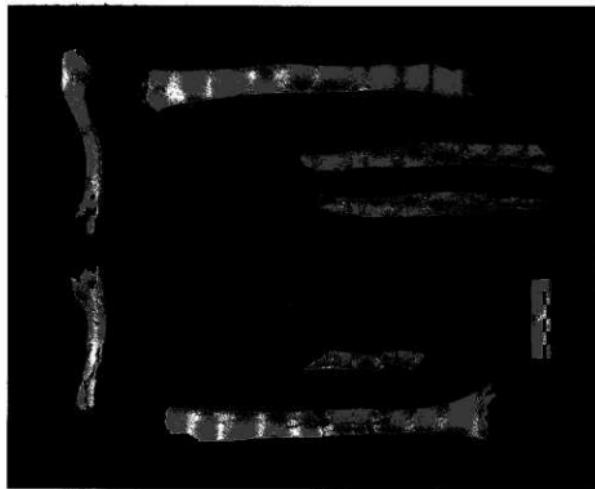


頭蓋側面 (Lateral view of the skull)

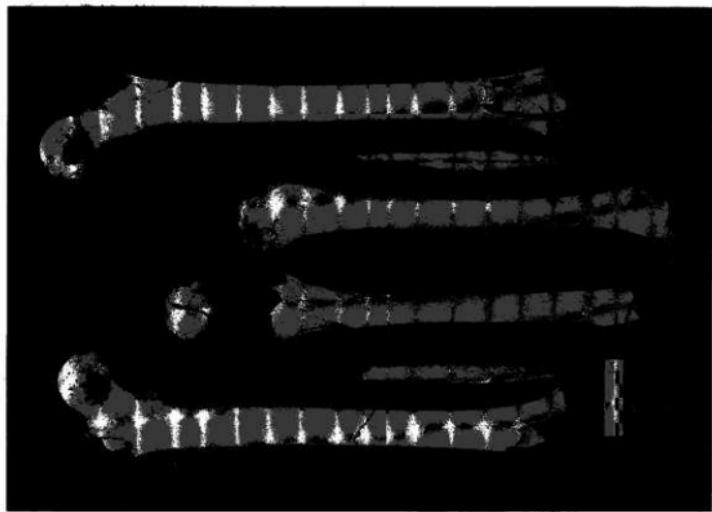
成岡第2号古墳出土人骨 (男性・老年)

(The Narioka skeleton excavated from the Narioka Tumulus No. 2, senile male)

図版32



上肢骨 (Bones of the upper limb)



下肢骨 (Bones of the lower limb)

成岡第2号古墳出土人骨 (男性・老年)

(The Narioka skeleton excavated from the Narioka Tumulus No. 2, senile male)

報告書抄録

ふりがな	なりおかみちてんいせき 一ひろしまあきくなかのひがしにちょうめしょざい一						
書名	成岡A地点遺跡 一広島市安芸区中野東二丁目所在一						
副書名							
卷次							
シリーズ名	財団法人広島市文化財団発掘調査報告書						
シリーズ番号	第6集						
編著者名	荒川正己, 田村規充						
編集機関	財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課						
所在地	〒730-0812 広島県広島市中区加古町4番17号 アステールプラザ内						
発行年月日	西暦2001年3月23日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号
なりおかみちてんいせき 成岡A地点遺跡	ひろしまけんひろしまあきく 広島県広島市安芸区 なかのひがしにちょうめ 中野東二丁目	34107	—	34° 23' 14"	132° 34' 20"	19990721 20000225	1,100m ² 一般国道2号（東 広島バイパス）建 設工事に伴う埋蔵 文化財発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
成岡A地点遺跡	古墳 集落	古墳時代 弥生時代	古墳 住居跡 掘立柱建物跡1棟 土坑 テラス状遺構3か所	3基 3軒 1棟 5基 3か所	弥生土器 土師器 鉄器 石器 玉類	古墳時代初頭の古墳 第2号古墳石棺内から 人骨出土	

(財)広島市文化財団発掘調査報告書 第6集

成岡A地点遺跡

—広島市安芸区中野東二丁目所在—

2001年3月

編集発行 財団法人 広島市文化財団
〒730-0812 広島市中区加古町4番17号
TEL (082) 248-0427

印 刷 電子印刷株式会社
〒730-0853 広島市中区堺町一丁目1番5号